柳を環にして送る、恨ならすや、到荊臺湖南の鄰國を湖北とす、此の湖北荊州府に荊臺あり、『孔子家語』に楚王荊臺に遊ぶ、司馬子祺之を諫むと、客は湖南より湖北へ赴くこと知るべし、定知決定して知る、行路春愁裏其の途中に於る客の情懷、故郢城邊見落梅江陵は楚の郢地、秦に江陵縣、現今の荊州府を置く、縣界に故郢城あり、落梅は梅實にて梅花にあらず、國の存亡をも懷古すべく、又時の速なるをも感慨すべしとなり、

【評論】此の篇、沅水、荊臺、故郢城、柳條、落梅、等の文字注意して讀むべきなり、

靈巖寺

館娃宮畔千年寺　水闊雲多客到稀
聞說春來倍惆悵　百花深處一僧歸

趙嘏

館娃宮畔千年の寺、水闊く雲多くして客到る稀なり、聞く說く春來倍す惆悵すと、百花深き處一僧歸る。

【句釋】靈巖寺は吳縣の西南三十里に在り、舊秀峯寺と名く、梁の天監中に吳の館娃宮の地を以て靈巖寺と爲す、館娃宮畔千年寺吳王は館娃宮を築き、車騎路を夾んで盛んなりしも、梁王

は寺を造りて、法鼓林に響かしむ、千年は梁以後を云ふ、蓋し大數なり、水闊雲多客到稀街頭の寺と異なり、香火の女兒輩は山なるが故多く到らざるなり、聞說春來倍惆悵惆悵の二字何人の惆悵か判然せず、寺僧が惆悵すと見ては佳ならず、一般の人に係て見るが可ならん、百花深處一僧歸一僧は起句の千年に應對す、百花に一僧の字が切なりと見る者は暗し、

【評論】此の篇、寧齋の解に結句百花深處は館娃宮に緊接し、一僧歸は客到稀に緊接すと、此の解や甚だ善、詩の一氣貫成、口に上り易きこと言を待ず、

柳枝

和風煙雨九重城　夾路春陰十萬營
惟向邊頭不堪望　一株憔悴少人行

薛能

和風煙雨九重の城、夾路春陰十萬の營、惟邊頭に向て望むに堪へず、一株憔悴人行少なり、

【句釋】柳枝は薛が本集に「折楊柳」とある、十篇あり、今其の一篇を取る、自序に曰く乾符五年、許州刺史と爲る、幕中の賓客と酬宴す、因て部妓小女をして楊柳枝を作りて歌はしむ、楊

柳枝新聲と名くる者此れなり、和風は春日の風、「風ヲ和スル」と訓ずるは今從はず、煙雨九重城宮城を遶る楊柳を言ふ、夾路これは路を夾むと訓む、春陰十萬營軍營を遶る楊柳を言ふ、周亞夫が營中に柳を種し事、惟向邊頭宮城と軍營との外、邊鄙の地、不堪望柳あるも望見に忍びざるなり、一株憔悴少人行一株の柳が邊地に在ると言ふは一人の小官吏が邊地へ行くと言ふの意なり、九重に遠く、近衞師團に遠く、良とに憐むべきなりと自ら柳に比して悲しむ、少は一の誤寫ならんと想像す、一人行は作者一人が邊地の官に赴むけばなり、

【評論】此の篇、楊柳に托して自家の身分を言ふ、其の意、人を動かすに足る、

自遣

陸龜蒙

數尺游絲墮碧空
年年長是惹春風
爭知天上無人住
亦有春愁鶴髮翁

數尺の游絲碧空より墮つ、年年長く是れ春風に惹る、爭でか知らん天上人の住すること無きを、亦春愁鶴髮の翁有らん、

【句釋】●●自遣は陸の自注に曰く、震澤の別業に在て作る、病未だ平かならず、田舍に臥し、農

夫未耜を以て相聒し夜分眠らず、百端懷を興して、思益す緒なし、因て四句の詩、三十絶を累ぬ、陸は多く田を有す、平田にて雨の爲め江と通ずるとあり辛苦せしと言ふ、數尺游絲空中にチラチラと目に輝き絲の如くに見ゆるものを游絲と云ふ、墜碧空地より湧くとは言へず、故に空より墜つと言ふ、年年長是惹春風四時皆此の游絲を見る、春殊に多し、爭知は何ぞ知んと略同じ、天上無人住人住せざると思ひしは謬りにて實は人の住するを知るとの意、亦有春愁鶴髮翁年年春風に此の游絲の白きを墜すを見れば、天上にも亦春愁を抱く白頭の翁住するなるべし、游絲を白髮と見做すなり、

【評論】此の篇、奇警頗る凡想を脱す、陸其の人尋常詩人にあらざるを知るべし、苕溪曰く此の詩、思清く語奇にして前人の窠臼に落ちずと、

華陽巾

蓮華峯下得佳名
雲禍相兼上鶴翎
須是古壇秋霽後
靜焚香炷禮寒星
蓮華峯下佳名を得たり、雲禍相兼て鶴翎に上る、須く是れ古壇秋霽の後、

靜に香炷を焚て寒星を禮すべし、

【句釋】華陽巾梁の陶弘景、句容縣勾曲山に隱る、金壇華陽天と名く、山中、館を立て華陽眞逸と號し、又華陽の陶隱居と云ふ、弘景發明する頭巾を華陽巾と名く、蓮華峯は華山の陽に在り、此の巾、形を蓮華峯に法とる、得佳名好き名であると云ふ、雲褐は仙人の衣服、相兼上鶴翎仙人の服と仙人の頭巾とを相兼著け以て鶴の翎に上り東西に飛翔する、須是古壇秋霽後寒星を禮する、秋霽の夜を以て最とす、靜焚香炷禮寒星此の星を祭るは印度婆羅門教徒より延て支那の道士に及びしなり、佛教徒の之を祭るは惡僧が婆羅門の所作を學ぶなり、地藏菩薩など云ふ佛教の愛敬者は實は星の神なり、

【評論】此の篇、華陽巾を咏じて其の內容は陶弘景を咏せしもの、弘景も佛と仙とを合一したる宗教家にて勝力菩薩の異名なり、

秋色

吳融

染不成乾畫未消　霏霏拂拂又迢迢
曾從建業城邊過　蔓草寒煙鎖六朝

染て乾くことを成さず畫て未だ消せず、霏靡拂拂又迢迢、曾て建業城邊より過ぎ、蔓草寒煙六朝を鎖す、

【句釋】秋色は秋の景色なり、他に意味なし、染不成乾楓樹などを染め出して其の色の乾かざるなり、畫未消渾て物を紅色とするを畫に譬ふ、霏霏は雲の起る貌、拂拂は浮塵の起る貌、迢迢は何處までもの意、曾從建業城邊過今日の江蘇省江寧府是れ卽ち建業城なり、蔓草寒煙鎖六朝六朝は又南北朝と云ふ、吳と東晉と宋と齊と梁と陳との六朝は悉く建康、建業を都としたるなり、今日は古の繁華なく蔓草寒煙寂寞なりと云ふ、

【評論】此の篇、古都の秋色を叙し感慨を言はずして限り無き感慨を寓す、韋莊、六朝詩に及ばざるも亦以て誦すべきなり、王維の九日より此に至る十九首は第三句に遙知、近得、那知、縱然、應レ有、自是等の虛字を用ひて而して結句之に應ずる格、

酧李穆

劉長卿

孤舟相訪至天涯　萬轉雲山路更賒
欲拂柴門迎遠客　靑苔黃葉滿貧家

孤舟相訪て天涯に至る、萬轉の雲山路更に賒なり、柴門を拂うて遠客を迎へんと欲すれば、青苔黄葉貧家に滿つ、

【句釋】酧は酬なり、李穆は劉の女婿、李は浙西に在り劉を訪んと欲し先づ詩を寄す、乃ち是の詩を作り之を迎ふ、孤舟相訪至天涯李が浙西の桐盧を發し、舅の劉を歙州に訪んと欲す、涯は五佳の韵、四支、五歌、六麻、共通す、萬轉雲山路更賒三百里も隔つる遠路を言ふ、欲拂柴門迎遠客遠來の客を迎へんと欲して家を掃除する、青苔黄葉滿貧家門の内外青苔や紅葉滿ち何等の饗應も爲す能はずとなり、

【評論】此の篇、氣味深厚にして溫情溢るる如し、中唐絶句、此の篇を以て上乘と爲す、

休日訪人不遇　韋應物

九日驅馳一日閒　尋君不遇又空還
怪來詩思清人骨　門對寒流雪滿山

九日驅馳して一日閒なり、君を尋て遇はず又空しく還る、怪しみ來る詩思の人骨に清きを、門は寒流に對し雪は山に滿つ、

【略傳】韋應物は周の逍遙公夏の後、侍價令儀を生む、令儀、鑾を生む、鑾應物を生む、天寶の時游幸に扈從す、永泰中洛陽丞京兆府戸曹に任ず、大曆十四年鄠縣の令より、制、櫟陽の令に除せられ、建中二年、前資に由て比部員外に除せらる、出て除州江州の刺史と爲る、闕に赴くに及んで左司郎中に改む、貞元の初、又蘇州に刺たり、後人、其の集を韋蘇州集と曰ふ、

【句釋】休日訪人不遇蘇州集に訪二王侍御一不レ遇に作る、侍御は王建なり、休日は漢制に五日一たび下りて休浴す、又暇日を休日と曰ふ、九日驅馳生計の爲め奔走する之を驅馳と曰ふ、今其の官事に奔走を曰ふ、一日閒十日間の中、一日僅かに私の身と爲る、尋君不遇又空還空の一字遇はざるを表はす、怪來詩思清人骨平素王建の詩を讀む良とに人の骨へ透るかと怪む程、清秀なり、何に因て然るやと每に怪しむ、今日之を訪うて始めて其の理あるを知る、門對寒流雪滿山清思の清きは畢竟其の居の清きが爲であることを今日始めて平素の疑を散せしなり、

【評論】此の篇、雪の詩として古今に傑出せるもの、蓋し清士と道ふべし、俗人と言ふべからず、

湘江夜汎　熊孺登

江流如レ箭月如レ弓　行盡三湘數夜中

無奈子規知向蜀　一聲聲似怨春風

江流箭の如く月は弓の如し、行き盡す三湘數夜の中、奈んともする無し子規蜀に向ふことを知り、一聲聲春風を怨むに似たり、

【句釋】湘江夜汎汎は泛なり、舟にて湘中を過る、江流如箭流の速きこと箭を射る如きなり、月如弓初三の月、弓と箭と相應ず、行盡箭の如く速ければ忽ち行き盡す、三湘は湘潭と湘鄉と湘源となり、數夜中速きこと箭の如きも三四夜は經過する、岳陽より蜀江に到る、無奈は無○那と同じ、俗語の「ドウシヤウモナイ」の意味、子規知向蜀我が蜀に向ふを子規が知て頻むが如きも、其れは奈んともする無し、昔、蜀の望帝が鼈靈の爲め弑せられ、其の魂化して子規と爲り、今に到るまで怨恨を抱くとの傳說に依る、一聲聲は一聲一聲と云ふが如し、似怨春風春風の便を得て今我が速かに蜀に到るを得るは、卽ち子規が我に便なる春風の順なるを恨むに似たるなり、子規は元來夏日に鳴くものなるが、燕と異なり、他國へ歸る鳥ならず、故に春晚、又秋風にも鳴く時あり、

【評論】此の篇、子規は蜀へ行不得、客は蜀へ迅速に行き得、何ぞ怨まざるを得ん、鳥に托して望帝を言ふ、巧妙の作と謂つ可し、

贈俟山人

一見清容愜素聞　有人傳是紫陽君
來時玉女裁春服　剪破湘山幾片雲

清容を一見して素聞に愜ふ、人有り傳ふ是れ紫陽君と、來時玉女春服を裁す、湘山幾片の雲をか剪破する、

【句釋】俟山人は傳不詳、一見清容愜素聞平素其の名を聞て、其の人を見んことを願ひしに今日相見て平素慕ふ所に違はざるなり、有人傳是紫陽君紫陽君は紫陽眞人、卽ち古の仙人、俟山人は今日の紫陽眞人なりと人が傳語する、來時山を出で人間に來る時、玉女裁春服眞人に侍する玉女が裁縫したる春服を著せるならん、剪破湘山幾片雲湘山の雲を剪て裁したるや、尋常人間の絹布の類にあらず、湘山は泉州に在る仙人の住所と傳說するなり、

【評論】此の篇、素と清と紫と玉と雲との文字使用法を後世の學詩者は知るべきなり、

寫情　李益

水紋珍簟思悠悠　　千里佳期一夕休
從此無心愛良夜　　任他明月下西樓

水紋珍簟思悠悠、千里の佳期一夕に休す、此より良夜を愛するに心無く、任他あれ明月の西樓に下ることを、

【略傳】李益字は君虞、涼州武夷郡姑臧の人、大歷四年登第す、心疾ありて用ひられず、後、幽州の劉濟營田が副使と爲て詩を獻ず、「恩を感じて地あるを知る、望京樓に上らず」の句あり、憲宗召して秘書少監と爲す、才を負うて諫官を凌轢し、幽州に暴す、時に怨望の語、秩を降る、俄かに復官し太子賓客に遷る、散騎常侍に轉じ、後、禮部尚書と爲り、致仕して卒す、

【句釋】寫情は婦と死別せしに就て其の情思を寫せしなり、益が婦を霍小玉と云ふ、水紋は水の模樣、珍簟は「タカムシロ」此の珍簟に坐して思悠悠死婦を思うて其の思ひ際限なきを悠悠と云ふ、千里佳期一夕休益は他方に官游して千里の遠きに在り、然るに佳期に於て一夕悠悠と懇話せんと樂しみしに何ぞ料らん、一夕に幽冥路を異にせんとは、萬事休する所以、從此無心愛良夜樂しまんと思ひし良夜は良婦逝て二人して愛賞する能はず、殘りし余一人何ぞ良夜を愛

するに心あらん、任他は俗語の「勝手ニシロ」と云ふ意味、明月下西樓月の西樓に下るは人に賞せられん爲めならんも、余は之に關せず、月は來去自由にせよとなり、益は三度娶る二度は盧氏、其の次は營十一が娘なり、又益は妬癡の疾あり、灰を散じて戸を扃し、以て妻妾を防ぐの說あるも、此の詩は此の意にあらず、

【評論】此の篇、哀情を寫して神に入る、中唐の絶句、實に李庶子を以て第一と爲すは古今の定論、此の篇の如きは宋人の百鍛千錬するも能はざる所のものなり、

竹枝　　劉禹錫

日出三竿春霧消　　江頭蜀客繫蘭橈
欲寄狂夫書一紙　　家住成都萬里橋

日出て三竿春霧消す、江頭の蜀客蘭橈を繫ぐ、狂夫に書一紙を寄んと欲すれば、家は住す成都の萬里橋、

【句釋】竹枝は舊注に憲宗王叔文の事を以て、禹錫を貶し朗州の司馬と爲す、朗州は夜郎に接す、諸夷の風俗陋甚し、家家巫鬼を喜び、每祠、竹枝を歌うて鼓吹裴回す、其聲傖儜たり、禹錫

謂く屈原が沅湘の間に居る、九歌を作り楚人をして以て神を迎送せしむ、乃ち其の聲に倚て竹枝詞十餘篇を作る、是に於て武陵の夷俚、悉く之を歌ふ、日出三竿天文志に日出三竿其の色、黄赤暈と、三竿は旭日出て竿を三つ續くる程、高く昇りたる意、春霧消日出るが故に春霧消し春霧消するが故に日出るなり、婦が夫を思うて夜眠らず曉天に達するを云ふ、江頭蜀客繫蘭橈婦が曉日に樓を出で見れば江頭には蜀より來る商客が蘭橈「アララギノカヂ」を岸に繫ぎて居るを見る、欲寄狂夫書一紙婦が思ふ此の商客に寄托して一信を傳へ早歸を促がさんと、妬心より發する言なるが故に良人などと言はずして狂夫と言ふ、家住成都萬里橋夫の家卽ち寓居の地は蜀の成都府萬里橋に在る、萬里橋は浣華溪の東に在り、孔明が吳使を送り此に至りて曰く萬里の行此れより始まると、因て名を得、狂夫が此の成都に妾が外に花を看て樂んで居るならん、

【評論】　此の篇、主として情語に在り、賓として風土に在り、竹枝詞の祖として禹錫の本領は此に在り、要するに此の題目は時代の俗謠を美化して出し以て其の土に適せるを貴ぶ、語俗にして亦致を失なはず、利人鈍人も容易に感じ易きに在り、宋元明淸の諸家、竹枝を咏ずる者、禹錫を祖述して、以て一家の旗を樹つるなり、

聽舊宮人穆氏歌

曾隨織女渡天河　記得雲間第一歌
休唱貞元供奉曲　當時朝士已無多

曾て織女に隨て天河を渡る、記得す雲間第一の歌、唱ふるを休よ貞元供奉の曲、當時の朝士已に多きこと無し、

【句釋】　舊宮人は順宗の父帝、德宗朝に仕へし宮女、卽ち穆氏なり、此の宮人の歌を聽て作る　曾隨織女渡天河織女は天上の星の名、今穆氏に譬へて言ふ、天河を渡る者は劉禹錫なり、鴻齋は穆氏が織女に隨て天河を渡ると解す非常に誤る、劉が穆氏に隨て宮中に謁するなり、記得は劉が記得なり、穆氏が記得にはあらず、雲間は宮中なり、宮中を天河と爲したるゆゑ、雲間の字を用ふ、第一歌多數宮女中第一の歌者なることを今尙記憶する、休唱貞元供奉曲貞元は德宗の年號、其の時歌うた供奉卽ち天子の爲めに奏する曲を再唱するを休よ、當時は德宗の時、朝士已無多德宗に仕て貞元年間奉公せし者は我の外に多くは死してあらず、故に若し供奉曲を聞く時は我は涙を流さざるを得ず、禹錫は貞元年間は大に得意なりしが、謫處に在ること二十四年

にして歸る、穆氏も年老て宮を退きしが、當時の事を知る者は穆氏なり、故に歌ふを休よ、貞元は二十年の久しき種種の事ありて之を聞けば感想も種種起る、故に供奉曲を奏するな、

【評論】 此の篇、宮人に托して以て我が感想を叙す、後世學詩者は、織女、天河、雲間、貞元、朝士、等の組織法を知らざるべからず、劉夢得が一世の才人なりしことも亦窺ふに足る、

訪隱者不遇

竇鞏

籬外涓涓澗水流　槿華半照夕陽收
欲題名字相訪　又恐芭蕉不耐秋

籬外涓涓として澗水流る、槿華半照して夕陽收る、名字を題して相訪ふことを知らしめんと欲すれども、又恐る芭蕉の秋に耐へざらんことを、

【略傳】 竇鞏は竇常の弟なり、字は友封、世に囁嚅翁と號す、人と言ふ、口より出ざる若くなるを以てなり、祕書少監兼御史中丞と爲り、節度副史に終ふ、

【句釋】 訪隱者不遇隱者は隱君子なり、日本で言へば學あり德あり而かも官に仕へず幽處に棲む人なり、籬外涓涓水の「ソロソロ」流を涓涓と云ふ、槿華は木槿「ムクゲ」牽牛花の如く朝開き

夕に萎む、半照夕陽收夕陽が恰かも沒せんとする時、欲題名字知相訪家僮も居らざれば則ち來訪を知さしむる由無し、故に名字を題せんと欲するなり、又恐芭蕉不耐秋芭蕉の葉は風に弱くして縱ひ名を題するも、秋風に吹き破らるるを恐る、唐の懷素は芭蕉の葉及び柿の葉に字を書せしもの、古人多く此の事あり、

【評論】 此の篇、秋日なるが故に槿花と芭蕉を以て全篇の趣向を取る、幽趣閒澹、亦以て人に可なり、

重過文上人院

李涉

南隨越鳥北燕鴻　松月三年別遠公
無限心中不平事　一宵清話又成空

南は越鳥に隨ひ北は燕鴻、松月三年遠公に別る、限り無き心中不平の事、一宵清話又空と成る、

【句釋】 重過文上人院文上人は廬山に住す、三年以前に李涉此の院を過ぐ、今復過ぐ故に重と云ふ、南隨越鳥越は國名、南方ゆゑ暖氣なり、是を以て鷓鴣卽ち一名越鳥が多く棲む、北燕鴻燕

は「ツバメ」にあらず國名、古の幽燕は卽ち北方ゆゑ鴻雁が多く棲む、寒地なればなり、李始め廬山に在り、後、終南山に入る、其の後、峽中、吳越、瀟湘、洛下を流寓して、遂に少室山に隱る、詩は南北を言ふも、其の實東西も亦經過の地ならざるはなし、松月三年別遠公三年間上人と遇はず、故を以て松風蘿月を共賞する緣に背く、上人を以て遠公に比す、廬山なれば特に適切とす、無限心中不平事風塵に來往する者は誰か不平無からん、相遇ふ人も塵中の人にて塵外の人にあらざればなり、一宵清話又成空上人に遇うて僅かに一宵佛敎の玄談を聞く、是に於て心中の不平悉く空と成る、所謂塵念滅して道念生ずるなり、

【評論】　此の篇、唐人が寺觀に於る詩中、尤も淸佳なるものに屬す、李涉博士は尋常一樣の凡博士にあらざるなり、

題鶴林寺

終日昏昏醉夢間　忽聞春盡强登山
因過竹院逢僧話　又得浮生半日閒

終日昏昏醉夢の間、忽ち春の盡るを聞て强て山に登る、竹院に過ぎ僧に逢

て話するに因て、又浮生半日の閒を得たり、

【句釋】　鶴林寺は潤州の黃鶴山に在り、舊名は竹林寺、宋六朝の高祖、常に此の寺に遊ぶ、黃鶴あり飛ぶ、因て以て名く、終日昏昏醉夢間淸淨なる道念の明明ならざるを言ふ、昏昏は明明の反對、醉夢は醒覺の反對、塵事に奔走するが故に然り、忽聞春盡强登山强は俗語に「無理ニ」に當る、三月下旬なり、因過竹院竹林寺の舊名を知ればなり、逢僧話僧は必ず玄理を談じて、俗事を談せず、其の話や卽ち淸話なり、又得浮生半日閒浮生は人間なり、今日の語の人生なり、浮雲の如き身なれば浮生と云ふ、

【評論】　此の篇、寺觀の詩として甚だ有名とす、東坡の如きは傚うて曰く般勤昨夜三更雨、又得浮生半日涼と、到底此の原作の妙には及ばず、『竹坡詩話』に數貴人あり休日に遇うて歌舞を備へ、一僧院に燕し、酒間此の詩を吟じて得得たり、僧之を聞て笑て曰く尊官半日の閒を得て、老僧は却て三日を忙了す、此れ一日は供帳、一日は讌集、一日は洒掃するを言ふ、李涉知るあらば此の輩に三十棒を喫せしむべし、

宮詞

李商隱

君恩如水向東流　得寵憂移失寵愁
莫向尊前奏花落　涼風只在殿西頭

君恩は水の東に向て流るるが如し、寵を得ては移らんことを憂へ寵を失しては愁ふ、尊前に向て花落を奏する莫れ、涼風は只殿の西頭に在り、

【句釋】宮詞は前に辨せり、君恩如水向東流君恩は流水と同じ、往ては還らざるなり、得寵憂移失寵愁得失俱に憂愁、得れば愛の移らんことを心配し、失すれば愁ふるは勿論なり、憂は勞苦、愁は愁歎、莫向尊前尊は「タル」酒尊なり、奏花落梅花落は笛の曲名、古樂府に「念ふ爾が零落して風飈を逐ふことを、徒らに霜華のみありて霜實なし」此の曲を聞けば自然感情が強くなるに由て奏するなりと言ふ、涼風只在殿西頭涼風は秋風なり、涼風は字の如く冷、熱の反對、故に寵の衰へたるに譬ふ、君王の寵も未だ全く衰へたりと言はざるが、早や已に近づきたる模樣なり、殿西頭は近くして至り易きを言ふ、

【評論】此の篇、宮女の情想を叙して全く遺憾なし、句としては一、三、四の三句を靈妙と爲すが意としては第二句尤も能く情想を穿つ、東西の字照應の妙、亦言ふべからず、向二字を押

す、古人と雖も此れは是れ失なり、意味の轉換なく同字使用法は全く法にあらず、

將赴吳興登樂游原　杜牧

清時有味是無能　閒愛孤雲靜愛僧
欲把一麾江海去　樂游原上望昭陵

清時味あるは是れ無能、閒は孤雲を愛し靜は僧を愛す、一麾を把て江海に去らんと欲す、樂游原上昭陵を望む、

【句釋】吳興は今日の浙江省湖州府烏程縣治、樂游原は今日の陝西省西安府、古の京兆なり、清時は太平の世、有味是無能無能の人間卽ち余の如き者が太平の世には味があると言ふ、强て發するの言なり、側面は慷慨す、閒愛孤雲閒に無心の雲を愛す、靜愛僧靜は無心の僧を愛す、共に人間に希望を絶つの人、陶淵明の詩、孤雲獨無依と、依る無きが杜の意の存する所、欲把一麾江海去この句に就て異論あり、『野客叢書』に今人守郡之を建麾と謂ふ、蓋し顏延年の詩、屢薦不入官、一麾乃出守、の事を用ふ此れ誤なり、延年謂ふ一麾は乃ち麾の麾を指す、旌麾の麾にあらざるなり、杜牧の欲把一麾江海去の句有てより、始めて謬用、一麾此れより遂に

故事と爲る、馮集梧曰く、沈存中の所言此の如し、僕攷ふ唐人詩、杜子美、柳子厚、許用晦、獨孤及、劉夢得、陸龜蒙、皆一麾の事を用ふ、獨牧之、一麾を把て爲めに圭角を露はすと謂ふ、延年の意を失するに似たり云云、要するに牧之が一官を得て江海に去ると見れば、愚論千百悉く無用に屬す、樂游原上望昭陵昭陵は太宗を葬むる所、牧之の意、太宗の英主を慕ふに在り、樂游原は陝西の西安府、漢の宣帝の神爵三年に樂游苑を起す、亦樂游原と曰ふ、『西京雜記』に唐の太平公主、原上に於て亭を置き、游賞す、其の地四望寛敞、上巳重陽毎に士女此に就て祓禊す、車馬塡塞すと、以て其の游勝地たること知るべし、

【評論】　此の篇、牧自ら才を負ひ、兄の悰、時に隆盛なり、而して牧下位に居て心常に樂しまず、望昭陵は志を時に得ずして明君の世を思ふ、蓋し怨めるなり、首に清時と言は反辭なり、

鄭瓘協律

廣文遺韻留樗散　雞犬圖書共一船
自說江湖不歸事　阻風中酒過年年

廣文の遺韻樗散を留め、雞犬圖書共に一船、自から說く江湖不歸の事、風

に阻せられ酒に中られて年年を過ぐ、

【句釋】　鄭瓘は氏名なり虔が孫、協律は協律郎卽ち官名、漢代協律都尉を置く、晉に協律校尉と改む、後魏に協律郎、唐に協律郎、二人なり、六律六呂を和し、以て四時の氣、八風五音の節を辨ずることを掌る、廣文は瓘が乃祖、鄭虔なり、虔、廣文館博士と爲る、遺韻留樗散杜甫が鄭虔に贈りし詩に、鄭公樗散鬢如レ絲の句あり、牧之此の句に依る、樗散は樗櫟、散木と續く字にて無用の大木なり、繩墨にも中らず、規矩にも中らず、匠者顧みず、虔は詩書畫三絶、希世の偉人なるも僅かに協律の官に居る日本現今の高等官六七等に當る杜甫之を惜みて、此の贈言あり、牧之が瓘に贈るに、猶ほ甫が虔に贈る意を以て之を惜む、雞犬圖書共一船家財として有するもの、一船に收むるに足る、支那の官吏は古代より日本の豪商の如き者にて家財は十や二十の船には收まらざる也、然るに瓘は一船、其の人淸廉知るべし、自說江湖不歸事協律の官を辭し、以て江湖卽ち流浪の身と爲て再び官に歸らず、と自から說く、阻風世間の風波も、江水の風波も雙方に通ずる、種種と障りに遇ふことを阻風と云ふ、中酒過年年中は所謂中毒なり、氣隨氣儘にして年年を過ごさんとなり、

【評論】　此の篇、鄭を言うて、其の實自身の不平を漏すもの、瓘が微官を嫌うて江湖不歸の事

を說きしは實際ならんも、それは瓘の述懷にして牧之に關する事にあらず、直ちに其の言を以て詩と爲し之に贈るは、要するに自家の不平を漏ししのみ。

贈魏三十七　李羣玉

名珪似玉淨無瑕　美譽芳聲有數車
莫放燄光高二丈　來年燒殺杏園華

名珪玉に似て淨うして瑕無し、美譽芳聲數車あり、燄光を放ちて高きこと二丈ならしむる莫れ、來年杏園の華を燒殺せん、

【句釋】魏三十七其の人未詳、名珪珪は玉なり、然るに似玉と言ふ、玉は總名にて、珪は別名なればなり、古、諸侯を封ずる時賜ふ、是の故に王に從ひ土を重ぬるに從ふ、魏の名を珪と云ふと古注本にあり、名を詩中に入るは日本人の事にて漢人には曾て無し、故に名にはあらず、淨無瑕玉の病を瑕と云ふ、此の玉病なし、魏の人品を玉に比す、美譽芳聲有數車財產家にて數車を有すと言ふにはあらず、車に積載する程の名聲が天下に高しとなり、莫放燄光高二丈『唐遺史』に江淮の間に術士あり姓は吳、宏詞に赴くく試驗に赴者あり之に謁す、術士曰く公の頭上燄

光高さ二丈、必ず高第に登らん、今魏の才も燄光を放つは必定ならんが、他人に嫉視せらるる憂あり、依て其の才鋒を露はすなと訓戒する、來年燒殺杏園華及第者は曲江の杏園にて燕を賜ふが例なり、然るに魏が頭光を二丈餘も放つては遂に杏園を燒殺すべし、是の故に放つ莫れと云ふ、其の裏面は他人を凌轢する勿れの意味なり、

【評論】此の篇、諧謔一番、人をして啞然たらしむるものあり、

湘妃廟

少將風月怨平湖　見盡扶桑水到枯
相約杏華壇上去　畫欄紅紫鬬樗蒲

少らく風月を將て平湖を怨む、見盡さんとす扶桑水枯るに到るを、杏華壇上に相約し去て、畫欄の紅紫樗蒲を鬬はしめん、

【句釋】湘妃は卽ち舜の妃、娥皇の廟、卽ち黃陵廟なり、少將風月怨平湖娥皇、女英の二女舜に從て及ばず湘に沈んで死す故に平湖風月を怨むと云ふ、見盡扶桑水到枯此の句の意は縱令扶桑の海水は枯るる時あるも、我が怨は萬劫盡ること無しとなり、舜を逐ふも及ばず、此の

湘水に投じて死す、故に怨恨の情盡きざるなり、蓋し舜を怨むにはあらず、相約は李羣玉が二妃に戯れて舜が事を慕うて萬劫怨むより我と約束し玉へと云ふ、杏華壇上去約束して游ぶ所は杏華壇卽ち割烹店に上り去らんと、畫欄は雙六の盤上、縱横の筋線を云ふ、筋線が色分したるを紅紫と云ふ、鬪樗蒲骰子卽ち「サイコロ」を鬪はし游戯を爲んとなり、

【評論】　此の篇、湘妃廟に題するに此の游戯を以てす、李が人品の卑下なると見るべし、范攄が『雲溪友議』に曰く李羣玉、湘妃廟に題す時に二女郎あり見て曰く兒は是れ娥皇女英なり、二年の後、當に郎君と雲夢の游を爲すべし、李乃ち其の陳ずる所を志す、俄かに影滅す、遂に其の神像を禮して去る、重て湖嶺を渉り、潯陽に至る、太守段成式素李と詩酒の友たり、具さに此の事を述ぶ、段因て之に戯れて曰く知らず足下は是れ虞舜の辟陽侯なるを、果して二年を經て、李は洪州に於て死す、段詩を賦して曰く、「曾て黄粱の事を話す、今白日に催せらる、老て兒女の累無くんば、誰か哭して泉臺に到らん、」劉潛夫曰く古人奇遇の事を叙す、猶ほ之を他人に託す、元稹が鶯鶯藝妓の如き之を張生に託す、李は直ちに己れに歸す、名教地を掃ふと、案ずるに此の詩に就て李が批議を招くは自業自得、聊も辯護の餘地無し、然れども別に七律と七絶二首は千古の絶調、漁洋の嘆じて其の餘唾を嘗むるを辭せざるもの、且李が「飯僧」の詩に「好

んで天竺の書を讀み、爲めに無生の理を尋ぬ」の言もあり、孰れを是とし、孰れを非とも容易に定め難し、余は李の事、研究の餘地あるものと思ふ、劉長卿が酧李穆の詩より此に至る十五首は一句が二句に應じ、而して三句に開き、四句に合するの格とす、

用事

周弼が曰く詩中、事を用ふ既に窒塞し易し、況や二十八字の間に於てや、尤も堆疊し難し、若し融化せずして事を以て意と爲し更に加ふること輕卒を以てするときは里謠巷歌の竹を擊て歌ふに鄰し、凡そ此れ皆用事の妙なるものなり、

秋日過員太祝林園

李渉

望水尋山二里餘　竹林斜到地僊居
秋光何處堪消日　玄晏先生滿架書

【句釋】秋日過員員は姓、太祝神を祭る事を掌る官名、漢代太祝六人神主を出納すと、林園は員が住居、望水臨の「ノゾム」は高きより下瞰す、望の「ノゾム」は下きより高處に向ふ、故に臨水は普通なり、望水は山を流るる川と見るべし、尋山二里餘我邦の十二三丁に當る、竹林斜到

地僊居晉の嵇康、七賢と竹林に游ぶ、今の懐州修武縣の東北五十里、崇明寺是れ其の地なり、顧愷之曰く、鮑靚は靈に通ずる士なり、徐寧之を師とす、夜琴を聞て怪て之を問ふ、靚が曰く叔夜なり、寧が曰く嵇、命を東邛に留む、何ぞ此に在るを得ん、靚が曰く叔夜、迹りは身なは終りを示して實は尸解す、故に此の詩之を地僊と謂ふ、乃ち嵇中散を以て員太祝に比す、是れ天隱の說なり、尸解とは身體の分解を云ふなれば、普通の死に當る、『抱朴子』に中士は名山に游ぶ之を地仙と云ふ、秋光何處堪消日太祝が秋日を消光するに何の方法を以てするや、玄晏先生滿架書晉の皇甫謐字は士安、幼名靜安、玄晏先生と號す、平生讀書を好む、人之を書淫と謂ふ、太祝を以て更に玄晏に比す、

【評論】此の篇、李渉の筆としては平凡たるを免れず、他晩唐諸家に在りては亦傑出せるものと謂ふ可し、

長安作

宵分獨坐到天明　又策羸驂信脚行
毎日除書雖滿紙　不曾聞有介推名

宵分より獨坐して天明に到る、又羸驂に策て脚に信せて行く、毎日除書紙に滿つと雖も、曾て介推が名あることを聞かず、

【句釋】長安作旅行中の作、宵分は夜と晝との中間、即ち夜半なり、獨坐到天明旅寓に在り、思懷動き睡る能はず、又策策は鞭なり、羸驂は毎日騎るが故に疲勞したる馬、信脚行里數なぞ定めず、行けるまで行く、毎日は旅行中毎日なり、除書は官より出る辭令書を云ふ、今日本の「官報」なるもの是れなり、雖滿紙百ページ二百ページの巨冊となるも、不曾聞有介推名自分に對する任官の辭令が載てあるかと思うて之を讀むが一向に自分の名は無きなり、以て介推に自身を譬ふ、介子推は晉の文公に事ふ、文公の艱難中、志を變ぜず、文公晉に歸るに及んで、賞賜介子推に及ばず、故意にはあらず、疎漏なり、終に山中に隱れて死す、子推は自分の股を割き文公に啖はしめ、以て飢を防ぎし大忠臣なり、李涉以て自から比す、其の志達せざるを哀しむ、人品を卑うすと言ふ者は、深く李涉を知らざる人の議論なり、

【評論】此の篇、李涉の如き人を以て其の言此の如し、如何に唐代の人が、官吏希望を終身の目的としたる事知るべきなり、

奉誠園聞笛

曾絶朱纓吐錦茵　欲披荒草訪遺塵
秋風忽灑西園淚　滿目山陽笛裏人

寶牟

曾て朱纓を絶て錦茵を吐く、荒草を披きて遺塵を訪んと欲す、秋風忽ち灑ぐ西園の淚、滿目山陽笛裏の人、

【略傳】寶牟字は貽宗、貞元間の進士、長慶中、國子司業と爲て卒す、寶羣の弟とす、

【句釋】奉誠園北平郡王馬燧が子の暢、第中の大杏を以て寶文場に餉る、文場以て德宗に進む德宗未だ嘗て見ず之を怪しむ、中使をして杏樹を封ぜしむ、暢懼て宅を進めて奉誠園と爲す、此の園に於て聞笛感慨を生じ作る、曾絶朱纓吐錦茵寶が馬燧に從て居し時、其の失策多かりしも燧は知らぬ態を爲して咎めず、之に感じて此の句あり、『韓非子』に楚の莊王、羣臣と燕す、火滅して客に莊王の愛する美人の衣を牽く者あり、美人其の纓冠のヒボを絶ち、王に告て曰く火を取て纓を絶ちし者を視んと、王の曰く今已に飲む、纓を絶ざる者は懽びずと、羣臣皆纓を絶つ、然して後、燈を點ず、莊王、晉と戰ふ時、一人鋒に當て大に晉軍を破る、王怪んで之を問

へば、嚮に纓を絶し者なり、漢の丙吉が御史醉て車上に嘔く、曹吏白して之を斥ぞく、丙吉が曰く第之を忍べ、丞相の車茵を汚すに過ぎずと、竇が今此の二人を借て以て馬燧に感恩を叙す、欲披荒草訪遺塵奉誠園の荒涼として昔に異なるを哀しむ、艸茫茫の處に馬燧が遺跡を想ふ、莊王馬燧に比す の仁恕に比し德宗の不仁を嘆す、秋風忽灑西園淚『魏志』に陳思王曹植西園を鄴國名に置て諸の才子と夜游詩を賦す、故に劉禎王の死後、詩を作りて曰く、「歩して北寺の門を出、遙かに西苑の園を望む、人に乖て感動し易し、涕下りて衿と連なる」西園の荒涼たるを哀しむ、滿目山陽笛裏人園の荒涼たるを見るのみにて感慨深し、其の上笛を聞く、感や一層深し、晉の向秀が「思舊賦」序に余嵇康、呂安と居止接近し、後、各の事を以て法と見られ、余西邁其の舊廬を經、鄰人笛を吹く者あり、曩昔宴游の好を追思して音に感じて嘆す、山陽は、天隱は懷州修武縣、卽ち今日の河南省衞輝府とす、今之に從ふ、蓋し山陽の名は二處も三處も有ること知らざるべからず、

【評論】 此の篇、唐絶として上乘なるもの、知己に感じたる故事は絶纓者と劉禎を以てし、笛に就ては向秀を以てし、奉誠園聞笛の五字遺憾なく發露す、此の如き題、此の如き詩、我が邦人の留意して學ぶべき所なり、

冬夜寓懷寄王翰林　　竇庠

滿地霜蕪葉下枝　幾回吟斷四愁詩
漢家若欲論封禪　須及相如未病時

滿地の霜蕪して葉枝を下る、幾回か吟斷す四愁の詩、漢家若封禪を論ぜんと欲すれば、須らく相如が未だ病ざる時に及ぶべし、

【句釋】 冬夜寓懷旅中にて懷を叙し、以て寄王翰林王は姓、名は源中、翰林院學士、唐以前は翰林學士無し、季昌は唐承平時と言ふ、唐に承平の年號なし、承平は北魏南安王の年號とす、今案ず、唐書四十『百官志』『玄宗初置翰林待詔以張說陸堅張九齡爲之掌』と、見るべし承平にあらざることを、開元の初めなり、滿地霜蕪霜の多く隕る景色を蕪と云ふ、俗に霜枯と云ふ、葉下枝落葉紛紛たり、幾回は「タビタビ」なり、吟斷は吟じ了る、四愁詩は晉の張衡が作、竇が今張衡が四愁詩を讀んで王を以て假りに賢者と爲す、張衡は賢なるも之を用ふる者なきを慨して作る詩なればなり、翰林は天下の集賢なり、漢家若欲論封禪封禪は祭祀の名、土を築くを封、地を除くを禪と云ふ、帝王は巡狩して、四嶽に至り泰山を封し天を祭り、小山を禪して山川を

祭る、漢家卽ち天家にて此の事を議せんと欲する心意あれば、須及相如未病時『史記』及び『漢書』に天子元帝曰く相如病甚し、往て悉く其の書を取るべし、若之に後る、所忠をして往かしむ、而して相如已に死す、家に遺書無し、其の妻に問ふ、對て曰く、長卿相如の字未だ嘗て書有らず、時時書を著はすも、人亦取り去る、長卿未だ死せざる時、一卷の書を爲りて曰く、使天子の使あり來りて書を求めば之を奏せよ、其の遺札書して封禪の事を言ふ、所忠奏す、天子之を異とす、天子其の辭を讀み沛然感動の意容を改め曰く俞乎朕其れ試ん哉と、張衡と相如に全然自から比するにはあらざるも、王に我が志を述て以て其の推薦を求むるが此の作の意なり、病氣に爲りては用を爲さず、故に未だ病ざる時と云ふ、

【評論】此の篇、張衡四愁詩と、相如封禪書を作る才は僕自から持す、願くば翰林之を朝廷へ奏せよとの意、其の自負や大なり、然れども天隱和尚の如く庠が如きは何ぞ議せんやは酷に過ぐ、和尚元來人情を解せざるなり、

焚書坑　　章碣

竹帛煙消帝業虛　關河空鎖祖龍居

坑灰未冷山東亂　劉項元來不讀書

竹帛煙消して帝業虛し、關河空しく鎖す祖龍の居、坑灰未だ冷やかならず山東亂る、劉項元來書を讀まず、

【略傳】章碣は孝標が子、乾符の進士第に登る、

【句釋】焚書坑焚は音「フン」なり、「ハン」にあらず、陝西省の驪山に在り、始皇が書を焚き儒を坑する處、始皇が李斯の上書に依て四百六十人の學者を坑にす、此の愚王愚臣は秦の學者の爲めに亡びず、無學者の爲めに亡ぼされたるを知らざるなり、竹帛は書なり、漢前は紙なし、皆竹帛に書す、煙消書物を焚燒して煙は已に消す、帝業虛帝業を邪魔する者は書物なりと思うて之を焚きしが、其の焚きし始皇の業も僅僅三世、數十年を經ずして亡ぶ、關河空鎖祖龍居『史記始皇本紀』に始皇の使者關東より華陰に至る、素車白馬にして璧を持し使者に與ふる者あり曰く鎬池君に遺れ、明年祖龍死せんと、祖は始、龍は君の象、皇と爲る、秦が要害の山河と思ひし地も、空しく關河、秦の爲めに何の用も爲さず、坑灰未冷儒者を坑し、書を焚きて後、僅僅一二年にして、山東亂陳勝なる者あり、第一番に秦を破る旗を揚ぐ、卽ち山東省の一角より

起る、劉は劉邦、漢の高祖、項は項羽、元來不讀書劉邦は曰く馬上安んぞ詩書を事とせん、項羽は曰く書は姓名を記するに足る、二人共書を讀まざる無學者なり、無學者の爲に亡ぼされ、學者の爲めに亡ぼされたるにあらざることを慨す、

【評論】此の篇、明の胡元瑞は俚俗なりと評し、淸の沈歸愚は麤派と評す、明の謝茂秦は咏史として此の如きものを善とす、斷案明白なればなり、元瑞、歸愚の二家は詩本來の主旨たる溫厚の處を缺けばなり、之を要するに露骨の處に得と失とを兼たるもの、後生は以て法と爲すべからず、

赤壁　杜牧

折戟沈沙鐵半銷　自將磨洗認前朝
東風不與周郎便　銅雀春深鎖二喬

折戟沙に沈んで鐵半ば銷す、自から磨洗を將て前朝を認む、東風は周郎が與に便せずんば、銅雀春深うして二喬を鎖さん、

【句釋】赤壁は種種に異說あるが、鄂州蒲圻縣の西北百二十里卽ち今日の湖北省の武昌を以て

正しとす、東坡の賦に東夏口を望み、西武昌を望む、是れ眞なり、吳の周瑜が曹操を水船にて破りし處、折戟折れたる戟、沈沙沙中に沈沒す、鐵半銷時代經過して鐵も消滅す、自將磨洗折戟を發掘して自から其の「サビ」を磨き洗うて、認前朝卽ち後漢の建安十二年を認知する、東風孔明が當時、風の吹くを知て、以て周瑜に戰を勸めしなり、不與周郎便此の風が起らざるときは吳は魏の爲めに敗北する、東風起りしに依て周郎は大功を奏せしなり、風が戰の便宜を與へ吳れたるなり、周瑜は年二十四、吳中呼で周郎と爲す、銅雀は曹操が建し臺、春深鎖二喬曹操は吳を破りて求めんと欲する者は國にあらず、土地にあらず、唯此の二喬にあり、孫策が皖を攻めて喬玄が二女を得皆國色なり、孫策は大喬卽ち姉を妻とし、周瑜は小喬卽ち妹を妻とす、其の美人の名高きを以て曹操が垂涎したるものなり、

【評論】此の篇、杜が集中に在て傑製の一とす、許彥周が曰く孫氏が覇業此の一戰に翳る、社稷の存亡、生靈の塗炭、都て問はず、只二喬を捉了せんことを恐る、見つ可し措大、好惡を知らざることを、此の老、詩を說くに理窟を以てし、情致を以てせず、笑ふべきなり、曹操の意のある所、二喬に在るを以て、特に大小喬を拈出するなり、杜一人ならず、薛能も胡曾も、大抵意のある所同じ、詩人の情想と史論家の情想と混同するものは、到底此の詩を味ふ能はず、

秦淮

煙籠寒水月籠沙　夜泊秦淮近酒家
商女不知亡國恨　隔江猶唱後庭華

煙は寒水を籠め月は沙を籠む、夜秦淮に泊して酒家に近し、商女は知らず隔江猶唱後庭華、亡國の恨み、江を隔て猶唱ふ後庭華、

【句釋】秦淮は建康、今日の江蘇省揚州に在り、江東の秦淮と云ふ、煙籠寒水水上に煙有るなり、月籠沙沙上に月有るなり、夜泊秦淮近酒家近の字、一本賣に作る、近を以て可とす、酒家は我邦の料理屋なり、杜の宿寓が料理屋に接近して居る、商女は妓女と見て可なり、酒家より起る聲、不知亡國恨國を亡ぼすの歌多くは、俗惡淫思なり、其の俗惡淫思を商女は知らず、隔江猶唱後庭華此の秦淮に昔都せし陳の後主は「玉樹後庭華」の詞曲を作る、多くの女をして歌はしめ、遂に隋の爲めに滅ぼさる、憐むべきは商女なり、歌ふも聞くも、厭ふべく、恥べきなるに知らざるが故に之を唱ふ、後主は自から無愁天子と號して遂に有愁天子と爲て終る、

【評論】此の篇、晩唐の絶句として最上乘に屬す、季昌は此の詩を桑間濮上の音に類すと評

したるも、是れ亦、詩と理窟を混同したる說、取るに足らざるなり、詩は情に訴て理に訴へざることを知らば此の愚論は爲さず、詩を以て一概に敎化の具と爲す者は、道樂者の事にして詩人の事にはあらざるなり、

漢宮

李商隱

青雀西飛竟未回　君王長在集靈臺
侍臣最有相如渴　不賜金莖露一杯

青雀西に飛て竟に未だ回らず、君王は長く集靈臺に在り、侍臣最も相如が渴あり、金莖の露一杯を賜はらず、

【句釋】漢宮名を漢宮に借りて其の實は唐宮を詠ず、青雀西飛竟未回「漢武故事」に七月七日、君王長在集靈臺集靈宮の通天臺は華隱縣の界、今日の陝西省同州府に在り、卽ち武帝の造る所、君王は武帝を正面にして裏面は玄宗なり、侍臣最有相如渴司馬相如は口吃して消渴の病を有す

不賜金莖露一抔「西都賦」に仙掌銅製を杭て以て露を承け、雙立の金莖を擢んじ、武帝此れを取て玉屑を服して以て不死を求む、詩意は方士妄言す、君王惑うて悟らず、若露を食うて果して死せずんば、相如最も渴す、何ぞ此れを以て之を試みざるやと、武帝を玄宗に比し、相如を自身に比す、

【評論】 此の篇、羅大經宋人の評に、委蛇曲折、不盡の意を含むと、君王長在の句、大に武帝を嘲笑して太だ骨を露さず、來らざるものを待や久しきは眞に笑ふべきなり、仙を求むる者皆是れ死す、死は人間の公道なり、其の公道を知らずして不死を求む、愚此れより甚だしきは無し、唐絶として其の力を認む、此の篇の如きは多くあらず、

賈生

宣室求賢訪逐臣　賈生才調更無倫
可憐夜半虛前席　不問蒼生問鬼神

宣室賢を求めて逐臣を訪ふ、賈生が才調更に倫無し、憐む可し夜半に虛しく席を前め、蒼生を問はず鬼神を問ふ、

【句釋】 賈生は前漢の賈誼なり、洛陽の人、年十八、能く詩を誦し、文を屬す、文帝召して博士と爲す、時に年二十、死する年三十三、宣室は未央前殿の正室、求賢求むる者は文帝なり、訪逐臣賈生は初め文帝に用ひられ、後疎んぜられ貶して長沙王太傅と爲る、自から楚の屈原に比し「懷沙賦」を作る、其の文絶世なり、文帝此の賦を讀んで復召還す、才調更無倫傳に云ふ諸老先生未だ言ふ能はざるに誼盡く之れが爲めに對ふと、可憐夜半虛前席長沙より誼を召還して上方の宣室に見ゆ、因て鬼神の事を感じて之を問ふ、誼具さに所以を道ふ、半夜に至りて文帝席を前む、一所懸命に聞くなり、不問蒼生問鬼神君は民を心頭に掛けて所謂民情を聞くが君の君たる務めとす、然るに蒼生の事を問はずして鬼神の事を問ふ、其の謬や憐む可しとなり、賈生が奏する治安三策は天下を治むる正道とす、

【評論】 此の篇、義山自身を賈生に比し、宣宗を漢文帝に比す、清秀高格唐絶の壓卷、清の隨園が詩に、不レ問二蒼生一問二鬼神一、玉溪生笑漢文君、請看宣室無二才子一、巫蠱紛紛死二萬人一

集靈臺

虢國夫人承二主恩一　平明騎レ馬入二金門一

張祜

却嫌脂粉汚顏色　淡掃蛾眉朝至尊

虢國夫人主恩を承く、平明馬に騎て金門に入る、却て嫌ふ脂粉の顏色を汚すを、淡く蛾眉を掃うて至尊に朝す、

【略傳】張祐字は承吉、處士を以て蘇州に居る、

【句釋】集靈臺は玄宗の作る所、漢の集靈宮にはあらず、虢國夫人楊太眞貴妃に三姨あり、韓國、虢國、秦國の三夫人なり、天子の妻を后と曰ひ諸侯は夫人と曰ふ、今后にあらずして妃なり、夫人と稱する所以、承主恩玄宗に寵せらるるなり、平明は曉天、騎馬入金門金馬門は宮禁に入る第一關門とす、却嫌脂粉汚顏色「楊妃外傳」に虢國夫人、朱粉を施さず自から美艶なり、常に素面天に朝す、淡掃娥眉俗に薄化妝と云ふものなり、朝至尊天子に謁するに禮を缺く事を諷す、

【評論】此の篇天子が色に惑溺して女輩が寵を恃み其の禮を失へることを諷諭せるなり、詩人溫厚の旨、是に於てか在り、

游嘉陵後溪　薛能

山屐經過滿徑蹤　隔溪遙見夕陽春
當時諸葛成何事　只合終身作臥龍

山屐經過す滿徑の蹤、溪を隔て遙かに見る夕陽の春づくを、當時の諸葛何事をか成す、只合に終身臥龍と作るべきに、

【句釋】嘉陵は溪の名、陝西の鳳縣と甘肅の階州との二說あり、孔明が出師屯する所、前說を以て可とす、古の西蜀なり、山屐は木屐、日本の下駄に齒の有るもの、宋の謝靈運が游山毎に著しなり、經過滿徑蹤齒痕が處處に印す、隔溪遙見夕陽春日の沒せんとする形容是を春と云ふ、溪を隔て之を見る、蜀の王業が振はざりしを諷す、當時諸葛成何事痛罵一番此に至る、薛能は蜀の從事と爲て、常に武侯が王佐の才に非ざることを薄んず、只合終身作臥龍孔明廬に在りし時、徐庶之を臥龍と謂ふ、薛能の意、孔明が草廬を出しは謬りなり、臥龍岡に一生を送るべきが可なりと、

【評論】此の篇武侯を罵て此の露骨の言を爲す、薛能が傲誕の性知るべし、淸の廖舟も曰く武侯は變計を知らず、識あるも膽無しと、羅大經は薛能を非として曰く能が論到らず、孔明が

出ること中原を掃清する能はずと雖も、火德の灰を吹て、然して討賊の義を伸ぶ、託孤の責を盡くし、以て萬世の人臣たる者に教ふ、安んぞ之を成何事と謂ふを得んやと、清潭孔明を咏じて、軍中莫敢異隆中、羽扇綸巾不飾躬、可笑會昌薛從事、隔溪遙見臥龍風、李涉の秋日過の詩より此に至る十一首は、各の結句の三字、介推名、笛裏人、未病時、不讀書、鎖二喬、後庭華、問鬼神、朝至尊、作臥龍等の作法作意を同うするものの格なり、

前對

周弼が曰く接句第三句虚實兩體を兼備す、但前の句對を作して其の接亦微し異なるなり、相去ること僅かに一間、特に稱停の間に在るのみ、

山店　　盧綸

登登山路何時盡　　決決溪泉到處聞
風動葉聲山犬吠　　一家松火隔秋雲

登登たり山路何れの時か盡ん、決決たる溪泉到處に聞く、風は葉聲を動かして山犬吠、一家の松火秋雲を隔つ、

【句釋】山店店は肆、貨を置き物を鬻ぐ處、山頭の茶屋に憩て作る、登登は用力なりと注して山に登る辛勞を言ふ、山路何時盡山路の長きに勞すは、易たらざればなり、決決は行流なりと注す、是れ水聲の形容、溪泉到處聞脚前脚後水流ならざるは無し、風動葉聲山犬吠山犬が風樹に當る聲に吠ゆ、一家松火松は油氣多し以て火を取るべし、遙かに此の松火を燒く家を認む、

隔秋雲非常に遠方に在る、晝間にも夜間にも通ずべし、一概に夜と見るは暗昧なり、

【評論】此の篇、山中の景を寫して幽絶清絶、以て描き圖と爲すべし、此の如き詩、眞に多讀を厭はず、

韋處士郊居　　雍陶

滿庭詩景飄紅葉　繞砌琴聲滴暗泉
門外晩晴秋色老　蕭條寒玉一溪煙

滿庭の詩景紅葉飄る、砌を繞る琴聲暗泉滴たる、門外の晩晴秋色老ゆ、蕭條たる寒玉一溪の煙、

【句釋】韋は姓、處士は仕へざる人の稱、官吏とならざる人、暗泉は目に見えざるも其の琮琮として琴聲の如く耳に聞くを云ふ、暗處にあるとのみ解すべからず、寒玉は竹なり、秋晩に寒竹のみ青青として一溪の煙を帶ぶるを見る、竹を以て處士の人品に比す、

江南　　陸龜蒙

村邊紫豆花垂次　岸上紅梨葉戰初

莫怪煙中重回首　酒旗青紵一行書

村邊の紫豆花垂る次で、岸上の紅梨葉戰ぐ初め、怪しむこと莫れ煙中に重て首を回らすを、酒旗の青紵一行の書、

【句釋】江南は楊子江南單に江と言へば楊子江に限るなり、紫豆は豆花は紫色を以て開く、次は豆の次第にはあらず、其の時分と云ふ義、秋七月なり、紅梨梨花は白し葉は紅なり、戰は風に因てザワザワする音を云ふ、初も其の時分を言ふ、莫怪ヲカシク思ふな、煙中秋煙中に、重回首氣に掛るものあればなり、酒旗酒家の招牌、青紵紵は麻の類、青色を以て染む、一行書字の如く一行酒家の名を記す、是れ我が目に映ずるなり、

旅夕　　高蟾

風散古陂驚宿雁　月臨荒戍起啼鴉
不堪吟斷無人見　時復寒燈落一華

風古陂に散じて宿雁を驚かし、月荒戍に臨んで啼鴉起つ、吟斷に堪へず人

の見る無し、時に復寒燈一華を落す、

【略傳】高蟾其の人詳かならず、乾符三年登第し御史中丞に至る、

【句釋】旅夕旅行中に夕日の景を寫す、風散古陂陂は「ツツミ」風遮る物なく縱横に吹き散らす、驚宿雁低處の景、月臨荒戍番兵が昔居し所、起啼鴉高處の景、不堪吟斷吟ずる中は氣強し、吟後は氣弱し、蕭條寂寞言外に在り、無人見堪へざる以所、時復寒燈落一華燈花結んで吉事生ず、日本の丁字頭と云ふものが、燈華なり、

【評論】此の篇、結句に至り客舍に在るを知る、前三句は全く外景、唐人に此の詩法ある恠しむべし、

金陵晚眺

曾伴浮雲歸晚色　猶陪落日泛秋聲
世間無限丹青手　一段傷心畫不成

曾て浮雲の晚色に歸するに伴ふ、猶ほ落日の秋聲を泛ぶるに陪す、世間限り無き丹青の手、一段の傷心畫けども成らず、

【句釋】曾伴浮雲歸晚色夕陽に浮雲と共に我が家に歸る、猶陪陪は隨ふなり、落日泛秋聲泛は起る意味、秋聲は秋風なり、今猶ほ落日秋風を起すに隨陪する、我が一身の榮達せざるを慨す、世間無限丹青手世上に畫師多からんも、一段傷心畫不成有形物は畫く可し、無形物は畫くべからず、

【評論】此の篇、晚眺に托して我が悲慨を叙す、古都なれば、更に感を深うす、元遺山は此の詩を愛し、擬して曰く、十年舊隱拋二何處一、一片傷心畫不レ成と、片も段も一義なり、

春

明月斷魂清靄靄　平蕪歸路綠迢迢
人生莫レ遣二頭如雪一　縱得春風亦不レ消

明月斷魂清うして靄靄、平蕪歸路綠迢迢、人生頭をして雪の如くなら遣る莫れ、縱ひ春風を得るも亦消せず、

【句釋】明月は秋月なり、斷魂秋夜は人をして自から斷魂せしむ、清靄靄清の字を春とすれば

解し易し、靄靄は春月なり、和氣なれば、斷魂の懷なし、平蕪は平郊、歸路蕭條の感に打たるも綠迢迢春になれば綠色人に可なり、人生莫遣頭如雪莫遣の二字は禁止の辭、白髮と成るは休めよとなり、縱得春風亦不消地上の白雪は、春風には消滅すれども、頭上の白雪は縱ひ春風を得るとも消滅せず、

【評論】　此の篇、春の和氣を咏じて以て人生の衰老を嘆ず、近時余が同門の先輩植村蘆洲、「白鬚祠」に題して、祠神也似二人生老一、縱得二春風一尙白鬚と、此の詩を善學せりと謂ふべし、山店より此に至る六首は一二の句、對法を以て成る、

後對

周弼曰く此の體唐人之を用ふること亦少なり、必ず末句を對すと雖も、而かも詞足り意盡さしむ、末だ嘗て對せざる若くす、然らざるときは長律を半截する如し、皚皚齊整して略結合なし、此れ荆公が徐師川に誚らるる所以なり、

過鄭山人所居

劉長卿

寂寂孤鶯啼杏園　寥寥一犬吠桃源
落花芳艸無尋處　萬壑千峯獨閉門

寂寂たる孤鶯杏園に啼き、寥寥たる一犬桃源に吠ゆ、落花芳艸尋る處無く、萬壑千峯獨門を閉づ、

【句釋】　鄭山人は不詳、寂寂孤鶯啼杏園吳の董奉は名醫なり、山居して田を種ゑず、人の爲に病を治し、錢を取らず、唯杏五株を栽ゑしむ、人杏を買んと欲す、穀一器を以て杏一器を取る、寥寥一犬吠桃源武陵桃源を以て用ひたるは春にして神仙の棲隱に托寄すればなり、落花芳艸無

尋處落花と芳艸にて滿地埋まる如何なる處に向て山人の居所を尋ねんや、萬壑千峯獨閉門非常な深き壑や、非常な高き峯、其の間に一軒の家あり而かも門を閉づ、人を尋ぬる處なき所以、

【評論】此の篇、前對の格へ收むべきを、後對の格と爲したるは甚だ恠しむべし、三四は對と言へば、對せざるにはあらざるも一二の句に比較すれば、極めて疎對とす、必ず以て前對の部へ收むべし、第一句高處、第二句低處、三句も亦低處、四句は高低合一して重きは高處の千峯に在り、邦人評するに曾て高低の事を言はず、唐賢の用意多く此に在り、此の篇の如き一讀の下、氷心雪意、塵外に游ぶの感あり、上乘の作と爲す、

寒食汜上　王維

廣武城邊逢暮春　汶陽歸客淚沾巾
落花寂寂啼山鳥　楊柳青青渡水人

廣武城邊暮春に逢ひ、汶陽の歸客淚巾を沾ほす、落花寂寂山に啼くの鳥、楊柳青青水を渡るの人、

【句釋】寒食は前に辨せり、汜上は河南省開封府汜水縣西北、王が旅行中の作とす、廣武城は

鄭州の滎澤縣、廣武山に在り、卽ち楚と漢と相拒ぐの處、鄭州も亦開封府に屬す、逢暮春所謂落花の時節感は自から深し、汶陽は山東省兗州府の汶上縣、王は卽ち歸客と爲て汶陽に歸らんと欲して途、汜上を過ぎるなり、淚沾巾何故に感ずと言はば、此の時王は賊の爲に擒にせられ幸に命を全うして此に歸るを得たり、落花寂寂啼山鳥も亦暮春に啼く、其の啼や傷むが如し、楊柳青青渡水人江上の楊柳、水を渡る人に映じて青青たり、

【評論】此の篇、卽景卽目、出すに清愜を以てす、右丞にあらざれば斷じて此の作なし、東坡此の詩を評して詩中に畫あり、畫中に詩ありと、神品に入るものと謂つ可し、

與從弟同下第出關　盧綸

出關愁暮一沾裳　滿野蓬生古戰場
孤邨樹色昏殘雨　遠寺鐘聲帶夕陽

關を出て暮を愁て一び裳を沾す、滿野蓬生ず古戰場、孤邨の樹色殘雨昏く、遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ、

【句釋】與從弟「イトコ」名は璞、同下第は進士及第せずして出關長安城の關門を出るなり、

一沾裳裳は「モ」なり、蓬生古戰場古の字百年も千年も前を指すにあらず、天寶の亂卽ち安祿山の時を言ふ、此の時長安も洛陽も共も灰燼と爲る、國を憂ふる情もあり、身を想ふ情もあり、孤邨樹色昏殘雨妙は孤と殘の字にあり、遠寺鐘聲帶夕陽鐘は耳邊には可ならず、妙は其の遠にあり、

【評論】此の篇、國も身も感慨に滿ち充ちて而かも出すに此の蘊雅の語を以てす、誦すべし、

宿石邑山中

韓翃

浮雲不共此山齊　山靄蒼蒼望轉迷
曉月暫飛千樹裏　秋河隔在數峯西

【句釋】石邑山は漢の江邑縣、今日の直隸省眞定府獲鹿縣に在り、浮雲不共此山齊雲は高低ありて山と齊しく高からずとの意、蒼蒼は靄を形容して言ふ、望轉迷行路分明ならざるなり、曉月暫飛千樹裏自からの行に隨て樹間に隱見する月は恰かも飛ぶが如くなり、秋河隔在數峯西秋河は銀河なり、已に五更の景色とす、

【評論】此の篇、奇警を以て尋常の圈外に超絕するもの、一句奇、三句奇、四句奇、二句獨正當の如きも、望轉迷は他の諸句を吐き出す根本なれば、是亦凡にはあらず、明人の評に高華明秀、梁陳の妙語を唐調に變化させしなりと、洵とに然り、洵とに然り、

贈張千牛

蓬萊闕下是天家　上路新回白鼻騧
急管晝催平樂酒　春衣夜宿杜陵華

【句釋】張は姓、千牛は官名、千牛は名刀の名、唐代に千牛衞の職を置く、宮禁守護の役とす、蓬萊闕下是天家仙人の居處、蓬萊を以て宮名と爲す、敎坊の側に在り、敎坊とは妓館を言ふ、上路は上苑の通路、天子通行の路、新回白鼻騧馬に騎て回り來る、白鼻騧は淺黃色の名馬なり、回る者は誰ぞ千牛なり、急管晝催平樂酒平樂は今日の倶樂部なり、千牛の回る時、此の平樂館

に於て酒燕を催し、管絃の曲、急なるなり、春衣夜宿杜陵華杜陵は我邦東京の柳橋の如き處、千牛は此處に夜遊して歡を恣にする、

【評論】此の篇、千牛の贅澤を叙する以外何等の味も無し、風教に害あり、刪除すべし、過二鄭山人一詩より此に至る五首後對の格、蓋し鄭の詩は誤編なれば四首と云ふを正しとす、

拗體

周弼曰く此の體必ず奇句を得て時に出して之を用ふ、姑らく之を存じ、以て一體に備ふ、

旅望　李頎

百華原頭望二京師一　黄河水流無盡時一
秋天曠野行人絶　馬首西來知是誰

百華原頭京師を望めば、黄河水流れて盡る時無し、秋天曠野行人絶、馬首西來知ぬ是れ誰ぞ、

【略傳】李頎は東川の人、開元の進士、王維と交游す、

【句釋】旅望は「出塞行」と題して王昌齡の作と爲す本あり、然るに『全唐詩』の王集と李集とを檢す、二家の集共に此の詩無し果して何人の詩なるを知らず、東陽は『絶句類選』に王昌齡とす、拙堂亦王として少伯絶句多入二逸品一と評す、要するに盛唐人にあらざれば斷じて言ふ能はざる詩、王李二家にあらずとするも、岑か王右丞にあらざれば能はず、百華を百卉に作る本あり、

花に勝る、原頭望京師隴西の地より都城長安を回望する、黄河水流無盡時黄河は東流し去て長安に向ふが如し、人、水を羨まざるを得ず、秋天曠野行人絶寂寞たる原頭往來の人影無し、馬首西來知是誰人の往來無き處、一人馬首を西に向け來る、是れ果して何人なるや、水の東流と反對なるは是れ怪しむべし、

【評論】　此の篇、西域の地に在て、漢土を思ふの情を叙べ實に天來の神品なり、作者の誰たるを問はず、詩にして此に至る以て千古に不朽なるべし、王鳳洲の如きは麤豪を以て之を見る、隻眼を有せずと謂つ可し、『絶句類選』東來に作る誤謬なり、

滁州西澗　　韋應物

獨憐幽草澗邊生　　上有黄鸝深樹鳴
春潮帶雨晚來急　　野渡無人舟自横

獨憐れむ幽草の澗邊に生ずるを、上に黄鸝の深樹に鳴くあり、春潮雨を帶て晚來急なり、野渡人無く舟自から横はる、

【句釋】　滁州西澗は季昌の注に本吳楚の地秦漢の九江郡なりとあり、然らば今日の江西省九江

郡に屬す、滁州は隋以來の名、宋の歐陽修曰く滁州城の西は乃ち是れ豊山、所謂西澗なるもの無し、城北に一澗水あるも、水淺うして舟に勝へず、我邦の原田溫夫は『詩學新論』に歐公を破して蘇州豈自から欺き人を欺むかんや、世代邈たり、陵谷變遷するのみと、深き考證は無しと雖も、溫夫の説可なり、獨憐は俗に云ふ「イヂラシイ」に當る、幽草澗邊生直ちに西澗に至り卽目する景は此に在り、上有黄鸝深樹鳴黄鸝は日本の「ウグヒス」とは異なるも節に應じて鳴くより當てがつたものとす、俯して瞰れば澗幽草あり、仰で聞けば樹に黄鸝あり、憐の一字此の二句十四字に掛る、春潮帶雨晚來急驟雨滂沛澗に灑ぎ春水は雨を帶て其の流の衰衰と彌漫するを言ふ、野渡無人舟自横乃ち走り渡を求めんと欲するも、野航横はるのみにて篙夫なし、以て西澗近傍の閑寂なるを言ふ、

【評論】　此の篇、卽景卽目、一幅驟雨の圖を見るが如し、朱文公の韋蘇州が詩を評して氣象道に近く、王維よりも高しと、王維より高きは聊か言に過ぐ、而かも王維の下にはあらず、王、孟、韋、柳の四家の順序、決して誤らざるなり、

酬張繼　　皇甫冉

悵望南徐登北固　　迢遙西塞限東關

落日臨レ川問二音信一　寒潮唯帶二夕陽一還

南徐を悵望して北固に登る、迢遙たる西塞東關を限る、落日川に臨んで音信を問へば、寒潮は唯夕陽を帶て還る、

【句釋】酬張繼皇が自注に懿孫は余が舊好たり、役に武昌に抵り、六言を以て懷はる、余七言を以て裁答す、悵望は悵然として遙望す、南徐は浙江省の鎮江府、登北固樓あり北固と名く、江に臨んで在り、此の樓に登り、張繼の居所の天を望む、迢遙は「ハルカ」なり、西塞は山の名、限東關西塞山が東關を限界する、遂に先方は見えざるを言ふ、東關は歷陽の西南二百里、吳の諸葛恪か居住せし處、落日臨川問音信鯉魚の音信を問はんが爲め川に臨む、古詩に客自二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一、寒潮唯帶夕陽還張が音信は無し、只看る所は錢唐江の寒潮が夕陽の光を帶て還るのみ、

【評論】此の篇、南北東西の字を運用して甚だ奇巧を極む、結句七字に至りては百回千回讀むを厭はざるなり、

河邊枯木　長孫佐輔

野火燒レ枝水洗レ根　數圍枯朽半心存
應是無レ機承二雨露一　却將二春色一寄二苔痕一

野火枝を燒き水根を洗ふ、數圍枯朽して半心存す、應に是れ機の雨露を承る無かるべし、却て春色を將て苔痕に寄す、

【略傳】長孫佐輔は德宗の時の人、隱居して志を養ふ、弟の公輔吉州の刺史と爲る、佐輔之に依る、

【句釋】河邊枯木題の如く枯木を詠じたるもの、野火燒枝水洗根水火の二害、枝根を合す、木たるもの枯ざるを得ず、數圍枯朽半心存皮肉盡く去て骨身僅かに存ず、應是無機承雨露眞に是れ無機物、雨露晨昏下るも何等の詮無し、雨露は遂に水火に及ばさるなり、却將春色寄苔痕春色は公道一樣に來れども枯木暖氣なし、著くに處なし、是に於てか、僅かに苔痕に寄せて以て其の公道を示す、

【評論】此の篇、題目已に奇、想も亦奇ならざるべからず、全體是れ枯木、而かも半心存の三字よりして春色の字を貼し來る、工夫の至り、人察せざるを得ず、

柳州二月　　柳宗元

宦情羈思共悽悽　春半如秋意轉迷
山城過雨百花盡　榕葉滿庭鶯亂啼

宦情羈思共に悽悽、春半秋の如く意轉た迷ふ、山城の過雨百花盡き、榕葉滿庭鶯亂啼す、

【句釋】柳州二月子厚が貶せられ柳州客寓の時の作、今の廣西省柳州府、宦情宦吏たる者の情、羈思羈人たる者の思、共悽悽宦と爲て貶せられ、謫せられて邊境に來る情思共に悽悽、乃ち樂まざるの謂なり、春半二月は春の中なり、如秋意轉迷眼界は春なれども我が情思は秋の如く凄然たるを如何せん、山城過雨百花盡春の字前に在り、花の字無るべからず、句脈の斷えざること見るべし、蓋し花の飛び盡しし後、榕葉滿庭鶯亂啼榕は和名「ヒヒラギ」なりとの說と「ヒヒラギ」にはあらずとの二說あり、今斷定し難し、葉は庭に滿ち、鶯は亂れ啼く、詩人の情、如何か之を處せんや、

【評論】此の篇、凄惻の情を隱約の中に見る、子厚の人品概すべし、其の友劉禹錫の播州に徙

されんとするや、其の母老たるを以て柳州を以て彼に與へ、而して自から播州へ往かんと欲す、朝議禹錫をして連州に易へしめたる如き、子厚の友情、千古人をして嘆服せしむ、身柳州に貶せらるるも、『唐書』傳ふる所に依れば江嶺の間、進士たる者、數千里を遠しとせず、皆宗元に隨て師法とす、凡そ其の間を經る者必ず名士と爲る、柳柳州の名、千古に滅せず、元和十四年十月五日卒す、時四十七、才人文士は是の日を以て其の靈を祭らざるべからず、

贈楊錬師　　鮑溶

道士夜誦蘂珠經　白鶴下遶香煙聽
夜深經盡人上鶴　天風吹入秋冥冥

道士夜誦す蘂珠經、白鶴下りて香煙を遶つて聽、夜深け經盡き人鶴に上る、天風吹き入る秋冥冥、

【句釋】楊錬師は前に辨せり、道士は佛敎の梵士と言ふが如し、漢士にて發達したるもの、夜誦蘂珠經黃帝の說く所と稱する黃庭經是れ卽ち蘂珠經なり、白鶴夜深の二句解し易し、天風吹入秋冥冥道士は塵間に長く游ばず、天風と鶴に駕して秋夜冥冥たるに上天し去る、

【評論】　此の篇、秋宵月下に於て一朗吟する時は、凡身も亦仙身に化する思ひあり、

題齊安城樓

杜牧

嗚軋江樓角一聲　微陽瀲灩落寒汀
不用憑欄苦回首　故鄉七十五長亭

嗚軋たり江樓の角一聲、微陽瀲灩として寒汀に落つ、用ひず欄に憑て苦に首を回らすを、故鄉七十五長亭、

【句釋】　齊安城樓は今日の湖北省黃州府、春秋の黃國、南齊に郡司州、北魏に郡南司州なり、嗚軋は角より出る聲嗚咽と殆んど同じ、角は軍中に用ふる笛、微陽は夕陽と同じ、瀲灩は浪の日に映じギラギラする形容、落寒汀日影が寒汀に落ち入る、不用憑欄此に欄の字あるは、第一句に樓の字あればなり、邦人の詩動もすれば、欄あり干あり而して樓字無し、此の篇法を見よ、苦は丁寧なり、慇懃なり、回首首を回らすも功無ければ用ひずと言ふ、故鄉七十五長亭短亭は五里、長亭は十里、亭は我が邦の驛なり、

【評論】　此の篇、牧之が詩として平穩に屬する者、牧之の詩、數字を用ふるもの多し、南朝四

百八十寺の如き尤も名高し、亦是れ算博士の類なり、李頎の旅望より此に至る七首を拗體とす、平起にして仄を以て結を取り、仄起にして平を以て結を取り、或は仄を連用、或は平を連用、要法古詩に類して、意は今體に取るもの拗は折也と注するに依て、一句一句互に拉折するなり、

側體

周弼が曰く其の說拗體と相類す、然れども興を發し辭を措くこと則ち奇健なり、今謂く仄體は仄韻の體と言ふことなり、今體の如く平仄法甚だ嚴ならず、孤平孤仄曾て深く咎めず、是も亦古詩の一變法なればなり、

營州歌

高適

營州少年愛原野　狐裘蒙茸獵城下
虜酒千鍾不醉人　胡兒十歲能騎馬

營州の少年原野を愛し、狐裘蒙茸城下に獵す、虜酒千鍾だも人を醉しめず、胡兒十歲にして能く馬に騎る、

【略傳】高適字は達夫、滄州勃海の人、有道科に擧げられ、封丘縣を調す、祿山反す、哥舒翰が西河の從事と爲り、左拾遺由り侍御史に遷る、諫議大夫に擢んでらる、崔光遠に代り、西川節度使、蜀の彭州刺史と爲る、後勃海侯に封せらる、年五十、始めて詩を爲る卽ち工、一篇を

吟ずる毎に好事の者輒ち傳布す、永泰の初卒す、

【句釋】營州歌今日の直隸省永平府盧龍縣の東、是れ古の營州、漢人の所謂中國にあらずして北邊の蠻境と爲す處なり、少年は字の如く壯士を言ふ、愛原野北境原野多し、獵に便なる所以、狐裘蒙茸の四字は『詩經』に出づ、狐の皮の外套を狐裘と言ふ、其の外套の亂るる形容を蒙茸と言ふ、獵城下鳥も獸も共に獵の中に入る、虜酒營州は蠻地ゆゑ其の處で釀造する酒は虜酒なり、千鍾强烈の酒ならんも少年の豪興百杯千杯も飲む、而かも不醉人曾て醉はざるなり、胡兒十歲能騎馬少年の豪は恠しむに足らず、十歲の兒已に能く馬に騎る、

【評論】此の篇、七言短古と稱しても妨げず、三四の二句は對を成し、達夫の面目亦此の詩に露はると謂つ可し、

山家

長孫佐輔

獨訪山家歇還涉　茅屋斜連隔松葉
主人聞語未開門　遶籬野菜飛黃蝶

獨山家を訪て歇て還涉る、茅屋斜めに連なりて松葉を隔つ、主人語を聞て

未だ門を開かず、籬を遶る野菜黄蝶飛ぶ、

【句釋】山家は山村の隱家なり、歇は休息なり、涉は登るなり、隔松葉は松樹を隔て茅屋が連なると見てよし、三四の二句、一一注釋に及ばず、我聲を聞て主人は未だ門を開かざるが、門前に開門を待て佇立して黄蝶の籬下に野菜を遶りて飛ぶを見る、

【評論】此の篇、甚だ佳作なりとの説と、一氣貫ぬかずとの二説あり、佳作と爲す者は、眼前の景色を出して以て自然なりと。一氣貫ぬかずと爲す者は起句、承句は山村の景狀にて、轉句結句は田園の景狀なりと、余は前説を取て後説を取らず、如何となれば山中にも野菜は作る、日光山でも余は住したるとき野菜畝を自から作れり、春なれば黄蝶も飛來す、黄鸝も鳴く、故に此の句が田園にも通ずるが亦山中にも通ずるなり、余が言を妄と爲す者は試みに山中の隱者に問へ、

夏晝偶作　柳宗元

南州溽暑醉如酒　隱几熟眠開北牖
日午獨覺無餘聲　山童隔竹敲茶臼

南州の溽暑醉て酒の如し、几に隱て熟眠北牖を開く、日午獨覺て餘聲なし、山童竹を隔てて茶臼を敲く、

【句釋】夏晝は夏日に同じ、偶作偶爾成るなり、南州は柳州、溽暑は極熱を言ふ、醉如酒人が極暑に向へば身體泥の如くなる、醉を出す故に酒の如しと言ふ、妙語なり奇語なり、隱几は几に依るなり、熟眠開北牖北の牖を開き乍ら熟眠する、日午今日の十二時、獨覺は自然に眠が覺むなり、無餘聲四邊閑寂何等の聲も聞かず、而して耳に入るものは何ぞ、山童隔竹敲茶臼童が竹林を隔てて茶臼を敲く音のみを聞く、此の時代、製茶の法は茶葉を細末して餅と爲す、臼に投じ杵を以て舂く、石臼も木臼も共に在りしなり、

【評論】此の篇、酒に起りて茶に止む、酒に眠りて、茶に覺む、其の風韵の窮まり無きこと比を見ず、所謂動中に靜あり、靜中に動あり、柳柳州にあらざるより此の作はあるべからず、

步虛詞　高駢

清溪道士人不識　上天下天鶴一隻
洞門深鎖碧窗寒　滴露研朱點周易

清溪の道士人識らず、天に上り天を下り鶴一隻、洞門深く鎖して碧窗寒し、滴露朱を研りて周易を點す、

【略傳】高駢字は千里、南平郡王、高崇文が孫、家世禁衞たり、劍南西川節度、荊南鎭海節度と爲る、晩年に神仙を好む、

【句釋】歩虛詞古注に『異苑』を引て曰く陳思王、魚山に游ぶ、忽ち空中に梵唄の聲淸遠寥寥たるを聞く、音を解する者をして之を寫さしむ、神仙の聲と爲す、道士之に効うて「歩虛詞」を作る、此れ歩虛の始なり、或は云ふ此の作玄宗にして高駢にあらずと、清溪は山の名、臨淮縣に在り、山東に道士の舍あり、葉法善なる道士此の時代此の山に在りて道を修むと云ふ、人不識凡人は識り得ざるなり、上天下天鶴一隻鶴の仙に附隨する外、何人も知るを許さず、仙術は天に上下する固より自由なり、洞門深鎖凡人の入るを許さず、碧窗は碧蘿の窗、滴露樹より落る露にて研朱道士は多く朱墨を用ふ、點周易道士の經典は『老子』や『黄庭經』が本源なるが周易も乾坤陰陽を說き道敎に似たる所あればなり、

【評論】此の篇、仙人の事を詠じて清氣人に逼る、然れども世惜む高駢か上天下天する能はず師鐔の爲め殺されたることを、仙も亦言ふに足らざるなり、

君山

君山父老

湘中老人讀黄老　手援紫藟坐碧草

春至不知湘水深　日暮忘却巴陵道

湘中の老人黄老を讀む、手に紫藟を援て碧草に坐す、春至りて知らず湘水の深きを、日暮忘却す巴陵の道、

【句釋】君山は岳州の洞庭湖中に在り、傳說に依れば湘君の游びし處なるを以て此の名あり、湖に水の多き時は山水中に在り、水の少なき時は山陸と爲る、湘中老人は君山父老自から謂ふ、讀黄老『老子』なり、手援援は「トル」なり、紫藟は葛藟なり、藤蘿の事なり、坐碧艸艸を敷て坐と爲す、春至不知湘水深春に至れば水茫茫として深し、而かも老人は其の深きを知らず、深きを知らざるにあらず、深淺共に知らざるなり、日暮忘却巴陵道始めより道を知るに意なし、故意に忘却したるにあらず、無心なり無機なり、東西南北皆忘却す、獨巴陵を言ふは、巴陵の道、君山に接すればなり、

【評論】此の篇、古注に『博異記』を引て曰く賈客商人呂筠卿嘗て中春の夜に於て舟を君山の

側に泊し、酒を命じ笛を吹く、一父老忽ち舟を拏して來り、袖中より笛三管を出す、一は合拱の如く一は常人の蓄ふる物の如く、一は絶小にして細華管の如し、鈞卿、父老に向て一吹を乞ふ、父老曰く其大なる者は諸天の樂發すべからず、其の次は諸仙の合樂に對して吹く、其の小なるものは老人朋友と樂しむもの、誠に子が爲めに之を吹かん、乃ち笛を把り吹くこと三聲にして湘上風動き、波濤滉瀁として魚龍跳噴す、五聲六聲、君山上の鳥獸叫噪して月色昏昧なり、舟人大に恐る、乃ち此の詩を吟じて去る、『齊諧記』中の事に類し取るに足らざる説なれども、君山父老なる者に關するを以て之を錄す、國清寺に寒山子ありて樹下黄老を讀み、忘却す來時の道は此の詩と相類す、其の時の前後を知らず、

繡嶺宮

春草萋萋春水綠　野棠開盡飄香玉
繡嶺宮前鶴髮翁　猶唱開元太平曲

李洞

春草萋萋春水綠なり、野棠開き盡て香玉を飄がへす、繡嶺宮前鶴髮の翁、猶唱ふ開元太平の曲、

【句釋】繡嶺宮は古注に曰く河南道陝州陝石縣に在りと、陝西は今日の河南省に屬す、古蹟として神雀臺、軒游宮硤石關、鷄鳴臺、望思臺、闕亭等あり、繡嶺宮は今判然せず、第一句は解し易し、野棠は一本海棠に作る、甘棠説と海棠と一物なりとの二説あり、詳知する能はず、猶唱開元太平曲開元年に玄宗が此の宮に幸して天下太平曲を唱ふ。

【評論】此の篇、李洞の作にあらず、鬼神の作なりとの説あり、鬼神の詩にして此の如きは遂に人間に若かざるなり、營州歌より此に至る側韵の詩法略察すべし。

卷の二

七言律

四　實

周弼曰く其の說五言に在り、但句を造ること差長く、微し分別あり、七字當に一串と爲すべし、五言を以て泛に兩字を加ふべからず、最も飽滿し難し、疎弱なり易し、而かも前後多くは相應ぜず、唐の太中より此に工なる者亦數あり、其の難を見つ可し、」今謂く實字とは何ぞ事理の解すべき者あるを實字と曰ふ、卽ち物體に名くる者なれば名詞是れ實字なり、解無くして唯以て實字の狀態を助くる者を虛字と曰ふ、動詞是れ虛字なり、此の名詞と動詞と相助け相和して始めて一篇の詩と爲る、徹頭徹尾、實字のみの詩はあらず、又徹頭徹尾虛字のみの詩はあらず、然れども周弼の意は其の主として虛實孰れに重きを置きたるやを檢して以て此の名を造りしものならん、事物は名詞なり、理體は動詞なり、此の名詞動詞を斡旋して始めて一篇の詩成る、絕句と律體との區別なく此の法は一なり、而かも七律は七律にして五律に但二

字多く爲したるものは七律にあらず、周弸の泛に兩字を加ふべからずとの言は實に然り、切ならざるを得ず泛なるべからず、切は必要なり、泛は蛇足なり、初學宜しく此の切と泛との事を判へざるべからず、太中より此に工なる者少なしと、宣宗の年を太中とす、詩家の所謂晩唐に屬す、盛唐中唐已に幾人も無し、況んや晩唐に於てをや、此の選多く晩唐を取る、周が說に合する詩多ければなり、

同題仙游觀

韓翃

仙臺初見五城樓　風物凄凄宿雨收　山色遙連秦樹晩
砧聲近報漢宮秋　疎松影落空壇淨　細草香閒小洞幽
何用別尋方外去　人間亦自有丹丘

仙臺初めて見る五城樓、風物凄凄として宿雨收まる、山色遙かに連なる秦樹の晩、砧聲近く報ず漢宮の秋、疎松影落て空壇淨く、細草香閒にして小洞幽なり、何ぞ用ひん別に方外を尋ね去ることを、人間にも亦自から丹丘あり、

【句釋】 仙游觀は前漢の武帝作る所、長安の西山に在り、觀は佛に寺と云ふが如し、或る本に「寺は多く山中の高處に築く故に觀と云」は滑稽なり、寺と觀とは別物なり、寺は寺、觀は觀、別物とす、漢土の書物に「寺觀」とあるは寺及び觀の事なり、道宮謂之觀『左傳』の說見るべし、仙臺は仙游觀なり、五城樓は崑崙山に在る仙の住樓、今仙游觀に譬ふ、風物は春の景色、凄凄は「スサマジ」なり、宿雨收は前夜の雨歇む、山色遙連秦樹晩雨歇むに依て連山の翠色が、秦地の樹に連なるを見る、砧聲近報漢宮秋漢宮は仙游觀を指す、漢武帝の建し物なるを以て漢宮と云ふ、人家に接近するが故に砧聲を聞く、疎松影落空壇淨仙觀に沿て有る疎松の影は仙觀の空壇に落て淨し、細艸香閒小洞幽小洞に沿て生ずる細艸の香は衣袖を襲うて閒なり、香閒を一本春閒に作る、香閒を可とす、共に寂寞の狀態を言ふ、何用は俗語の「イラヌコト」別尋方外去儒敎の人倫を說くを方內とし、人倫外に敎を說くを方外とす、佛と道とは方外なり、今此は仙游觀外の方外を指す、人間亦自有丹丘丹丘は道士が說く理想の山、方外の處は卽ち是れ、丹丘など別に尋ぬるには及ばず、人間此の地に丹丘ありとの意なり、

【評論】 此の篇、隱約の中に仙を求むるの癡を笑ひ其の無益なる意を寓す、中唐七律此を以て上乘とす、明の焦弱侯曰く香閒を春香に作るは俗本なり、然るに寧齊之を嫌ふは何ぞ、

和樂天早春見寄　元稹

雨香雲淡覺微和　誰送春聲入棹歌　萱近北堂穿土早
柳偏東面受風多　湖添水色消殘雪　江送潮頭湧漫波
同受新年不同賞　無由縮地欲如何

雨香雲淡微和を覺ゆ、誰か春聲を送りて棹歌に入る、萱は北堂に近うして土を穿つこと早く、柳は東面に偏にして風を受ること多し、湖は水色を添へて殘雪を消し、江は潮頭を送りて漫波を湧す、同じく新年を受て同じく賞せず、地を縮むるに由無し如何せんと欲する、

【句釋】和は意を和し字を和せず、和は猶古味を存す、次に至りては古味を損す、而かも樂天と元稹は次韵の元祖なり、樂天居易早春見寄樂天が今の浙江杭州の太守たりし時、元稹が浙東の觀察使に貶せらるる時贈りしなり、雨香雲淡春の雨、春の雲、香と淡とを以てす、春以外には用ひず、覺微和舊一月の候を微和と云ふ、誰送春聲樂天が送らるる詩は春聲を作す、我の誦和する詩は入棹歌卽ち舟子の棹さし歌ふに類す、聲を一本深に作る、深では微和に適せず、寧

齋知らざるは何ぞや、萱は忘憂艸、宜男艸、鹿葱、鹿劍、妓女、丹蕙等の別名あり、濕艸科に屬す、近北堂『詩經』に之を背に樹んと、背は『疏』に北堂とあり、北堂は婦の守る所、乃ち母に用ふる所以、今は單に北堂なり、穿土早春に會うて萱が芽を生ずる早きが如く、君樂天の憂も忘るる必ず近からんとなり、柳偏東面受風多元稹は李賞が謗の爲め同州より浙東に移さる、故に北萱は樂天に喩へ、東柳は自から喩ふ、小人の侮りを受ること多きを風に喩ふ、湖添水色消殘雪杭州には西湖あり、樂天の居、江送潮頭湧漫波浙東には錢塘江あり、元稹が居、彼は讒言雪の如く消え、此は讒言波の如く湧き、君は憂も滅せん、我は益す愁ふとの意、同受新年不同賞錢塘と杭州とは日本里程にして五六十里隔つ、新年を同賞しがたき所以、無由縮地『神仙傳』に依れば費長房は能く縮地術を施すと、人間は其の術なし、欲如何煩悶も功無きなり、

【評論】此の篇、第一句時節、二句は彼と此、三句は彼、四句は己、五句は彼、六句は己、七八二句は彼此雙方を言ふ、

和趙相公登鶴雀樓　殷堯藩

危樓高架泬寥天　上相閒登立綵旃　樹色到京三百里

河流歸漢幾千年　晴峯聳日當周道　秋穀垂華滿舜田

雲路何人見高志　最看西面赤欄前

危樓高く架す泬寥の天、上相閒登して綵旃を立つ、樹色京に到る三百里、河流漢に歸す幾千年、晴峯日に聳えて周道に當り、秋穀華を垂て舜田に滿つ、雲路何人か高志を見る、最も看る西面赤欄の前、

【略傳】　殷堯藩は元和九年の進士、永樂令と爲り、後、侍御を以て江南に官たり、

【句釋】　和趙相公登鸛雀樓趙が示さるる詩に和韻する、次韻にあらざると知らざるべからず、鸛雀は冠雀　又鸛爵に作る、鶴に似て水を好む、和名「オホトリ」此の樓は前は中條を瞻、下は大河を瞰る、今日の山西省蒲州府、危樓樓閣の高處に在る、皆危の字を以て形容す、高架泬寥天屈原の『楚辭』に泬寥は曠蕩なり「ムナシキ」意味、邪魔する物なし、上相は相公、閒登立彩旃旃は「ハタ」なり、『周禮』の通帛は『說文』の旃なり、高位高官の者は、是を以て其の居所を表す、彩は旃に文章の飾あるなり、樹色到京三百里唐の京都は長安即ち陝西の西安府、今日の路程としても、三百里支那里程餘なり、河流歸漢幾千年黃河は甘肅より內蒙古を經、又南流、山西陝西の

境を經て以て渤海に入る、蠻地より中國に入る故に漢に歸すと云ふ、晴峯聳日當周道此の周道も次句の舜田も共に中國の意味に見よ、西安府即ち長安は周王畿地と曰ふ、此の方へ當て峯峯皆晴色を表す、秋穀垂華滿舜田舜は父の爲め自から歷山に畊やす、舜の都とせし地、即ち山西の平陽府蒲州に當る、一名を中條山と云ふ雲路は樓上、何人は相公、見高志堯は舜の高志を見て其の位を遜れり、相公は果して何人かの高志を見るならん、最看西面樓の所在地より京は西に當る、赤欄前西面は長安の天子に背かざるの意、

【評論】　此の篇、第一句は正しく樓を叙し、二句は登る人、三句は樓上所見の高景、四句は樓上所見の低景、五句は高景、六句は低景、七八は相公の人格に歸す、七律の正法眼此に在り、季昌が河流の事を疑ふは一理あり、山西より陝西に向ふは逆流にて實際は陝西より山西に入る而して渤海なるが、今は天子へ朝宗する意にて歸漢と四句にありしなり、詩と地理書と混同する勿れ、

凌歊臺

許渾

宋祖凌歊樂未回　三千歌舞宿層臺　湘潭雲盡暮山出

巴蜀雪消春水來　行殿有レ基荒薺合　寢園無レ主野棠開
百年便作萬年計　岩畔古碑空綠苔

宋祖凌歊に樂んで未だ回らず、三千の歌舞層臺に宿す、湘潭雲盡て暮山出で、巴蜀雪消して春水來る、行殿基有て荒薺合し、寢園主無して野棠開く、百年便ち萬年の計を作す、岩畔の古碑空しく綠苔、

【句釋】凌歊臺は太平州の北、黃山に在り、歊は暑氣を云ふ、暑氣を凌ぐ爲め築きしもの、宋祖は宋の武帝劉裕なり、東晉を亡ぼして八世六十四年を保ちしもの、都は金陵なれども南游、此の山に凌歊を築く、樂未回劣慾を恣にして宮に回り政治を覽ることを忘る、三千歌舞宿層臺天子も宿するに依て三千の美人も亦宿す、風紀紊亂知るべきのみ、湘潭は三湘の一、雲盡暮山出岳州の邊、雲散ずるが故に暮山の出るを見る、巴蜀雪消春水來此の地に春水の流るるを見て、巴蜀に雪の消したるを知る、行殿は行宮と同じ、離宮を云ふ、有基は基礎のみ殘る、荒薺合荒た「ナヅナ」が葉を合す、寢園は天子の墓の異名なり、無主陵墓の司無し、野棠開棠は梨、百年は人の一生、便作萬年計命の須臾なるを知らずして千年も萬年も不朽ならしめんとして此の如

き物を建て民力を勞す、然るに岩畔古碑空綠苔人をして讀ましめん爲め功を勒したる碑も何人も讀ず、空しく綠苔に鎖す所以、

【評論】此の篇、晩唐の七律として正宗に屬するもの、日本の絕海が學ぶ所、多く此等の詩にあり、一二の句は昔年、三四五六は今の所見、山は高處、水は低處、行殿は高處、寢園は低處、七八は前六句を收結して我に歸宿す、

洛陽城

禾黍離離半野蒿　昔人城此豈知勞　水聲東去市朝變
山勢北來宮殿高　鴉噪暮雲歸故堞　雁迷寒雨下空濠
可憐緱嶺登仙子　猶自吹笙醉碧桃

禾黍離離として半野蒿、昔人此に城て豈勞を知んや、水聲東に去て市朝變じ、山勢北より來て宮殿高し、鴉は暮雲に噪て故堞に歸し、雁は寒雨に迷うて空濠に下る、憐むべし緱嶺の登仙子、猶自から笙を吹て碧桃に醉ふ、

【句釋】洛陽城は今日の河南省河南府、周に東都と云ふ、東漢此に都す、唐の武后神都と改む、

都城前は伊闕に直り、後は邙山に據る、瀍を左にし澗を右にす、洛水其の中を貫ぬく、以て河漢に象どる、東西五千六百三十歩、南北五千四百七十歩、周り二十萬五千五十歩、其の崇さ丈八尺、禾黍離離は『詩經』の語を用ふ、離離は禾黍の茂生する形容、半野蒿『詩經』に食ニ野之蒿一とあり、蒿は『雅翼』に今の青蒿と、卽ち和名「クソニンジン」、諸香菜に交へて食ふもの、洛陽の現今の景色を云ふ、昔人城此豈知勞城は築くと讀む、今は田畝、昔は錦城、周公時代君の民を思ふ勞を知らざるなり、水聲東去市朝變東漢以來の變遷を云ふ、洛水、城中を貫流す、山勢北來宮殿高北邙山の如き墓多き山も、伊闕山、熊耳山、嵩山の如き高山もあり、雲臺、凌雲臺、玉女臺等皆此に在り、鴉噪暮雲歸故堞堞は女墻、白を以て塗る墻、卽ち城上の「メガキ」を云ふ、雁迷寒雨下空濠濠は隍と同じ、城外の「ホリ」なり、鴉は城内の樹に宿を求め、雁は城外の濠に泊を定む、可憐緱嶺登仙子周の靈王太子晉を謂て登仙子と爲す、偃師縣は洛陽縣の鄰とす、此に緱氏山あり、緱嶺是れなり、猶自吹笙醉碧桃王子晉は道人浮邱公に隨て嵩山に上る、後、人、山上に於て之を見る曰く、我家に告よ七月七日我を緱氏山頭に待よ、果して白鶴に乘じて山頭に駐まる、吹笙の者も碧桃に醉ふ者も共に此の仙人王子喬名は晉を指す、今日も仙と爲て死せず此の緱嶺に在んとなり、

【評論】此の篇、第一句、今現に見し景なるや、或は此の此の如き禾黍の地なりしを昔人が城を築かん爲め開拓せしなりとの意か明白ならず、今見る所とすれば荒涼と言はざるべからず、作者は恐くは今日の卽目を言ひしならん、然らば此の一句は今、二句は昔、三四五六は今七八は今昔を結んで一に歸す、荒涼と云ふは非ならんが、繁華にはあらざること分明なり、許渾の意、王子喬は鳳笙を弄して游ぶならんが、周室は已に亡びて亦其の道を知る能はず、國は仙に依て興らず、政に依て興るとの感慨を漏せしものならんか、此の意あり始めて以て詩の道に助あるなり、

金陵

玉樹歌殘王氣終　景陽兵合戍樓空　楸梧遠近千官塚
禾黍高低六代宮　石燕拂雲晴亦雨　江豚吹浪夜還風

英雄一去豪華盡　唯有青山似洛中

玉樹歌殘て王氣終ふ、景陽兵合して戍樓空し、楸梧遠近千官の塚、禾黍高低六代の宮、石燕雲を拂て晴亦雨、江豚浪を吹て夜還風、英雄一ひ去て豪

華盡く、唯青山のみ有て洛中に似たり、

【句釋】金陵は前に辨せり、玉樹歌は陳の後主の作、王氣終吳と東晉と南朝の宋齊梁陳の六朝は皆此に都す、而して今や都は長安にて金陵にあらず、王氣終る所以、景陽兵合戍樓空景陽樓は宋の元嘉二十二年築く、孝武の大明中に紫雲、景陽樓より出づ、因て以て名く、『六朝紀勝』に今の玄寶寺の西南に遺地猶存せり、蓋し陳の後主、張妃と擒に景陽井に就く、當時の戍樓、今日は空し、楸梧は楸と梧なれども合して一と爲す、琴材と爲る「キリ」なり、遠近千官塚塚上此の楸梧多く植う、禾黍禾と黍とは大小の相異のみ、今一物と爲す、高低六代宮宮址に禾黍が茫茫と荒生する、吳、東晉、宋、齊、梁、陳、の六代なり、吳の太初宮、晉の建康宮、宋の未央宮、梁の金華宮、陳の景陽宮、齊の宮は明白ならず、石燕は「イハツバメ」雨に遇へば則ち飛ぶ、拂雲晴亦雨晴兩定まらざる時、江豚は猪に似て水中に居する動物、鼻より聲を發し舟人之を聞て大風雨を知ると、吹浪夜還風其の暴るる勢を云ふ、英雄は天子を主とし、臣を賓とす、一去豪華盡王氣終る、豪華も盡る所以、唯有青山似洛中洛陽なりと知る事を得るは依然たる青山四面を圍めばなり、是の故に古の洛中に似たりと見る可きなり、

【評論】此の篇、元の方虛谷曰く禾黍の一句好し、楸梧を松楸に作りて曰く非なり、大抵亡國

の餘、烏んぞ松楸千官の塚を蔽ふものあらん、五六は江上の景に切なり、清の紀曉嵐曰く松楸の句、本意林莽蔽翳を指して言ふ、舊日の松楸ありと言ふにあらず、語意不明の故に虛谷の摘む所と爲る、明の謝茂秦は前後截て二絕句と爲すべしと、三家の評、紀を以て善とす、虛谷茂秦共に詩を知らず、唯此の詩の失を言はば、八句悉く今を言うて古を言はざるに在り、變化の才に乏し、盛唐人に及ばざる所以、寧齋は「神致悠揚」と、正論にはあらず、

咸陽城東樓

一上高城萬里愁　蒹葭楊柳似汀洲　溪雲初起日沈閣
山雨欲來風滿樓　鳥下綠蕪秦苑夕　蟬鳴黃葉漢宮秋
行人莫問當年事　故國東來渭水流

一たび高城に上れば萬里の愁あり、蒹葭楊柳汀洲に似たり、溪雲初て起て日閣に沈み、山雨來らんと欲して風樓に滿つ、鳥は綠蕪に下る秦苑の夕、蟬は黃葉に鳴く漢宮の秋、行人問莫れ當年の事、故國より東來渭水流る、

【句釋】咸陽城東樓は卽ち陝西西安府、古の長安の西北四十里に在り、秦の都と漢の都とせし

地は名は同じきも、地理少しく異なる、渭水の西北、其の異なる所以と、一上高城萬里愁咸陽城上に登れば種種と感慨生ず、萬里の風物皆愁と爲る、兼葭は水中に生ずるが本性なり、今楊柳と共に陸上に生ず、故に云ふ似汀洲陸地も濕うて汀洲に似たるなり、溪雲初起日沈閣雲は溪より起り日は閣に沈むが如く、山雨欲來風滿樓雨の來らんと欲する前には風先づ至る、風物の凄凄たらんとする景色、鳥下綠蕪秦苑夕大名が小人と綠蕪は艸の生茂せるもの、秦の古苑としたる地、蟬鳴黃葉漢宮秋小人が大名と爲りしが如し、行人莫問當年事當年を一本、前朝に作る、故國東來渭水流此の句は一本、渭水寒光晝夜流に作る、渭水は隴西より流れ來る、秦祖は隴西卽ち甘肅より出づ、天下を一統したるも漢の爲め亡ぼされ、秦の天下は僅僅三世、數十年、漢の天下は前後合して二十四世、四百年を保てり、其の四百を保ちし天下も今日は亡滅して唯渭水のみ流るるを見る、變遷の止む無きを嘆ずるなり、

【評論】　此の篇、方虛谷の評に尾句十四字を佳と爲す、中の四句前聯後聯前詩驪山の詩と一同皆裝景のみ、紀曉嵐曰く起句と三句とを摘まば原自から惡しからずと、後世、此の第四句を嘆じて走卒も亦知る、余も亦何等の所以を知らず、三四は無情の物を以て對し、五六は有情の物を以て對す、而して七八我が情に歸宿す、盛唐大家の法にあらざるも、周弼取る所多く此に在り、

晚自東郭留一二游侶

鄉心迢遞宦情微　吏散尋幽竟落暉　林下草腥巢鷺宿
洞前雲濕雨龍歸　鐘隨野艇回孤棹　鼓絕山城掩半扉
今夜西齋好風月　一瓢春酒莫相違

鄉心迢遞として宦情微なり、吏散幽を尋ねて落暉を竟ふ、林下草腥うして巢鷺宿し、洞前雲濕うて雨龍歸る、鐘は野艇に隨うて孤棹を回し、鼓は山城に絕て半扉を掩ふ、今夜西齋好風月、一瓢の春酒相違ふ莫し、

【句釋】　晚自東郭留一二游侶友人と東郭に游び、晚に至りて別を惜み、一二の友人を自宅へ宿泊せしめしなり、鄉心迢遞は迢は遙なり、遞は遠なり、許渾は『唐書』に傳なし、今『全唐詩』に依て見る、字は用晦、丹陽の人と、丹陽は今日の安徽省寧國府宣城縣治、東郭は陝西省なれば、湖北を經るか、或は河南を經るか、此の二國を經ざれば行く能はず、迢遞たる所以なり、支那里程としては三百有餘里あるべし、宦情微は宦僚の氣は乏し、所謂平民的なりと云ふにあり、吏散は官吏にして閒散と云ふ意味なり、許渾は潤洲の司馬、監察御史、虞州員外郎、睦鄂二州

の刺史の官、日本今日の官制にて言へば高等官なり、判任にはあらず、而かも自から吏散と云ふ、尋幽竟落暉石川鴻齋は「一方ノキキ役者ト云フ官ニアラズ」と云ふ、知事や縣令がきき役者にあらずとは何事ぞ、鴻翁は『全唐詩』を讀まざるなり、幽處の趣致を尋ねて落暉に至るなり、林下草腥巢鷺宿林下には巢を結ぶ鷺などあり魚を取て食ふ氣が腥きなり、洞前雲濕雨龍歸鷺は林下に宿す事實ならんも、龍は人眼の見るべきにあらず、然れども詩人の眼は此の如く見るなり、鐘隨野艇回孤棹鐘は不時の鐘もあれど大底は時刻を報ずる爲め撃つ、午後の六時頃の鐘なるを知らば艇卽ち小舟も回らざるを得ず、鼓絶山城掩半扉城樓の鼓已に城門の閉づるを報ず、城外に游ぶ者は城中に歸らざるを得ず、今夜西齋好風月東郭の游已に佳游なり、我が家の西齋も何ぞ好風月にあらざらんや、一瓢春酒莫相違我が意に反對せず共に一瓢の酒を飲んかなと勸む、

【評論】此の篇、一二三四は正しく東郭の游を叙し、五六は東郭より歸來を叙し、七八は游侶を留むる我が家の事を叙す、

題飛泉觀宿龍池

西巖泉落水容寬　靈物蜿蜒黑處蟠　松葉正秋琴韻響

菱華初曉鏡光寒　雲收星月浮山殿　雨過風雷遶石壇

仙客不歸龍亦去　稻畦長滿此池乾

西巖泉落て水容寬なり、靈物蜿蜒として黑處に蟠る、松葉正に秋にして琴韻響き、菱華初て曉て鏡光寒し、雲收まりて星月山殿に浮び、雨過て風雷石壇を遶る、仙客歸らず龍も亦去る、稻畦長く滿て此の池乾く、

【句釋】飛泉觀は梁道士が故居、宿龍池なる池が此の「觀」中に在る、池を主として叙す、泉落は瀑布を云ふ、水容寬非常に大なるなり、靈物は龍を云ふ、佛敎も儒敎も共に靈と爲す、蜿蜒は蟠まりたる形容、黑處蟠水深の處を黑處と云ふ、松葉正秋琴韻響秋風の爲め松聲が琴韻の響くかと疑ふ、菱華は「ヒシ」の花魏の曹操が菱華鏡を畜へし故事もある、初曉鏡光寒池の光と鏡と合して、今池が鏡の如く澄むを云ふ、雲收星月浮山殿雲收まるが爲に星月が山殿卽ち道祖を祀る本殿上に浮ぶ、雨過風雷遶石壇雷聲の石壇を遶るは以て其の石壇の高きを知る、仙客不歸梁道士も去て歸らず、龍亦去眞龍も去て來らず、稻畦長滿此池乾稻田は水滿つも此の宿龍池は水が乾涸すとなり、

【評論】　此の篇、仔細に之を讀む、支離滅裂の感あり、第一句泉落の語あり、第二句靈物蟠の語あり、而して三四五六、共に其の今日所見を言ふものの如し、然るに七句に龍亦去と叙し八句此池乾と叙す、詩は一一理に合するの要無しと雖も、此れは亦甚だしく理に合せず、寧齋の『評釋』に「上六句は全く前游を追想して、後二句を以て現在に説下す」此の如くに助けて解釋せば、何の詩か解釋の能はざるものあらん、然れども何に由て作者は是に於て前游の意味を六句に表はしたりと思へるや、『本集』に「重游飛泉觀題故梁道士宿龍池」とあるも、題目を失する場合は全く人をして大に疑はしむ、重游の二字、詩に於て全く表はれず、余は斷言す、此の作は到底失敗の詩たるを免れず、

咸陽懷古

劉滄

經過此地無窮事　一望凄然感廢興
咸陽秋草漢諸陵　天空絶塞聞邊雁
風景蒼蒼多少恨　寒山半出白雲層
葉盡孤村見夜燈

此の地を經過すれば無窮の事あり、一望凄然として廢興を感ず、渭水の故

都は秦の二世、咸陽の秋草は漢の諸陵、天空うして絶塞邊雁を聞き、葉盡きて孤村夜燈を見る、風景蒼蒼たり多少の恨、寒山半出づ白雲層、

【略傳】　劉滄字は蘊靈、太中の進士、魯の人、後世、懷古詩を以て許渾と幷稱せらる、

【句釋】　咸陽は前に辨ぜり、經過此地此の咸陽の故地を經過するときは、無窮事感慨の窮まり無きなり、一望凄然感廢興秦に興るも漢に破れ、漢に興るも晉に破ると云ふ、其の事を懷へば凄然たり、渭水故都秦二世渭水は隴西首陽縣の渭谷亭南の鳥鼠山より出て以て陝西を貫流す、渭水の北に咸陽の故都あり、始皇と其の子、胡亥の二世にして亡ぶ、咸陽秋草漢諸陵秦の舊都を以て復都とす、渭水と龍首山皆其の南に在るを以て故に咸陽と曰ふ、高陵、安陵、茂陵あるも今日は秋草に埋めらる、天空は蒼天を云ふ、絶塞は絶域の塞なり、長城を指す、聞邊雁北邊より來る雁聲を聞く、葉盡秋日に遇うて群木落葉す、孤村見夜燈故都の跡、孤村寂寞として唯一點の燈火を認む、風景蒼蒼多少恨多少は若干と同じ、蒼蒼は老樹の鬱蒼と生ずるを言ふ、寒山半出白雲層白雲の層を破りて山骨上に聳ゆるを言ふ、

【評論】　此の篇、周弼は誤て作者を許渾とす、諸家の注する者も亦然り、許渾の本集を檢する

に此の詩無し、劉滄の集に此の詩を載す、『瀛奎律髓』亦劉滄とす、清の紀曉嵐曰く前四句氣魄甚だ大、此の種の如きは便ち俗ならず、其の故は思ふべくして口舌を以て爭ふ能はず、惜むらくは後半稍弱、層の字亦押し得て穩ならず、寧齋は紀評を然りとす、余案ずるに此の篇は三四五六の四句頗る佳にして、一二七八の首尾甚だ佳ならずと、紀が起句を評して氣魄甚大と、余は言ふ起句は兒童語に過ぎず、拙も亦極まれり、殆んど大人の口吻にあらず、紀老耄の至す所誰か之を信せんや、寧齋は晞文が此の詩を劉滄の作と爲したるを怪しむが、本集に無き所を見れば聊かも怪しむに足らず、

黃陵廟

李羣玉

小孤洲北浦雲邊　二女明妝共儼然　野廟向江春寂寂
古碑無字草芊芊　東風近墓吹芳芷　落日深山哭杜鵑

猶似含顰望巡狩　九疑如黛隔湘川

小孤洲の北浦雲の邊、二女明妝共に儼然、野廟江に向て春寂寂、古碑字無して草芊芊、東風墓に近うして芳芷を吹き、落日深山杜鵑哭す、猶顰を含

んで巡狩を望むに似たり、九疑黛の如く湘川を隔つ、

【句釋】黃陵廟は湖南の岳州府湘陰縣の北八十里瀟湘の尾、洞庭の口に在り、舜の二妃、蛾皇と女英を祀る、小孤洲は一本、小哀洲に作る、湘陰縣の西三十里と、北浦雲邊浦雲が搖曳する邊二女明妝共儼然二女の偶像が明妝を凝らして共に儼然たり、野廟向江春寂寂廟の方向を示す、江に面して人の謁する者少春も寂寂たり、古碑無字草芊芊韓退之が廟碑に庭に古碑あり、斷裂して地に在り、其の文剝缺せり、其の碑は晉の太康九年に立つ、芊芊は草の「シゲレル」なり、東風近墓零陵に葬る舜の墓なり、吹芳芷蘭の一種を芷と云ふ、ヨロヒ草、落日深山哭杜鵑杜鵑は昔蜀帝の魂が化して成りしと云ふ說あるに依て今此の二妃の魂も杜鵑を聞くに付け、其の亡魂にあらずやと想像する、深山は湘山を云ふ猶似含顰望巡狩含顰は額を蹙めて愁ふるの形容詞、其の像に對して云ふ、舜の巡狩を望見するが如きなり、舜は南狩して蒼梧の野に死せしなり、二妃之を逐うて竟に生前に逢ふ能はざりしなり、九疑は山の名、舜を葬むりし山、如黛樹木が鬱として黛卽ち「マユズミ」の色の如し、隔湘川此の湘川と九疑の間、僅僅數里に過ぎざるなり、

【評論】此の篇、周弼は許渾と爲し、日本の先輩大抵然り、然るに許渾の『本集』に此の詩無し、却て李羣玉の集に載す、『律髓』も亦李羣玉の作とす、從ふべきに似たり、寧齋は李に非ずと辨

ず、要するに何の證據無し、方虛谷も紀曉嵐も此の詩に就ては敬念を表せず、虛谷云ふ第六句好と、紀は云ふ總是陳套と、寧齋の如きは匠心の筆なりと、此を匠心と謂ふ、何れの詩か匠心ならざらん、寧齋は畢竟王漁洋に欺むかれたるなり、

晩歇湘源縣

張泌

煙郭遙聞向晩雞　水平舟靜浪聲齊　高林帶雨楊梅熟
曲岸籠雲謝豹啼　二女廟荒宮樹老　九疑山碧楚天低
湘南自古多離怨　莫動哀吟易慘凄

煙郭遙かに聞く晩に向なんとする雞、水平に舟靜にして浪聲齊し、高林雨を帶て楊梅熟し、曲岸雲を籠めて謝豹啼く、二女廟荒て宮樹老い、九疑山碧にして楚天低る、湘南古より離怨多し、哀吟を動かして慘凄し易からむる莫かれ、

【略傳】張泌は江南の人、南唐の内史舍人の官と爲る、

【句釋】晩歇歇は息なり宿なり、湘源縣は永州零陵郡と古注にあり、永州は今日湖南省に屬す、然るに李兆洛は唐江南道永州、今は廣西省桂林府全州西七里と、然らば今日の永州は古の永州と異なるものの如し、煙郭遙聞向晩雞湘源縣に歇うて先づ暮雞の聲を聞く、水平舟靜浪聲齊湖南と廣西の間には大川あらず、然れども此の詩事實とすれば、舟行浪平穩なりしなり、高林帶雨楊梅熟楊梅は「ヤマモモ」なり、曲岸籠雲謝豹啼杜鵑を蜀人稱して謝豹と云ふ、二女廟は黃陵廟なり、荒宮樹老荒涼たる廟邊の樹木唯老たる在り、九疑山碧楚天低今日の地理上、桂林府より如何に神通力あるも、岳州府の九疑山を望める道理なし、此の間數百里を隔つ、但楚天に重きを置き、九疑は眞に認めたるにはあらず、湘南自古多離怨蛾皇女英の如き、楚の屈平の如き、悉く此の湘中に怨のあらざる者無し、莫動哀吟易慘凄我も他人も問はず、哀吟するときは歷史的感慨が浮び人をして慘凄の情を增しむ、故に哀吟する莫れと云ふ、

【評論】此の篇、晩歇湘源縣と題するに依て古注、江南道永州零陵郡なりと云ふ、其の零陵は今日の廣西の桂林府にして湘南にあらず、而して篇中、湘南自古と云ふ、『漢書』に湘南は長沙に屬すと、長沙府と桂林府とは支那里三百里を隔つ、疑ふべき點多きも、古今疑ふ者一人も無し、抑も詩は地理志にあらざるを以ての故か、深く地理を調べざる故か、或は題目を誤まりし

故か、余は題目の誤を主張する者なり、

廢宅

吳融

風飄碧瓦雨摧垣　却有鄰人爲鎖門　幾樹好華閒白晝
滿庭荒草易黃昏　放魚池涸蛙爭聚　棲燕梁空雀自喧
不獨凄涼眼前事　咸陽一火便成原

風は碧瓦を飄し雨は垣を摧く、却て鄰人有て爲めに門を鎖す、幾樹の好華か白晝に閒なる、滿庭の荒草黃昏なり易し、放魚池涸て蛙爭ひ聚まり、棲燕梁空しくして雀自から喧し、獨凄涼たる眼前の事のみならず、咸陽も一火に便ち原と成る、

【句釋】廢宅は唐末兵亂後の所見を賦す、風飄碧瓦雨摧垣風雨縱橫に一任す瓦は落ち垣は傾むく、却有鄰人爲鎖門鄰家の人は廢宅人無き故に來りて門を鎖す、卽目の景ならん、幾樹好花閒白晝白晝閒にして好花自から開く、滿庭荒草易黃昏人が住せざる故、自然と陰鬱の氣が滿つ、其の

上、荒艸茫茫、早く黃昏と爲る所以、放魚池涸蛙爭聚魚は人が養はずんばあらず、蛙は惡水に自然と生ず、棲燕梁空雀自喧燕は人の梁にあらずんば棲まず、雀は廢宅にも啾啾たり、不獨凄涼眼前事今卽目する所は僅かに民家一宅のみ、此の小景以外更に大なるものがある、咸陽一火便成原劉邦と項羽と聯合して秦を亡ぼし繁盛を極めたる咸陽城も但一火に付し去る、火の消せざること三日と、

【評論】此の篇、廢宅を賦して其の廢宅の意義自から整正す、巨景より細景に入り、而して巨景を以て結ぶ、寧齋は雄闊と評し去るが、決して雄闊の句にはあらず、紀曉嵐云ふ第三句は廢宅に似ずと、嚴宅にも好花あるは事實なり、似ずとは何ぞや、晚唐として上乘の部に屬す、

龍泉寺絕頂

方干

未明先見海底日　良久遠雞方報晨　古樹含風常帶雨
寒巖四月始知春　中天氣爽星河近　下界時豐雷雨均
前後登臨思無盡　年年改換往來人

未だ明けざるに先づ海底の日を見る、良久しうして遠雞方に晨を報ず、古

樹風を含んで常に雨を帶び、寒巖四月始めて春を知る、中天氣爽にして星河近く、下界時豐にして雷雨均、前後登臨して思ひ盡ること無し、年年改め換ふ往來の人、

【略傳】方干字は雄飛、新定の人、人缺脣先生と稱す、有司干が脣の缺けたるを以て科名を與ふるを許さず、咸通中、鑑湖に隱居す、一に云ふ桐廬の人、姿態山野、時に方處士と號す、嘗て廉倅に謁す、誤て三拜す、人、方三拜と稱す、將に朝に薦めんとす、卒す、門人玄英先生と謚す、韋莊奏して及第を賜ふ、一に云ふ宰臣張文蔚、中書舍人として封舜卿、名儒にして不遇なる者十五人を奏し各の一官を賜られて以て其の魂を慰さむ、干は其の一人なり、

【句釋】龍泉寺は餘姚、卽ち浙江省紹興府餘姚縣治に在り、絕頂山頂に在る寺なり、未明先見海底日天未だ明ならざるに海底已に明なり、良久俗に「シバラク」なり、遠雞方報晨山麓の民家より雞聲が起るを聞く、古樹含風常帶雨地幽なるが故なり、寒巖四月始知春山深きが故なり、中天氣爽星河近寺高處に在るが故なり、下界時豐雷雨均龍の下界に澤するが故なり、前後は度度なり、登臨思無盡幾回登りても、興の盡ること無し、年年改換往來人住僧が時時代ると云ふ說

あるが、全く其の意ならん、一僧往て一僧來り、僧家の諸行無常を此の中に言ふ、

【評論】此の篇、山寺の境を寫して全く平凡、聊かも奇無し、殊に此等の人、唯詩語を知て、佛語を運用する力無く、紀曉嵐を待て始めて此の詩を論ずるの要を認めず、韓翃の「同題仙游觀」より此に至る十四首、四實の中、又類の同じきを集む、二句より中間の實に入り或は六句より虛に入る蟻の九曲を穿つが如く曲折するなりと、

和賈至早朝大明宮　王維

絳幘雞人送曉籌　尙衣方進翠雲裘　九天閶闔開宮殿
萬國衣冠拜冕旒　日色乍臨仙掌動　香煙欲傍袞龍浮
朝罷須裁五色詔　珮聲歸向鳳池頭

絳幘の雞人曉籌を送り、尙衣方に進む翠雲裘、九天閶闔宮殿を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す、日色乍ち仙掌に臨んで動き、香煙は袞龍に傍て飛んと欲す、朝罷て須らく五色の詔を裁すべし、珮聲は歸りて鳳池頭に向ふ、

【句釋】和其の意を和す、賈至字は幼鄰、賈曾が子洛陽の人、明經の第に擢んでられ、褐を單

父の尉に解けり、玄宗拜して中書舍人と爲す、早朝大明宮大明宮は正しく天子出御政治を聞くの處、絳幘雞人曉を司る役人を雞人と云ふ、雞に象どる朱冠、卽ち赤色の布にて髮を包むもの送曉籌籌は「ハカル」卽ち時計なり、報を宮禁内に報じ巡る、日本の皇宮警手位の官なり、尙衣は役名、衣を取扱ふ役人なり、方進翠雲裘天子の服を翠雲裘と云ふ、是を以て天子に進む、朝御の服裝に取換る、九天は九重の天、閶闔は天門の名、天上の紫微宮の門を閶闔と云ふ、以て今人間の九重門開くに譬ふ、天門も實際に開くなり、萬國衣冠は中外の臣僚を云ふ、拜冕旒天子の冠を冕と云ふ、冕の四隅に十二の旒を垂る、諸侯が來りて皆天子に拜謁する、日色乍臨仙掌動曉日が所謂金製の仙人掌上に動く、香煙欲傍袞龍浮天子の坐邊に香を薰ずるが故に其の煙が御衣に傍て飛んと欲する狀、袞龍は衣に描く模樣、天子は勿論、大臣の服にも袞龍を描くを許す、朝罷宮中を退出する、須裁五色詔詔書は必ず五色の紙に書す、裁は書なり、珮聲は賈至が大禮服の玉の佩ものの聲、歸向鳳池頭中書省は鳳凰池の側に在り、宮廷を退出して自身が職を執る役所に歸る、

【評論】此の篇、賈至が詩に和して作る四名篇の一なり、明の顧華玉が曰く右丞此の篇直ちに老杜と頡頏す、後唯岑參之に及ぶ他は皆及ばず、蓋氣象闊大、音律雄渾句法典重用字新清備は

らざる所無き故なり、未だ全く美ならざるは衣服の字を用ふること太だ多きを以てのみ、今謂く賈至が大明宮の詩に和する者は、右丞と岑參と杜甫なり、顧の他は皆及ばずと稱するは、岑と原唱の賈至を言ふならん、然れども此の四家の詩は決して其の優劣分判すべからず、强て優劣を分つは、其の好尙の異なるに依るのみ、顧の好む所、右丞と老杜の二家にある、其の衣服多きを嫌ふは、善を知り亦惡を知る者、絳幘、尙衣、翠雲裘、衣冠、袞龍、悉く衣服に屬す、此の如く衣服に關する字の多きは他三家に無し、然れども是に由て此の詩の名篇たるを害する能はざるなり、

又　　岑參

雞鳴紫陌曙光寒　鶯囀皇州春色闌　金闕曉鐘開萬戸
玉階仙仗擁千官　華迎劍佩星初落　柳拂旌旗露未乾
獨有鳳凰池上客　陽春一曲和皆難

雞は紫陌に鳴て曙光寒し、鶯は皇州に囀じて春色闌なり、金闕の曉鐘萬戸を開き、玉階の仙仗千官を擁す、華は劍佩を迎へて星初めて落、柳は旌旗

を拂うて露未だ乾かず、獨鳳凰池上の客のみ有て、陽春の一曲和することを皆難し、

【句釋】雞鳴紫陌宮陌を紫陌と曰ふ、又綉陌と曰ふ、紫微宮又は紫宸殿、多く紫字を皇城に用ふ、天上に此の紫字を多く用ふればなり、曙光寒旭日の氣猶寒きなり、鶯囀皇州春色闌皇州は皇城を曰ふ、闌は十分を過ぎたるを云ふ、然らば是れ晩春なり、金闕も宮中なり、曉鐘開萬戸宮城内の千門萬戸曉鐘を聞て開くなり、我邦人の千門萬戸は皆誤用なること見るべし、玉階は宮階なり、仙仗は朝會の仗、三衛番の士、分て五仗と爲す、擁千官擁は守護、武士が羣臣を擁護する、花迎劍佩佩劍の武官を花は迎ふるが如し、星初落花が見えるは星の落し曉天なり、柳拂旌旗宮門に樹つ旌旗は柳枝の爲めに拂はる、露未乾露の乾く時、旭日三竿、乾かざるは、旭漸く登る時なり、獨有鳳凰池上客此の客は賈至舍人を指す、陽春一曲和皆難千官羣臣朝する中に賈至舍人のみ早朝の名篇を作る、之を和することは至難、作るも舍人には及ばずとなり、楚の宋玉曰く楚に善歌ふ者あり、始めは下俚の巴人と曰ふ、國中唱て之を和する者數百人、既にして陽春白雪、朝日魚離と曰ふ、國人和する者數人に過ぎず、其の唱彌よ高く其の和彌よ寡なし、

【評論】此の篇、一句より六句に至る、皆曉景を叙し、七八の二句其の和意を云ふ、鍾伯敬曰く乾元二年蕭宗初めて京に還る鳳翔府時參は補闕たり、甫は拾遺たり維は右丞たり、至は舍人たり、同時の唱和、其の詩並に選唐詩選に入る、岑王矯矯として相下らず、舍人は雁行す、少陵は當に退舍すべし、蓋し尺も短とする所あり、寸も長しとする所あり、一詩を以て優劣を議すべからず、劉正卿曰く杜一、王二、岑三、賈四と、謝茂秦曰く賈一、岑二、王三、杜四と、古今の評一定せざること此の如し、強て判定するは愚ならずや、

酬暢當嵩山尋麻道士見寄　盧綸

聞逐樵夫閒看棊　忽逢人世是秦時　開雲種玉嫌山淺
渡海傳書怪鶴遲　陰洞石幢微有字　古壇松樹半無枝
煩君遠示青囊錄　願得相從一問師

聞く樵夫を逐て閒に棊を看る、忽ち人世に逢ふ是れ秦時、雲を開き玉を種て山の淺きを嫌ひ、海を渡り書を傳へて鶴の遲きを怪しむ、陰洞の石幢微にして字あり、古壇の松樹半枝無し、君を煩はして遠く示す青囊錄、願く

は相從ふことを得て一に師を問ん、

【句釋】 暢當は河東の人、貞元の初、太常博士と爲る、麻道士は傳を缺く、嵩山は五岳の一、河南省河南府に在り、山東を太室、山西を少室と云ふ、嵩は總名なり、少林寺に達磨洞あり、僧と道士と住する者なり、聞逐樵夫閒看棊暢當が此の事を言ふを盧綸が聞く、晉の王質、山中に往て仙人の棊を圍むを見て斧の柄の腐爛したるに驚き歸れば年已に百年、其の故事を云ふ、忽逢人世是秦時淵明の武陵源記の事を用ふ、秦の亂を避けて隱るる人に漁父が逢ふ、開雲種玉は麻道士が業を云ふ、『搜神記』に王雍伯、義漿を致して行者に遺る、一人あり、飲訖りて懷中より石子一升を出し之に與て謂て曰く此を種れば好玉を生み、後雙璧を得んと、嫌山淺尋常の山は嫌ふ、嵩山の如きは深きなり、渡海傳書東海を渡り蓬萊方丈に游び、仙人の間に書を傳達する、怪鶴遲鶴の遲きを怪しむ故に鶴は遲からざるなり、反面の意、山は深く、鶴は早きなり、陰洞石幢微有字道士が住する陰洞の前に石幢卽ち石にて作る幢あり、何事か之に記し文字微しく見ゆ、佛家は此の石幢に陀羅尼を記す、仙家は黃庭經など記してあらん、古壇松樹半無枝石壇を繞れる松の老樹ならざるは無し、煩君遠示青囊錄隱公曰く郭公青囊中の書九卷を以て璞に與ふ、後に門人囊を竊む、未だ讀むに及ばず火焚す、今暢當が寄せらるる詩を假りに青囊錄と云

ふ、道士を尋ねし詩なればなり、願得相從一問師暢當に從がつて一度は麻道士を訪問せんと願ふなり、

【評論】 此の篇、句句仙ならざるは無く、語語亦甚だ重し、逸品なるべし、

吳中別嚴士元

劉長卿

春風倚棹闔閭城　水國春寒陰復晴　細雨濕衣看不見
閒花落地聽無聲　日斜江上孤帆影　草綠湖南萬里情
東道若逢相識問　青袍今已誤儒生

春風棹に倚る闔閭城、水國春寒うして陰て復晴る、細雨衣を濕し看るに見ず、閒花地に落ち聽くに聲無し、日は斜なり江上孤帆の影、草は綠なり湖南萬里の情、東道若し相識の問に逢はば、青袍今已に儒生を誤ると、

【句釋】 吳中は今の江蘇、別は一本送に作る、嚴士元は一本、郎士元に作る、且此の詩、此の本には盧綸とある、然るに劉長卿の集に在て盧綸の集に此の詩あらず、今以て從ふ所以、素隱和尙云ふ盧綸が吳中に天寶の亂を避て嚴士元に別るる時の作と、臆斷にて何の證據も無き說な

り、春風倚棹闔閭城吳王の名を闔閭と云ふ夫差の父なり、此の城下より春風に棹し去る、水國春寒陰復晴水國の春は寒く、陰晴も亦定め難し、春寒を一本猶寒に作る、又春深に作る、寒を可と思ふ、細雨濕衣看不見『大學』に視而不見の語あり、看は此の方よりみる、然るに見ず、細なればなり、閒花落地聽無聲『大學』に聽而不聞の語あり、雨の爲め閒花が濕うて落つ、風にあらざれば聲無き所以、日斜江上孤帆影夕陽に帆を揚げて去る、去る者は士元なり、草綠湖南萬里情草には不歸草と名くるあり、我君を逐んと欲するも能はず、萬里の遠き但情を引くのみ、東道若逢相識問士元の歸る道、東なれば云ふ、東道主人の東道にはあらず、舊相識が君に向て我が事を問はば、君は答へ玉へ、青袍今已誤儒生盧綸は今猶青袍を着けて一儒生として放浪し、官吏たるの聲譽は荷はずと、儒生の著帽を青袍とす、

【評論】　此の篇、一二五六七八の六句は全く送別の詩なり、三四の二句、閒適の意、人を送る詩ならず、然れども句としての妙は此の二句にあり、

送王李二少府貶潭峽　盧綸

嗟君此別意何如　駐馬銜盃問謫居　巫峽啼猿數行淚
衡陽歸雁幾封書　青楓江上秋天遠　白帝城邊古木疎

聖代祇今多雨露　暫時分手莫躊躇

嗟す君が此の別意何如、馬を駐め盃を銜んで謫居を問ふ、巫峽の啼猿數行の涙、衡陽の歸雁幾封の書、青楓江上秋天遠し、白帝城邊古木疎なり、聖代祇今雨露多し、暫時手を分て躊躇すること莫れ、

【句釋】　王は長沙の潭州に、李は峽中に貶せらる、縣尉を少府と曰ふ、文吏なり、今出て武役と爲る、嗟君此別意何如貶せらるる人の胸中を察し作者が嗟くなり、駐馬銜盃問謫居貶せられて居る處を謫居と云ふ、馬を駐めて旗亭に入り盃を銜む、馬上にはあらず、巫峽啼猿數行淚『荆州記』に古歌に曰く巴東の三峽巫峽長し、猿鳴きて三聲淚裳を沾ほす、李の方に屬す、衡陽は潭州に近き地、回雁峯あり王の赴く地　青楓江は長沙の潭州に在り、王の赴く地、白帝城は峽中に在り、公孫述が築く所、李の赴く地、一方は江なれば秋天遠なり、一方は山なれば古木疎なり、聖代祇今多雨露『詩經』に雨露は天の萬物を潤す所、以て天子の恩澤に喩ふ、暫時分手莫躊躇手を分つは暫時の間なり、必ず遠からず故官に復し京へ歸ることを得べし、故に躊躇所謂後髮引かるる樣な氣を出さず、速かに行き玉へと言ふ、

【評論】此の篇、巫峽、衡陽、青楓江、白帝城の四地名を挾入、太巧の作と謂つ可し、

西塞山

劉禹錫

王濬樓船下益州　金陵王氣漠然收　千尋鐵鎖沈江底
一片降旗出石頭　人世幾回傷往事　山形依舊枕寒流
今逢四海爲家日　故壘蕭蕭蘆荻秋

王濬樓船益州より下る、金陵の王氣漠然として收る、千尋の鐵鎖江底に沈め、一片の降旗石頭に出づ、人世幾回か往事を傷む、山形舊に依て寒流に枕す、今四海家と爲る日に逢ふ、故壘蕭蕭蘆荻の秋、

【句釋】西塞山は一本「金陵懷古」に作る、今の湖北省武昌府武昌縣に屬す、吳の孫策が黃祖を擊ち、周瑜が曹操を破り、劉裕が桓元を攻め、唐曹王皐淮西を復す皆此に於てす、赤壁と相距る數里の地、元微之と劉夢得禹錫の字と韋楚客と三人同じく白樂天の居に會し、各の金陵懷古の詩を賦す、夢得其の才を騁せ、略遜意無し、滿引一揮して成る、白公詩を覽て曰く四子驪龍を探り、吾子先珠を得たり、其の餘の鱗甲は將何をか爲ん、三公是に於て吟を罷む、王濬は一本

○○西晉に作る、晉の將軍なり、樓船下益州晉の武帝吳を伐んとし、王濬をして大艦長一百三十步二千人を受るを作らしめ、木を以て城を爲る、樓櫓を其の上に起て、流に順うて下る、吳は江磧要害の處に於て鐵鎖を以て橫に之を截て以て船を拒ぐ、濬大炬を作りて燒融す、金陵王氣漠然收金陵は元來王氣ありて天下の都たる處、然るに孫皓が此の一戰に降伏したるを以て漠然として音も無く收まる、千尋鐵鎖沈江底吳は江中に鐵條網を設け、樓船を拒んと欲したるも燒融せられ、功を爲さず、一片降旗出石頭石頭城は孫皓の住城、吳主孫皓は遂に勝ざるを知て面縛して王濬に降る、人世幾回傷往事王濬が孫皓を破りし一事のみならず、金陵は古今戰爭の多かりし處、往事を省れば、幾回か傷まざるを得ず、周瑜は前に曹操を破りたるも、其の主孫權英雄なればなり、孫皓の不肖、竟に此の亡滅を招く、山形依舊枕寒流西塞山の山形は依然舊の如く寒流に臨んで靑靑たり、山河依然、人事變遷、感慨限り無し、今逢四海爲家日天子は四海を以て一家と爲す、唐の聖代、攻る者も無く、破る者も無し、故壘蕭蕭蘆荻秋當時の干戈に代ふるに今日は蕭蕭として唯蘆荻の秋を顯はすのみ、

【評論】此の篇、懷古詩として古今に傑出せるもの、淸の紀曉嵐曰く第四句但吳を說得し、第五句七字六朝を括過す、是を簡練と爲す、第六一筆折て西塞山に到る、是を圓熟と爲す、紀の

言盡きたり、石川鴻齋云ふ鐵鎖と降旗對せず、傷往事と枕寒流對せず、兒童對のみが對にはあらず、是を許渾の金陵懷古に比すれば彼は聲聞辟支果にして此は大乘佛菩薩果なり、和賈至早朝より此に至る六首、篇章首尾句法字法相似たるものとす、

早春五門西望

王　建

百官朝下五門西　塵起春風滿御堤　黃帕蓋鞍呈了馬
紅羅纏項鬬回雞　館松枝重墻頭出　渠柳條長水面齊
唯有教坊南草色　古城陰處冷凄凄

百官朝より下る五門の西、塵は春風に起つて御堤に滿つ、黃帕鞍を蓋ふ呈し了る馬、紅羅項を纏ふ鬬うて回る雞、館松枝重くして墻頭より出で、渠柳條長くして水面に齊し、唯教坊南草の色のみ有つて、古城の陰處冷にして凄凄、

【句釋】早春五門西望皐門、庫門、雉門、應門、路門、是を天子の五門と曰ふ、長安城の西望するなり、百官官人の數を一と百と千とを以てす、十官萬官の語は無し、宮女は三千有つて四

千無きが如し、朝下退朝を云ふ、塵起春風滿御堤車馬盛んなる處、塵亦盛んに起る、御溝の堤上、春風正に滿つ、黃帕帕は繒、黃色の帕、蓋鞍呈了馬、玄宗の時代馬を獻ずるに附庸の君は黃色の鞍覆を掛けて呈上する、紅羅纏項鬬回雞玄宗は酉の年に生れたと云ふに依て鬬雞を好む、賈昌と云ふ年十三の兒童を五百人の小兒の長とし、雞坊を置て其の兒等を軍士の如くにし之を司さどらしむ、勝し雞には紅色の羅を賜うて項に纏はしむ、今宮中より回る、當時の童謳に「生時用ひず文字を識るを、雞を鬬はし馬を走らし讀書に勝れり」、館松枝重墻頭出正しく西望せし物を言ふ、館を覆ふ松枝が墻を超えて出づ、渠は溝なり、柳條長水面齊柳の枝條が殆んど水に著かんとす、唯有教坊南草色玄宗は蓬萊宮の側に教坊を設けたり、其の教坊邊の草色は徒らに青青として、鬬雞時代の繁華には似ず、天寶の亂後を云ふ、古城陰處冷凄凄長安の古城下は草色のみ青青、草の青青たるは其の氣凄凄たらざらんや、

【評論】此の篇一句より六句に至るまで、前代玄宗の繁華なる時を叙し、七八の二句、其の今日の衰狀を云ふ、盛唐の氣格尚在り、推して大家の作と爲す、

錦瑟

李商隱

錦瑟無端五十絃　一絃一柱思華年　莊生曉夢迷蝴蝶

望帝春心託杜鵑　滄海月明珠有淚　藍田日暖玉生煙
此情可待成追憶　只是當時已惘然

錦瑟端無五十絃、一絃一柱華年を思ふ、莊生の曉夢蝴蝶に迷ひ、望帝の春心杜鵑に託す、滄海月明らかにして珠に淚あり、藍田日暖にして玉煙を生ず、此情追憶を成すを待つ可んや、只是れ當時已に惘然、

【句釋】錦瑟は瑟は琴なり、「周禮樂器圖」に飾るに寶玉を以てするを寶瑟と曰ふ、繪紋を以てするを錦瑟と曰ふ、李商隱が少年の時、令狐楚が家に寓す、令狐楚が侍人に能く琴を鼓し適怨清和の四曲を調す、依て錦瑟の名あり、令狐楚は此の女を以て商隱に妻はす、商隱業成り、令が家を辭する同時に此の錦瑟とも離別せり、後、其の事を思うて此の詩を賦す、無端は「アヂキナシ」との意、五十絃『爾雅注疏』に依て見ると古は長八尺一寸、廣一尺八寸、二十七絃と、庖犧氏五十絃を作る、黃帝素女をして瑟を鼓せしむ、哀自から勝へず、乃ち破つて二十五絃を作る、一絃一柱適怨清和の曲調を發して聞く者をして喜ばしめ、亦怨ましむ、思華年少年を華年と云ふ、瑟を聞くに哀怨に勝へず華年の事を思ひ出すなり、莊生曉夢迷胡蝶莊子の「齊

物篇」に莊周夢に胡蝶と爲る、栩栩然として胡蝶なり、自から喩んで周なるを知らず、俄然として覺むれは則ち蘧蘧然として周なり、知らず周が夢に胡蝶と爲るか、胡蝶が夢に周と爲るか、周と胡蝶と則ち必ず分あらん、是れ適意の事を叙す、望帝春心託杜鵑蜀の望帝は死して杜鵑と爲て年年春風に怨む、瑟の怨調を聞くときは豈杜鵑に託するの思ひなけんや、滄海月明珠有淚珠に光あるを淚と云ふ、月明の夜、滄海を見よ、瑟を聞て其の淸調の妙を嘆ず、藍田日暖山の名を藍田と云ふ、玉生煙此の藍田山は美玉を多く產すと、是れ其の和調を叙す、此情此の如く適怨淸和の四情なり、可待成追憶追憶を成すも無益なりとの意、可待は待つべからざるなり、ツマリ無益なり、只是當時已惘然追憶に益あらば、當時も惘然にはあらず、當時惘然は今日も惘然たるなり、今錦瑟を聞て當時妻の錦瑟か瑟を鼓したる事を思うて惘然卽ち失神するなり、今日當座と見るは却て誤る、

【評論】此の篇、李義山が本領の存する所見るべし、王維や孟浩然や柳子厚には見られざる詩なり、錦瑟の事に就て議論紛紜容易に決すべからず、今姑らく一說に依て注するのみ、元遺山や王漁洋が義山を論ずる詩あり、今は錄せず、

江亭春霽　　李郢

江蘺漠漠荇田田　江上雲亭霽景鮮　蜀客帆檣背歸燕
楚山花木怨啼鵑　春風掩映千門柳　晚色凄涼萬井煙
金磬泠泠水南寺　上方臺殿翠微連

江蘺漠漠たり荇田田、江上の雲亭霽景鮮なり、蜀客の帆檣歸燕に背き、楚山の花木啼鵑を怨む、春風掩映す千門の柳、晚色凄涼たり萬井の煙、金磬泠泠たり水南の寺、上方の臺殿翠微連る、

【句釋】江亭春霽は郢が浙江の杭州に在て作る、此の亭は郢が所有なり、江蘺は香草に屬す、和名「ヨンナグサ」芎藭の苗なり、晉の郭璞云ふ水薺に似たり、漠漠は茂生する貌、荇は和名「アサザ」「ウキクサ」『詩經』に參差荇菜とあり、田田に連なり生ずる、第二句は字の如し、蜀客帆檣背歸燕高處より見る所の景、杭州を去て蜀へ歸る客は、全く春晚に燕が杭州へ來ると反對を云ふ、楚山花木怨啼鵑楚山の花木は人をして喜ばしむるが當然、然るに鵑聲を著け却て人を怨ましむ、郢の友、清塞は還俗して他處へ行き、賈浪仙は死して後、我亦友無しとの意を此の

二句にて云ふとの說もあり、萬井は猶ほ萬戶と云ふが如し、金磬は字の如く金磬なり、鴻翁云ふ泉聲なりと誤る、泠泠金磬の聲の形容、水南寺杭州には寺殊に多し、夕陽其の磬聲を泉聲の如くに聞く、上方は寺の高處、臺殿佛を安じ菩薩を置く寺の臺殿なり、翠微連山中に臺殿が連なるなり、

【評論】此の篇、徹頭徹尾、其の望景を叙す、但、漠漠、田田、泠泠の疊字を三處に用ふ、少しく詩格を損す、

送人之嶺南

關山迢遞古交州　歲晏憐君走馬游　謝氏海邊逢姹女
越王潭上見青牛　嵩臺月照啼猿樹　石室煙涵古桂秋
回望長安五千里　刺桐花下莫淹留

關山迢遞たり古交州、歲晏れて憐む君が馬を走らして游ぶことを、謝氏海邊姹女に逢ひ、越王潭上青牛を見る、嵩臺の月は啼猿の樹を照し、石室の煙は古桂の秋を涵す、長安を回望すれば五千里、刺桐花下淹留する莫れ、

【句釋】送人之嶺南大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽、是を五嶺と曰ふ、此の五嶺より南なり、關山迢遞遠くして且遙かなるを迢遞と云ふ、古交州古の交州、卽ち今日の廣東省廣州府、春秋時代、南越の地と稱す、秦は南海郡を置く、一府十四縣を領ず、歲晏晏は暮なり、憐君走馬游游は行の意味、憐むと云ふに依て知る、得意の游にあらざることを、謝氏海邊逢蛇女『唐詩鼓吹』の注に謝端は福州廣東省候富の人、少にして父母を喪なひ、鄰人之を養ふ、恭謹自ら守る、一日海邊に於て一螺を得、三升壺の如し、甕中に貯ふ、耕作して還る每に、飯飲湯火、人の爲る所の如し、之を疑うて早に出て籬外より之を窺ふ、一少女の甕中より出るを見る、入て之を問ふ、女倉卒にして甕に入んと欲す、得ず、答て曰く我は大漢中の白水素女なり、天帝卿が孤愼を哀んで我をして炊烹せしむ、君婦を得ば我自ら當に去るべし、端娶りて後、天忽にして風雨翕然として去る端が此の素女を娶ると鴻齋云ふ誤る素も蛇も意義殆んど同じ、水銀の精を云ふ、君も端の如く南海にて此の如き天の素女に逢ふべしとなり、越王潭上見青牛『南越志』に綏安縣今日此の縣名なしの東に連山あり、昔越王建德、木を伐て舡を爲る、童男女三千を以て之を牽しむ、既にして人と舡と俱に潭に墮つ、時に聞く督進と唱へ喚ぶの聲あるを、往往に青牛あり馳回して舡と俱にす、蓋し神靈の至り、君も亦此の神靈を見んと云ふ、嶠臺は一名、定山、一名石室山、峭立高二百餘丈

之を嶠臺と云ふ、石室南北に二門あり、狀人工の若し、肇慶府、高要縣の北、此に啼猿を月が照す夜聞かん、石室は嶠臺の石室なり、此に古桂の香ふ秋を見ん、回望長安五千里南方より北方の長安を望む、他日長安の故鄕へ回るを云ふ、刺桐花下此の刺桐花は南海より福州に至る殊に多しと、此の花下の游びに狎れて長安に回るを忘るる莫れ、第二の故鄕と心得る樣になりては不可なり、

【評論】此の篇、故事を運用して筆路明白、毫も澁滯せず、海より山に及ぶの對句を以てす、兒童輩此の句法を學ぶべし、

九日登仙臺呈劉明府　崔曙

漢文皇帝有高臺　此日登臨曙色開　三晉雲山皆北向
二陵風雨自東來　關門令尹誰能識　河上仙翁去不回
且欲近尋彭澤宰　陶然一醉菊花盃

漢文皇帝高臺あり、此の日登臨曙色開く、三晉の雲山皆北向、二陵の風雨自から東來、關門の令尹誰か能く識らん、河上の仙翁去て回らず、且近ご

ろ彭澤の宰を尋ねて、陶然として一たび菊花の盃に醉んと欲す、

【略傳】崔曙は宋州の人、開元十六年の進士、

【句釋】九日は九月、仙臺は今の河南省河南府に在り、古の洛陽、漢の文帝之を建つ、劉は未詳、明府は知事なり、漢文皇帝有高臺文帝名は恒、高祖の中子なり、河上公、文帝に『老子』を授けて去り、所在を失す、文帝西山に於て臺を築き、之を望む、此日は九月九日、登臨曙色開曙色開くに依て眼界遮るもの無し、三晉晉の文公の後、十六世を韓魏趙と爲す、共に侯に封す、是を三晉と曰ふ、河南省の一部を占む、今陳州府に三晉岡あり雲山皆北向山勢は悉く北方に赴く、二陵は南陵と北陵となり、北陵は文王の風雨を避し處と、崤山に在り、東崤と西崤相去る三十五里、路極めて險と、南陵は夏后皐の墓、風雨自東來「東より來る」との古訓は今用ひず、自ら東來と訓むべし、關門令尹は周の令尹喜を云ふ、老子が函谷關を出る時、強て留めて長生の術を授かりし人、誰能識今人道德經をも知らず、又令尹喜をも知らざるなり、河上仙翁去不回文帝に老子を授けし仙翁は廬を河濱に結び居りしより河上公と云ふ、此の仙人も去て再び回らず、且欲近尋彭澤宰我は仙翁も令尹も慕ふ心はある、然れども今の世到底其の人には逢ふべからず、せめては彭澤令の陶淵明にでも逢うて此の濁世の氣を清淨ならしめんと思ふ、以て劉が彭澤令

たること知るべし、陶然一醉菊花盃今日の陶淵明は明府なるが故に君を訪問して九日古の淵明が人の送りし酒を飲んで東籬に菊を賞せし事に倣はんとなり、

【評論】此の篇、九日の意味と、仙臺の意味とを極めて能く發揮せるものなり、仙に就ては文帝と令尹と河上公を以てし、九日に就ては淵明を以てし、而して仙は吾及ばず、唯一の淵明は是れ期すべし、古人の此の詩を評して情意悲壯なりと云ふは良とに當れり、第二句、曙色開の三字なり以下悉く曙色に就ての景色、明の顧華玉は曰く句律典重にして情景分明、一意直下、固より法と爲すに足る、

叢臺　李遠

有客新從趙地回　自言曾上古叢臺
樹遶漳河地裏來　絃管變成山鳥哢　雲遮襄國天邊去
金輿玉輦無消息　風雨唯知長綠苔

客あり新たに趙地より回る、自ら言ふ曾て古叢臺に上ると、雲は襄國を遮きりて天邊に去り、樹は漳河を遶つて地裏より來る、絃管は變じて山鳥の

哢を成し、綺羅留めて野華の開くを作す、金輿玉輦消息無し、風雨唯知る綠苔長ずるを、

【略傳】李遠字は求古、太中に建州の刺史たり、後、丞相、令狐綯、杭州刺史たらしめんとす、宣宗曰く遠が詩に云ふ、長日唯消一局碁と、安んぞ能く人を理めんや、綯曰く此れ詩人興を託するのみ、未だ必ずしも然らず、宣宗遂に往かしむ、

【句釋】叢臺は趙の武靈王が建つ、今日の直隷省廣平府、邯鄲縣に在り、有客新從趙地回一客が趙地を漫游して回り李遠に其の事を談ず、自言曾上古叢臺此の古叢臺の上より望見せし狀を以下の句に言ふ、雲遮襄國春秋の時の邢、秦に襄國郡と爲す、今日の順德府邢臺縣なり、天邊去遙かに見る意味を云ふ、本集に去を盡に作る、盡を以て可とす、樹遶漳河漳河は源、山西の路安府長子縣より出て以て邢州任縣に至る、地裏來雲は天、樹は地、絃管昔時の景、變成山鳥哢今日の景、絃管は盛時、山鳥は衰時、綺羅は女兒の服美を云ふ、昔時の景、留作野花開今日見る所は花の綺羅有るも人の綺羅はあらず、金輿玉輦趙も後趙も北齊も都は皆此の地、其の王等の輿輦も今日は無消息一向に跡方も無し、風雨唯知長綠苔來往の人も無ければ風雨は綠苔をして得意に發生せしむ、

【評論】此の篇、客の言を借りて以て我が詩と爲す、巧妙比無し、巨景三四細景五六出すに雄闊の文字を以てす、毫も閒然する所なし、地裏を本集に掌上に作る、地裏は趙地と二字重なる、掌上は曾上と二字害あり、蓋し白璧の微瑕、言ふに足らず、方虛谷の評して近套と云ふは余信せず、

寒食

獨把一盃山館中　每驚時節恨飄蓬　侵堦草色連朝雨
滿地梨花昨夜風　蜀魄啼來春寂寞　楚魂吟後月朦朧
分明記得還家夢　徐孺宅前湖水東

來鵬

獨一盃を把る山館の中、時節に驚く每に飄蓬を恨む、侵堦の草色連朝の雨、滿地の梨花昨夜の風、蜀魄啼き來つて春寂寞、楚魂吟じて後月朦朧、分明に記得す家に還るの夢、徐孺が宅前湖水の東、

【略傳】來鵬は昭宗の時の人、詩思清麗なり、福建の韋尙書岫、其の才を愛し女を以て之に妻はさんと欲す、果さず、後蜀に游んで卒す、

【句釋】 寒食は前に辨ず、山館中山村の旅館に在て酒を飲む、時節の變化毎に恨飄蓬蓬の如く飄へる身の定めなきを嗟す、侵堦古訓多く「堦を侵す」と爲す、今用ひず、草色連朝雨山館中の景色、雨の恩澤は無名の草に及んで青青たり、滿地梨花昨夜風惡風は昨夜來つて庭中の梨花を散亂す、蜀魄は杜鵑なり、啼來春寂寞花は散じ草のみ茂し、寂寞たる所以、楚魂は一名亡魂鳥の名、楚の懷王、秦の昭王の爲め欺むかれて武關に赴き、秦の囚ふる所と爲て歸り得ず、秦に卒す、後、寒食の月夜、人、楚に於て吟聲を聞くと、此の鳥の吟聲を聞き出て見んと欲すれば、中庭唯月朦朧たるのみ、分明記得還家夢此の夜故鄉に還りし夢を見る、覺後、分明にして忘れず、徐穉は名は穉東漢の人、宅は洪州東湖の上に在り、來鵬の家も其の東湖の東に在るならん、徐穉字は孺子、豫章南昌の人、今日は江西省南昌府なり家貧常に自ら畊稼し、其の力にあらずんば食はず、恭儉義讓、人皆服す、陳蕃が郡の吏となる、人に接せず、獨徐の爲めに一榻を設く、終身仕へず、七十二を以て卒す、世に南州高士徐孺子と稱す、

【評論】 此の篇、客旅中の感を叙して凄意限り無し、作者來鵬は徐孺子を以て居る者の如し、其の人敬すべし、早春五門の詩より此に至る七首、一聯は輕婉、二聯は重大、三聯は輕く銖に至り、四聯は輕婉其の一聯と同じきなり、

四　虛

周弼曰く其の說五言に在り然も五言に比すれば終に是れ稍實に近し而かも全虛ならず、蓋し句長うして全く虛なる則は恐く柔弱に流れん、要ず須らく景物の中に於て情思通貫すべし、斯を得たりと爲す、

隋宮　李商隱

紫泉宮殿鎖煙霞　欲取蕪城作帝家　玉璽不緣歸日角
錦帆應是到天涯　于今腐草無螢火　終古垂楊有暮鴉
地下若逢陳後主　豈宜重問後庭華

紫泉の宮殿煙霞を鎖す、蕪城を取て帝家を作んと欲す、玉璽日角に歸するに緣らずんば、錦帆應に是れ天涯に到るなるべし、今に腐草螢火無く、終古垂楊暮鴉あり、地下若陳の後主に逢ば、豈宜しく重ねて後庭華を問ふべけんや、

【句釋】　隋宮は隋の煬帝の行宮を詠ず、隋は大業元年に長安より江都に至る南宮四十餘所を置く、紫泉宮殿鎖煙霞上林苑の水を紫泉と云ふ、丹水は南で、紫泉は北なり、隋の都城は卽ち關中今日の陝西西安府長安なり、然るに煬帝は其の都を棄て南游す、空しく煙霞を鎖す所以、欲取蕪城作帝家蕪城は名詞にあらず、荒蕪せる城の意味、乃ち吳王濞が都する所、煬帝は長安を捨て此の廣陵を以て江都と爲し、陝西より江都に至る一千三百有餘里の間に四十餘所、宮を建つ、今日の江蘇省揚州府江都縣是れなり、玉璽は天子の印、日角は唐の太宗の相貌を云ふ、額の肉中の骨、左方に角の如く有るを日角と云ふ、右方にあらば月角と云ふ、漢の光武は此の相を具し、太宗も亦此の相を具す、隋が德を失なはずして太宗が若し起らざる場合はとの意、錦帆應是到天涯煬帝は非常に水を好みし天子、自身は龍舟に御し、蕭妃は鳳舸に乘る、錦帆は一括して云ふ、唐の天子に天下が歸せざる時は煬帝が勢、但江都に至るのみならず、天涯萬里、水の便ある所、悉く向ふべしとなり、于今腐草無螢火『禮記』に螢火は腐草の化する所と、煬帝盛んなる日、景華宮に於て螢火數斛を求め、夜出て山に游び之を放つ、其の光、山谷に遍ねし、今日は腐草あるも、亦螢火無しと、終古は俗語の「イツマデモ」に當る、垂楊有暮鴉大業元年邪溝を開きて山陽より江に至る廣數十步、其の間千三百里、楊柳を植て隋堤と名く、其の

殘する楊には暮鴉のみ啼く、地下若逢陳後主陳の後主は贅澤を極めて隋の爲め亡ぼさる、然るに其の隋も亦陳の如く亡ぶに至る、豈宜重問後庭華陳の後主は玉樹後庭華の艶詩を作りて天下を亡ぼすに至る、此の二天子が地下にて面會せば同じく共に亡國の事を話すべきやと云ふ意なり、『洛陽伽藍記』に煬帝嘗て吳公臺下に行く、恍惚として陳の後主に遇ふ、帝、張麗華を請うて、玉樹後庭華を舞はしむ、後主の曰く每に張妃と臨春閣に憑り璧月詞を作りしことを憶ふ未だ終らざるに韓擒虎が萬騎を領して直ちに來て撞入するを見る、便ち今日に至て始めて謂ふ殿下の治、堯舜の上に在りと、今日還て此に逸游す曩の日何ぞ罪せらるるの深きや、帝之を叱す見えず、此に地下と言ふは蓋煬帝弑せられて吳公臺下に葬むればなり、天隱の說は必ずしも作者の意ならず、『伽藍記』の說は奇とすべし、

【評論】　此の篇、隋宮を咏じて極力模寫し煬帝の事を叙す、餘す所無からんと欲するが如し、剪綵に過ぐる感あるも、流麗の一宗を建立したる大筆力認めざるべからず、淸の紀曉嵐云ふ、中の四句步步逆挽、句句跳脫、結句佻甚だし、盛唐人決して此の如くならず、佻とは厚の反對、輕薄を言ふ、國家の亡滅を憐んで其の事を詠ず、決して輕薄なるべからず、其の證として盛唐諸公は重厚の意はあり、輕佻の意あらず、義山は一大宗と雖も、晚唐の氣運に際す、時代思潮

の罪此に至る、獨義山を責むる能はざるなり、

馬嵬

海外徒聞更九州　他生未ト此生休　空聞虎旅鳴宵柝
無復鷄人報曉籌　此日六軍同駐馬　當時七夕笑牽牛
如何四紀爲天子　不及盧家有莫愁

海外徒らに聞く更に九州ありと、他生は未だトせず此の生休す、空しく聞く虎旅の宵柝を鳴すことを、復鷄人の曉籌を報ずる無し、此の日六軍同じく馬を駐む、當時七夕牽牛を笑ふ、如何ぞ四紀天子と爲て、盧家莫愁あるに及かず、

【句釋】馬嵬は陝西省西安府興平縣の西、長安城を去る數里の地、玄宗一日、其の兄壽王の妃楊氏の美、絶世なるを見て、壽王に他の姫人を與へ、自ら楊氏を奪ふ、天寶四年に冊して貴妃と爲す、時の宰相李林甫、安祿山を重用す、祿山、貴妃が養兒と爲て宮廷に出入す、貴妃の父楊國忠も寵用せらる、祿山は天下の取るべきを知て遂に史思明と共に謀反す、玄宗貴妃と共に

蜀に出奔せんとし、馬嵬に至る、將士飢疲れて皆憤怒、其の罪一に楊氏一家に在りと爲し、楊國忠を誅す、貴妃尙ほ在り、將士之も殺さんと欲す、玄宗許さず、强て請ふに及んで遂に之を祠堂下に縊る、紫茵を以て尸を裹み道旁に瘞む、時に年三十八、天寶十五年六月なり、此より後五年、肅宗の上元二年に玄宗も死す、年七十八、海外徒聞更九州義山の自注に鄒衍が云ふ九州の外に更に九州ありと、他生未ト此生休玄宗が貴妃と死別して後、楊什伍なる者、海外の九州に貴妃は在りと奏するを聞て、今生中一度相見んかなと思ふ、而かも他生の事は未だトせず、會ふも會はざるも分らざるが、今生は亦如何とも爲す能はず故に此の生休すと云ふ、空聞虎旅鳴宵柝虎旅は宮門の衞士なり、夜警の爲め柝を鳴らして巡邏す、玄宗は蜀の行宮に在て獨空しく聞く、無復雞人報曉籌雞人とは絳幘を著けし役人、行宮は長安の宮廷と異なり、曉を報ずる役吏はあらず、此日六軍同駐馬玄宗が長安を出奔して蜀へ赴く中途、六軍皆進まず、何故に進まざるや、皆貴妃を玄宗が携帶すればなり、貴妃一人の爲め國が亂れ、蜀の如き險道へ來るは我等の悲しむ所、皆馬を駐め貴妃を殺さんと欲する所以、當時七夕笑牽牛曾て長生殿に在て七夕の夜貴妃と共に夜半に天を望み、牽牛織女が夫婦の事を我等二人の濃やかに及かずと言うて笑うた事なり、如何四紀爲天子一紀は十二年、四紀なれば四十八年、玄宗が天子の位を蹈む四十

八年間なり、不及盧家有莫愁洛陽の女兒名は莫愁、莫愁十三にして能く綺を織る、十四にして桑を南陌の頭に採る、十五にして嫁して盧家の婦と爲る、是れ梁の武帝の歌なり、賤なりと雖も、家庭を暖たかにして以て圓滿に一生を送りし莫愁に及ばずとなり、

【評論】　此の篇、此の題に在ては溫庭筠の七律と千古雙美を爲すもの義山の面目遺憾なく發揮せり、第二句七字の如きは前古人無く、後來者無し、九六七四の數字、虎、雞、馬、牛の動物徒聞空聞他生此生等の同字、他人をして此の如くならしめば、實に讀むに堪へず、然るに此の詩は何等の害なく之を讀むを得、詩にして神に入らずんば能はず、蓋し莫愁を以て天子に比す、不倫なりとの論あり、是れ或は然らば唐に在て隋を咏じ陳を賦す尙ほ恕す可し、唐に在て唐を賦す、擬人不倫の罪と云ふは必らずしも道學先生の論にはあらず、詩家も亦此の論を發すべきなり、嗚呼難い哉完作や、

籌筆驛

魚鳥猶疑畏簡書　風雲長爲護儲胥　徒令上將揮神筆
終見降王走傳車　管樂有才終不忝　關張無命欲何如

他年錦里經祠廟　梁甫吟成恨有餘

魚鳥も猶疑ふ簡書を畏るるかと、風雲長く爲に儲胥を護す、徒に上將をして神筆を揮はしめ、終に降王の傳車を走らしむるを見る、管樂才あり終に忝しめず、關張命無し何如せんと欲する、他年錦里祠廟を經、梁甫吟成つて恨餘あり、

【句釋】　籌筆驛は利州の綿谷縣、今日の四川省保寧府廣元縣の北、諸葛武侯嘗て軍を駐め、此に於て籌畫す、此の詩は蜀の亡びしを慨し、兼て武侯を稱す、魚鳥猶疑畏簡書軍中の法規を簡書と云ふ、武侯が出す軍中の法規は人畏るるのみならず、魚鳥も亦畏るるが如し、風雲長爲護儲胥儲は待なり、胥は須なり、軍營の桓を指す、蜀の桓と爲りし者は武侯なり、武侯の誠忠は風雲も知るが故に、千年後も風も破る能はず、雲も深く覆うて此の籌筆驛を護す、日本にて言へば櫻井驛の如きものなり、徒令上將揮神筆上將は武侯なり、武侯にあらざれば蜀に神筆を揮ふもの無し、一も二も皆武侯を勞せしなり、而かも徒令なり、終見降王走傳車降王は後主劉禪なり、傳車は驛の車、四馬高足なるを置傳とし、四馬の中足を馳傳と爲し、下足を上傳、急を要

するは一乘傳に乘る、後主は此の車に乘り、魏に降る、益す以て武侯の死を悲しむ、管樂管仲と樂毅は武侯平生自ら比する者、有才終不忝管樂の才を有する武侯なれば終生身を忝かしめず關張は關羽と張飛なり、無命欲何如此の二人、勇あり義あるも智に乏しきを以て部下の者に殺さる、亦天命なれば何如ともする無し、武侯と關張の三人を蜀の爲め惜む、他年は前年なり、錦里は城の名、錦宮城とも云ふ、四川の成都府、華陽縣の南、經祠廟武侯の祠廟を嘗て弔せしなり、梁甫吟成恨有餘、武侯は未だ隴畝を出ざるとき、臥龍岡に在て梁甫の吟を爲る、梁甫は山の名、今我は此に來りて詩を作り以て武侯の梁甫吟に比す、而して之を誦す、當時の事を思うて遺恨限り無きなり、

【評論】此の篇、隋宮の詩に比すれば遙かに勝れ、老杜の壘に近づかんと欲す、紀曉嵐曰く起の二句斗然として抬起す、三四の句斗然として抹倒す、然る後、五句を以て首聯を解し、六句を以て次聯を解す、此れ眞に殺活手に在るの本領、筆筆龍跳り虎臥すの勢あり、紀又曰く他年は當年の謂なり、言ふこころは他時其の祠廟を經て恨尙餘り有り、況や今日親しく行兵の地を見るをや、亦一倍を加ふるの法、通篇一鈍置の語無し、紀をして此の嘆を發せしむ、餘子安んぞ議する者あらん、有の二字、白璧の微瑕と爲すのみ、

聞歌

斂笑凝眸意欲歌　高雲不動碧嵯峨　銅臺罷望歸何處
玉輦忘還事幾多　青塚路邊南雁盡　細腰宮裏北人過
此聲腸斷非今日　香灺燈光奈爾何

笑を斂め眸を凝らして意歌はんと欲す、高雲動かず碧嵯峨、銅臺望を罷めて何れの處に歸る、玉輦還るを忘る事幾多ぞ、青塚路邊南雁盡き、細腰宮裏北人過ぐ、此の聲腸斷今日に非ず、香灺燈光爾を奈何せん、

【句釋】聞歌は自注に婦の夫を喪うて歌ふを聞く、因て此の歌を作る、斂笑は笑を發せず、凝眸は眸を定む、意欲歌夫の死に因て歌はんと欲するは、尋常の婦にあらず、素隱和尙は狂女ならんと、或は然らん、高雲不動碧嵯峨『列子』に秦青悲歌す、聲、林木に振ひ、響き行雲を遏むと、今此の女が夫を戀ふの情に感じて雲も動せず宛かも山の嵯峨たる如きなり、銅臺罷望歸何處魏の曹操死せんとする前に令を遺して曰く我に事へたる妓人等は銅雀臺に於て月の朔望に帷に向て妓樂を作すべし、時時又臺上に登て我が西陵の墓田を望めと、魏も遂に晉に亡ぼされ、

妓人も散亂し、銅雀臺も跡を滅し、何の處に歸するやを知らず、玉輦忘還事幾多周の穆王、黄金碧玉の輦に御し、西王母と瑤池の上に宴す、歌謳して還るを忘る、諸侯遂に叛く、青塚路邊漢の王昭君、匈奴に嫁して胡中に恨死す、胡人之を葬むる、胡地草白し、昭君の塚草獨青し、故に青塚と云ふ、石崇が昭君詞に曰く願くは飛鴻の翼を假て、之に乘じて以て遐征せん、飛鴻我を顧みずんば、佇立して以て屏營せんと、細腰宮裏北人過楚王細腰の婦人を好む、宮女皆腰の細くならんことを思うて食を禁じて痩せ、終に餓死したる者多し、北人は北方有二佳人一の詩意より美人の代名詞とす、過は今日已に無き意なり、雁は南歸して信なし、女は世を過ぎて宮室も亦無し、此聲腸斷非今日此の女が聲を高くして歌ひたる故に腸斷て死することもあらんかと疑ふ、其の例は前年にもあり、今日のみにあらず、唐の武宗疾ひ篤し、孟才人歌を以て寵を得、請て一曲河漏子を歌はしむ、氣亟て立ころに死す、天子醫をして之を診せしむ、脈尚溫にして腸已に斷つ、香炤炤は盡るなり、燭の「モエノコリ」燈光奈爾何燈火滅せんとする時は光を發す、今や此の女も自分の命の斷んとするを知らずして、猶此の哀歌を爲す、爾を奈何せんとするや、

【評論】此の篇、此の歌女に托して、曹操と穆王と昭君と楚王とを一括して憫笑を爲す、史に

傳ふ商隱の一詩を作る、多く書冊を檢閲し、左右に鱗次す、故實多く材料に飽く、人之を病と、蓋し其の短なる所、亦其の長なる所、以て義山の詩を談ずべし、

茂陵

漢家天馬出二蒲梢一　苜蓿榴華遍二近郊一　内苑只知銜二鳳觜一
屬車無復挿二雞翹一　玉桃偸得憐二方朔一　金屋粧成貯二阿嬌一
誰料蘇卿老歸國　茂陵松柏雨蕭蕭

漢家の天馬蒲梢より出づ、苜蓿榴華近郊に遍し、内苑只知る鳳觜を銜むことを、屬車復雞翹を挿む無し、玉桃偸み得て方朔を憐み、金屋粧成つて阿嬌を貯ふ、誰か料らん蘇卿が老て國に歸り、茂陵の松柏雨蕭蕭たらんとは、

【句釋】茂陵は漢の武帝を葬むる所、漢は縣右扶風郡、今日の陝西省西安府興平縣東北、漢家天馬出蒲梢漢の武帝が大宛を伐つは、其の意國にあらずして但其の馬に在り、初め丁寧に之を請ふも大宛聽さず、是に於て李廣利をして之を破り、其の馬を取て歸る、張騫傳に帝初め烏孫の馬を得て天馬と名け、大宛の馬を得るに及んで更めて烏孫を名けて西極馬と曰ふ、大宛の馬

を天馬と曰ふ、蒲梢は大宛の地名ならんか、未詳、古注に蒲梢は龍文魚目汗血之馬と、西極馬と天馬と汗血馬と三種あるものの如し、苜蓿は草の名、大宛の馬の嗜む所と、一に光風と名く、罽賓國に生ず、中土の種にあらずして西域の種なり、榴花は石榴、塗林より出づ、遍近郊長安近邊の野外に遍く滿つ、武帝の遠略無益の事を諷す、内苑只知銜鳳觜鳳觜とは鳳凰の觜を養て作りし膠なり、此の膠を付ければ斷絃を連ぬることを得、武帝は獵を好んで常に内苑に狩を爲し弓の絃が斷れば、鳳觜の膠を銜み暖ためて絃を續ぐことのみ好まる、今之を謗るなり、屬車無復插雞翹天子の出る鸞旗前に在り、屬車後に在り、此の鸞旗を雞翹とも云ふ、武帝微行卽ち祕密の游を好む、故に雞翹を屬車に插むこと無し、正車には插み、屬車に插まずと見れば可し、玉桃偷得憐方朔『漢武故事』に西王母降る桃七枚を出して曰く此の桃三千年に一たび華きて三千年に子を結ぶ、方朔を指して曰く此の兒已に三たび吾桃を竊めり、此の句は蓋し武帝の仙を好むを譏る、金屋粧成貯阿嬌『漢武故事』に帝の年五歲、長公主抱て問て曰く兒婦を得んと欲するや否や、曰く得んことを欲す、女の阿嬌を指して曰く阿嬌好か否や、帝曰く若し阿嬌を得ば、當に金屋を作りて之を貯ふべし、此の句は帝の好色を譏る、誰料蘇卿老歸國蘇武字は子卿、武帝の大漢元年匈奴に使して昭帝の始元六年に歸る、此の間十九年を經、乃ち大宰を

奉じて武帝の園廟に謁す、武帝仙を好んで而かも死し、蘇武は生を欲せずして而かも生く、誰か料らん所以、茂陵松柏雨蕭蕭武帝の少子昭帝の世に成りて蘇武は歸り、卻て自分を匈奴へ遣はせし武帝は已に歿して其の墓門は松柏已に森森雨も亦蕭蕭、金屋と茂陵と玉桃と松柏と其の變化を異にしたるを笑ふなり、

【評論】此の篇、武帝を弔して全力を傾倒せるもの、書卷の氣滿紙、義山の厭ふべき所、此に在り、隋宮より此に至る五首多く故事を用ふるの格、又多少は譏諷を含む意もあらん、

早秋京口旅泊

李嘉祐

移家避寇逐行舟　厭見南徐江水流　吳地征徭非舊日
秣陵凋弊不宜秋　千家閉戸無砧杵　七夕何人望斗牛

唯有同時驄馬客　偏題尺牘問窮愁

家を移し寇を避けて行舟を逐ふ、厭ひ見る南徐江水の流るるを、吳地の征徭舊日にあらず、秣陵の凋弊秋に宜しからず、千家戸を閉て砧杵無く、七夕何人か斗牛を望ん、唯同時驄馬の客のみ有て、偏に尺牘に題して窮愁を

問ふ、

【略傳】李嘉祐字は從一、袁州の人、初め江陰の令と爲り、上元中台州の刺史、大曆中袁州の刺史、中臺の郎と爲る、其の詩を臺閣集と曰ふ、

【句釋】早秋京口旅泊江蘇省鎭江府丹徒縣を京口と稱す、移家避寇逐行舟嘉祐が潤州に在りし時、揚州の刺史、劉展反して兵を起し、潤州を陷る、嘉祐此の亂を避けんと欲して京口に宿泊中、蔣侍御が其の安否を問ふ、此の詩之に答ふるなり、厭見日日舟中に在て水を見るに厭たるなり、南徐江水流晉の元帝の時、京口に南徐州を置く、隋の文帝の時に潤州を置く、吳地京口は古吳の都なり、卽ち潤州、征徭は征稅と徭役となり、何事を爲すにも稅、而して事あらば役を命ぜらる、非舊日舊日は是にして今日は非なり、輕きもの重くなり、小なるもの大となる、秣陵は金陵なり、吳地なり、凋弊不宜秋古の金陵の如く繁昌ならず萬事凋落疲弊して秋殊に其の甚だしきを覺ゆ、千家閉戶無砧杵人家に砧聲聞えざるは、民營業に安んぜず、其の亂を避て他方に逃るるなり、七夕七月七日、何人望斗牛此の夕は牽牛織女の二星を祭る時に會ふ、而かも亂後曾て此の事無し、斗を女に作るを可とす、祇有同時驄馬客蔣侍御を指して驄馬客と云ふ、桓典御史となり驄馬に騎る、以て侍御に譬ふ、偏題尺牘廣武君曰く咫尺の書を奉ず、注に曰く

簡牘の長さ咫尺なる者、問窮愁は蔣侍御が李嘉祐の爲め無事なるや否やを問ひ來る、京口旅泊は客中ゆゑ、特に其の狀を說て窮愁と云ふ、

【評論】此の篇、京口が戰後の衰狀を叙し而して蔣侍御の溫情を喜び、以て我が感慨を寓す、晩唐の詩として薄弱に墮せざるものなり、

晩次鄂州　盧綸

雲開遠見漢陽城　猶是孤帆一日程　估客晝眠知浪靜
舟人夜語覺潮生　三湘愁鬢逢秋色　萬里歸心對月明
舊業已隨征戰盡　更堪江上鼓鼙聲

雲開いて遠く見る漢陽城、猶ほ是れ孤帆一日の程、估客晝眠つて浪の靜なるを知り、舟人夜語つて潮の生ずるを覺ゆ、三湘の愁鬢秋色に逢ひ、萬里の歸心月明に對す、舊業は已に征戰に隨つて盡く、更に江上鼓鼙の聲に堪へんや、

【句釋】　次は宿なり、鄂州は今日湖北の武昌府、卽ち隋唐の鄂なり、雲開遠見漢陽城漢陽府も同じく湖北省、唐代鄂州江夏郡に屬す、鄂州と漢陽との間は四五十里を隔つ、猶是孤帆一日程漢陽の邊は方角は分明なるも而かも一日の程はある、水行なれば孤帆と云ふ、估客は商人なり、論價を估と云ふ、晝眠知浪靜浪が高ければ安眠する能はず、商人共船中無聊にて皆眠るは畢竟浪平らかなるに由る、舟人夜語覺潮生夜に入て篙夫共が高聲に談話するは定んで潮波の生ずるが爲ならん、三湘は湘潭と湘鄕と湘源と也、愁鬢逢秋色鬢毛の白くなりたるを秋色に逢ふと云ふ、愁は白髮を生ずる本と爲す、萬里は遠方を指す、必ず里數ならず、歸心對月明明月に對する故に愁鬢を見る、愁鬢を知るに依て明月に對するを恥づ、舊業は舊里の別業卽ち別莊なり。已隨征戰盡安祿山の亂後と肅宗が兩度の征戰に逢うて別莊なぞ燒棄せらる、更は「其の上」の意味、堪江上鼓聲永王璘が兵、漢陽邊まで攻略したるを旅中に聞く、鼓聲卽ち戰鼓の聲を聞くに堪へんや、

【評論】　此の篇、前半四句、鄂州舟中所見の景、五六は己に就ての情、七八は天下に就ての情を叙す、杜甫の風骨を帶び甚だ名篇とす、

赴武陵寒食次松滋渡　　竇常

杏華榆莢曉風前　雲際離離上峽船　江轉數程淹驛騎
楚曾三戶少人煙　看春又過淸明節　算老重經癸巳年
幸得杜山當郡舍　在朝長詠卜居篇

杏華榆莢曉風の前、雲際離離たり峽に上る船、江轉じて數程驛騎を淹め、楚曾て三戶人煙少なり、春を看て又過ぐ淸明の節、老を算へて重ねて經癸巳の年、幸に杜山郡舍に當るを得たり、朝に在て長詠せん卜居の篇、

【句釋】　武陵寒食共に前に辨せり、松滋渡は江陵府、松滋縣なり、武陵卽ち湖南へ赴むく途中、寒食に逢うて湖北の松滋渡に宿泊せしなり、杏華は「アンズ」の華、榆莢は榆は「ニレ」莢は草の實なり、曉風前杏は開き榆は生ずる時節、曉風の前に松滋渡に至る、雲際は高處を云ふ、離離數船が連續して上峽船峽は漸漸に地理高くなる、上る所以、低處より高處へ遡るなり、江轉數程江路宛轉すると數里、淹驛騎郵便配達夫を淹滯させる、路の險且長きを云ふ、或人「驛路の騎馬が往來するも淹つて見えざるなり」と云ふ非常に誤まる、淹と覆ふとは異なる、楚曾三戶『史記』に楚の南公曰く楚三戶なりと雖も、秦を亡す者は必ず楚ならんと、果して楚の項羽之を

亡ぼせり、今唯其の文字を借り松滋渡の寒食寂莫たるを形容するのみ、亡ぼす亡ぼさざるには關係無し、少人煙人多く住せざるなり、看春又過清明節寒食の前三日を清明節と云ふ、人家皆其の先墓に香火を送り祖靈を祀る、一種の哀愁を感ずるの時なり、算老重經癸巳年憲宗の元和八年卽ち癸巳なり、寶常は玄宗の天寶十二年に生れたり、是の年を癸巳とす、一生の中に二度癸巳を經、重經と云ふ所以、年六十一なること知るべし、幸得柱山當郡舍水部員外郎の官より轉じて今朗州の刺史となる、其の朗州の郡舍の前には柱山なる山あり、以て吟看するに足る、在朝は郡舍に在て政治を執り乍らの意味、長詠卜居篇屈原が昔し卜居詞を作る、余も亦之に倣うて何處へ行くとも此の卜居篇を作り高尙の志を變せずとなり、中央の都に在て政務を執るをのみ在朝と見る者は狹し、

【評論】此の篇、前半景後半情、四句に楚を出し、結句に楚辭の語を用ふ、以て脈路の正しきを見る、

鄂州寓嚴澗宅

元稹

鳳有高梧鶴有松　偶來江外寄行蹤　華枝滿院空啼鳥

塵榻無人憶臥龍　心想夜閒唯足夢　眼看春盡不相逢
何時最是思君處　月入斜窗曉寺鐘

鳳に高梧あり鶴に松あり、偶ま江外に來つて行蹤を寄す、華枝滿院空しく啼鳥、塵榻人の臥龍を憶ふ無し、心に夜の閒なるを想うて唯夢みるに足れり、眼に春の盡るを看て相逢はず、何れの時か最も是れ君を思ふ處、月は斜窗に入る曉寺の鐘、

【句釋】鄂州は前に辨ず、元稹は此の鄂州節度使の官となり、來て嚴澗が宅に寓居する、有と用ひて在と用ひず、梧は鳳の所有、松は鶴の所有、鳳凰が黃帝の東園に止まり、梧桐の上に集まり竹實を食ふこと古來の傳說なり、鶴と松、仙島の傳說、偶來江外楊子江外卽ち武昌、武昌は卽ち鄂州、寄行蹤暫らく嚴が宅に我が行蹤を寄托する、華枝何の華と云ふにあらず單に泛稱す、滿院空啼鳥古今來の注多く「啼鳥空し」と訓ましむ、今謂く然らず「空しく啼鳥」なり、啼鳥も空しと謂ふにはあらず、語る友無く、唯空しく啼鳥のみあるを謂ふ、華枝は滿院なるが啼鳥は空しと見るは意義通せず、塵榻は嚴澗が生前用ひし榻も今は塵に委ねてある、無人憶臥龍蜀

漢の諸葛武侯を以て嚴澗に比するなり、何人も嚴澗の偉人たりしを憶ひ出る者今日は無し、心想夜開唯足夢我獨嚴澗の偉なりし事を記す、夜開なれば雜想は生せず、定んで嚴澗を見る夢あるならん、眼看春盡不相逢春此の如く好し、而かも嚴澗には逢ふを得ず、何時最是思君處平常思はざるにはあらず、而かも最も強く思ふ處は月入斜窗曉寺鐘月落ち西窗夢醒む五更の頃、山寺の鐘聲聞ゆ、是れ最も我が君を思ふ情を刺激する時なり、

【評論】　此の篇、鳳と鶴とを以て暗に自比し、臥龍を以て嚴の人物を比す、野口寧齋は「孔明の事前後に關係無きなり」と『蜀志』を讀まざるか、伏龍鳳雛の語は有名なる者ならずや、龐士元は鳳雛ならずや、古人は全く關係なき一句孤立の語は作らざるなり、此の篇は景情合致して分離すべからざるものとす、

九日齊山登高　杜牧

江涵秋影雁初飛　與客携壺上翠微　塵世難逢開口笑
菊花須插滿頭歸　但將酩酊酬佳節　不用登臨怨落暉
古往今來只如此　牛山何必獨沾衣

江は秋影を涵して雁初めて飛ぶ、客と壺を携へて翠微に上る、塵世逢ひ難し口を開いて笑ふに、菊花須らく滿頭に挿して歸るべし、但酩酊を將て佳節に酬いん、用ひず登臨して落暉を怨むことを、古往今來只此の如し、牛山何ぞ必ず獨衣を沾さん、

【句釋】　齊山は池州の貴池縣南五里に在り、杜牧か此の池州太守たりし時の詩、登高は前に辨ぜり、江涵秋影雁初飛秋の氣を知るは江水と雁聲とを以て最とす、黃州の南、大江に至る一百步、攜壺は菊花酒を携帶して山に登る、塵世は本集に人世に作る、難逢開口笑『莊子』に盜跖曰く上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十、病瘦死喪憂患を除き、其の中、口を開いて笑ふ者一月の中、四五日に過ぎざるのみ、菊花須插滿頭歸『續神仙傳』に許碏、花を滿頭に挿み、花を把て舞を作し、酒家の樓に上りて醉歌すと、今宜しく此の許碏を學ぶべしとなり、但將酩酊、酬醉、沈醉、醉極を酩酊と云ふ、十二分に醉ふなり、酬佳節此の九日を懽迎する、不用登臨怨落暉晉の陸機は「大耋落暉を嗟す」と云ふ、今謂ふ落暉を嗟するにも怨むにも及ばず、但沈醉せよと放言す、古往今來只如此此の世のあらん限り、人事は大抵同じ、喜笑憂患を宛轉するに過ぎ

ず、牛山何必獨沾衣『元和郡縣志』に青州臨淄縣の牛山、縣南二十五里に在り、齊の景公、牛山の上に游び、北の方、齊を望んで曰く美なる哉國乎、古より死無からしむれば、則ち寡人將に此を去て何くに之んやと。俯して泣き襟を沾す、事『韓詩外傳』に見ゆ、今の詩意、齊の景公のみならず、天下皆然らざるは無しとなり、

【評論】此の篇、牧之の面目彰彰たり、官吏と爲て猶ほ此の放言す、牧之の牧之たる所以、齊山に登るを以て景公の事を叙す、筆力扛鼎と謂つ可し、

贈王尊師

先生自說瀛洲路　多在青松白石間　海岸夜中常見日
仙宮深處却無山　犬隨鶴去游諸洞　龍作人來問大還

姚合

今日偶聞塵外事　朝簪未擲復何顏

先生自ら說く瀛洲の路、多くは青松白石の間に在りと、海岸夜中に常に日を見る、仙宮深き處却て山なし、犬は鶴に隨ひ去て諸洞に游び、龍は人と作り來て大還を問ふ、今日偶ま聞く塵外の事、朝簪未だ擲たず復何の顏

ぞ、

【句釋】王は姓、尊師は敬稱、卽ち道士なり、先生王を云ふ、自說瀛州路仙を學ぶ者は、佛の淨土を說く如く必ず瀛州と方丈と蓬萊との三山を說かざるべからず、其の仙人の住する瀛州の路は、多在青松白石間先生が青松白石の間に在て說く、又仙の瀛州の路、青松白石の間に在ると解しても通ずるなり、海岸夜中常見日王が談話此より進む、瀛州は海中に在れば、其の海岸人世未だ曉けざるに日は已に上る、仙宮深處却無山仙島は廣大なる山なるも正しく仙人の住樓は山の看を作さず、平地の看を作す、五步に一樓、十步に一閣、佛敎の極樂淨土の七重羅網、五重樓閣と同じく莊嚴美麗なり、犬隨鶴去游諸洞仙犬や仙鶴は爭ふ所無し、同游同娛す、龍作人來問大還海底の龍王は人身と化し來つて大還丹卽ち仙藥を煉る法を問ふ、佛敎に龍王人と作り來りて佛陀の妙法を說くを聞くと同一なり、今日偶聞塵外事塵中は人間、塵外は仙宮なり、朝簪は官吏、簪は「カンザシ」高官も低官も此の時代簪を以て位階の記章とす、未擲復何顏仙道の好きを聞く每に、其の道を慕ふの念は生ずるも、人間の慾念を離れて小官を辭する勇氣は尙未だ生ぜず、尊師に對するの面目無しと云ふ意なり、

【評論】此の篇、前六句悉く仙人の事を叙し、七八の二句我が情に歸宿す、起句の借韵に就て

云云する者、強て論を設くるのみ、古人止むを得ずして用ふ、必ずしも巧を求めん爲にはあらず、

贈王山人　許渾

貰酒攜琴訪我頻　始知城市有閒人　君臣藥在寧憂病
子母錢成豈患貧　年長每勞推甲子　夜寒初共守庚申

近來聞說燒丹處　玉洞桃華萬樹春

酒を貰り琴を攜へて我を訪ふこと頻なり、始めて知る城市に閒人あることを、君臣藥在り寧ぞ病を憂へんや、子母錢成つて豈貧を患へんや、年長じて常に甲子を推すに勞す、夜寒くして初めて共に庚申を守る、近來聞くならく丹を燒く處、玉洞の桃華萬樹の春、

【句釋】王山人大和六年に長安に在て作る、山人來て許渾が家を訪ふ、許未だ山人の家に到らず、其の心結句に看えたり、貰酒貰は音「シヤ」訓は「オギノル」「カル」「オモンパカル」賒なり貸なり恕なり、乃ち酒を王が許に吳れる事なり、攜琴訪我頻酒と琴とを持して許を訪問す、始知

は許が知る、城市有閒人閒人は尋常輕蔑の意味に用ふる者多けれど大なる誤謬なり、餘裕ある人を稱する語、君臣藥は藥の名詞とす、君臣佐使の法あり、山人此の藥法に精通するを稱す、寧憂病病は憂ふるに足らず、山人に治を請へば直ちに病を愈すことを得、子母錢は錢の名詞とす、『搜神記』に靑蚨は蟬に似て稍大、子を草間に生む、蠶の如し、其の子を取れば母飛來る、母の血を以て錢八十一文に塗り、子の血を以て錢八十一文に塗る、物を市ふ每に先母錢を用ひ或は子錢を用ふれば、皆復飛來る、此の如くして循還して止む無し、是を子母錢と云ふ、山人は此の錢を用ふるならん、豈患貧貧なるを患ふる理は無きなり、年長每勞推甲子此の句は許が自身の事を云ふ、人が許に向つて君は何歲に爲りしやと問ふ場合、其の返答に辛勞するの意、甲子は「トシ」なり、夜寒初共守庚申此の庚申の事は道家より出し法、佛敎徒は道家より此の法を竊みしなり、『酉陽雜俎』に曰く凡そ庚申の日、三尸人の過ちを言ふ、七たび庚申を守れば三尸滅す、三たび庚申を守れば三尸伏すとあり、唐以前より起りしものの如し、近來聞說燒丹處聞說の說の字は語助、聞の字を助けるのみ、「ナラク」と訓す、卽ち聞くなり、說又は道又は言を以てす、近來丹を燒き居ると云ふことを聞くなり、玉洞は仙人の住する洞、王山人の居を云ふ、桃華萬樹春明の季昌曰く許棲筠、下第して劍閣を出るとき馬より墮つ、太乙の元君素が室に至

る、玉洞に碧桃萬樹あり二女に命じて飲ましむるに玉髓を以てすと、此の事を借りて以て王山人を云ふ、

【評論】此の篇、甲子對を以て尤も佳なるものの一なり、許渾より以前、溫庭筠が詩に風捲蓬根一屯二戊己一、月移二松影一守二庚申一とあり、此の詩は諸道友と夜坐邊防を聞て寧からず因て同志に示す七律の前聯なり、明の謝四溟は半嶺餐霞延二甲子一孤燈照夜守二庚申一は此の詩の韵に次したるもの、其の巧拙の判斷は人自から知るべきなり、

湘中送二友人一

李頻

中流欲レ暮見二湘煙一　岸葦無レ窮接二楚田一　去雁遠衝雲夢雪
離人獨上洞庭船　風波盡日依レ山轉　星漢通宵向レ水連
零落梅華過二殘臘一　故園歸去醉二新年一

中流暮んと欲して湘煙を見る、岸葦窮まり無くして楚田に接す、去雁遠く衝く雲夢の雪、離人獨上る洞庭の船、風波盡日山に依て轉じ、星漢通宵水に向つて連る、零落梅花殘臘を過ぎなば、故園歸り去て新年に醉ん。

【略傳】李頻字は德新、睦州壽昌の人、太中八年進士、祕書郎に調せらる、南陵主簿、武功令、侍御史、都官員外郎、工部郎中、建州刺史等の官を經て卒す、

【句釋】湘中は三湘、中流欲暮見湘煙友人を送りて湘中にて直看する景を言ふ、葦は「アシ」接楚田湘は吳なり、其の吳中の葦が盛んに生じて楚國の田に接近する、去雁遠衝雲夢雪湘中より望む、雲夢澤の邊を歸雁が高飛する、離人は友人、獨上洞庭船歸處は分明ならざるが、洞庭湖より船に乘るなり、風波盡日依山轉正に是れ三峽の實況、水路を云ふ、星漢通宵向水連天河は通宵水に連なる如く、水天一色、分ち難きを言ふ、零落梅花江南地暖かなるを以て梅華は已に臘月に落つ、過殘臘臘は臘と同じ、十二月なり、故園歸去醉新年故園に達せらるる頃は早新年ならん、

【評論】此の篇、徹頭徹尾、友人を送るの情を叙し、自身の事は聊かも言はず、七句に殘臘の文字あり、此の字を以て自身が此の湘中に在て殘臘を過すことを知るべし、李は姚合が女壻、岳父と共に、詩苑の麗才と爲す、

元達上人種藥

皮日休

雨滌煙鋤偃二破籬一　紺芽紅甲兩三畦　藥名却笑桐君少

年紀翻嫌竹祖低　白石淨敲蒸朮火　清泉閒洗種華泥
恠來昨日休持鉢　一尺雕胡似掌齊

雨に滌ぎ煙に鋤いて破籬に偃す、紺芽紅甲兩三畦、藥名却て笑ふ桐君の少なきを、年紀翻つて嫌ふ竹祖の低きを、白石淨く敲く朮を蒸すの火、清泉閒に洗ふ花を種うるの泥、恠み來る昨日持鉢を休めしことを、一尺の雕胡掌の齊しきに似たり、

【略傳】皮日休字は襲美一の字は逸少、襄陽の人、咸通八年の進士、一に云ふ咸通中、太常博士と爲り亂に逢ひ吳中に歸る、黃巢、江浙に寇す、劫すに從軍を以てし、京に至り僞翰林學士と爲り讖を作ると、陸龜蒙と幷稱して皮陸と云ふ、

【句釋】元達上人は僧なること分明、傳は未詳、種藥漢士は僧と道士と共に藥を製するを以て副業とす、雨滌煙鋤偃破籬雨にも煙にも藥苗の畝を畊作する、偃は伏なり、藥畝に起臥する意味、紺芽深青色を紺と云ふ、紅甲甲は芽が甲冑を服たる如く實をかつぎて生ずる狀、紺と紅とは共に草の色、芽と甲とは草の態、兩三畦畦は「ウネ」田五十畝なり、藥名却笑桐君少天隱曰く

桐君山は嚴州に在り、人あり藥を採り、廬を桐木の下に結んで姓と爲す、故に山も名を得たりと、此の桐君より上人の藥艸は多く種う、年紀翻嫌竹祖低『竹譜』に云ふ竹祖は最初種る所の竹、『漢武帝內傳』に封君達は隴西甘肅省の人、青牛師と號す、水銀を服す、百餘年にして鄉里に還る、二十の人の如し、常に青牛に乘る、路上死者あれば便ち竹管の藥を以て之を救ふ、或は針を下せば手に應じて皆活く、人呼んで竹祖と爲す、此の竹祖より上人の方が長壽なりとの意、白石淨敲蒸朮火朮は藥名、蒼朮と白朮の二種あり、白石を敲きて火を取り之を蒸して製す、清泉閒洗種花泥花を清泉にて洗ひ其の泥の汚れたるを去る、恠來來は助字、恠むの字を助く、昨日休持鉢村里に出て鉢に食を乞ふが僧の本分、然るに上人は昨日村里に食を乞はず、一尺雕胡似掌齊咋日行乞せざる理由が判然したり、其れは他にあらず、『本艸』に菰米臺中黑き者之を菱烏と謂ふ、實を結ぶときは乃ち雕胡黑米なり、此の雕胡が掌ら大に成りて最早や食ふに足る、故に上人は昨日出ざることを知り得、

【評論】此の篇、僧の僧たる所以を全く言はざるは皮が佛學無き所以、僅かに持鉢の二字のみにて僧たるを表し、餘の文字悉く藥に關す、佛典にも藥艸に關すること多し、桐君や竹祖の故事以外に用ふるものあり、僧に贈るには僧に關する事の切なるを要す、箇は獨皮に於て言ふな

らず、天下詩人に望む所なり、早秋京口より此に至る九首、四虛の中に前聯多く虛實相兼る法なり、例せば去雁遠衝、離人獨上の如き語は實にして意は虛なり、餘皆此の類、

前虛後實

周弼曰く其の說五言に在り、但五言は人多く意を頸聯領聯の分に留めて或は之を守ること大に過ぐ、七言に至りては則ち自ら其の說を廢す、音節諧婉なるもの甚だ寡なし、故に此を標し以て識者を待つ、

黃鶴樓　崔顥

昔人已乘白雲去　此地空餘黃鶴樓　黃鶴一去不復返
白雲千載空悠悠　晴川歷歷漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲
日暮鄉關何處是　煙波江上使人愁

昔人已に白雲に乘じて去る、此地空しく餘す黃鶴樓、黃鶴一たび去つて復返らず、白雲千載空しく悠悠、晴川歷歷たり漢陽の樹、芳草萋萋たり鸚鵡洲、日暮鄉關何れの處か是なる、煙波江上人をして愁へしむ、

【略傳】崔顥は汴州の人、開元の進士、天寶中に司勳員外郎を以て終る、

【句釋】黄鶴樓の起源に就て異説多し、今一説の正と思ふものを取る、江夏郡の辛氏、酒を沽るを業と爲す、一先生魁偉なるあり、襤褸にして座に入り、辛に謂て曰く好酒の吾に飲すべき有りや否や、辛飲ますに巨盃を以てす、明日復來る、辛索むるを待ずして之を與ふ、此の如くすること半歳、辛倦意無し、一日辛に謂て曰く多く酒債を負ふ、錢の汝に酬ゆる無し、遂に小籃の橘皮を取て、壁に於て鶴を畫て曰く、客來つて酒を飲むとき但手を拍て之を歌はしめば、其の鶴必ず舞ん、此を將て酒債を酬んと、後、客至るとき其の言の如くす、鶴果して蹁躚として舞ふ、回旋宛轉として良とに音律に中る、橘皮に畫く所なるが爲め色黄なり、人之を黄鶴と謂ふ、之を異とせざるは莫し、觀んと欲する者千金を費す、十年の間、家巨萬を置く、一日先生至て曰く向に酒を飲しむ、答ふる所薄きや否や、辛謝して曰く先生の畫鶴に賴て今は百倍に至る、如し少らく留まらば當に家を擧て供備洒掃すべし、先生笑て曰く吾豈此を爲さん、笛を取り吹こと數弄、須臾にして白雲空より下り、畫く所の鶴、先生の前に飛ぶ、遂に鶴に跨がつて雲に乘じて去る、辛氏後に飛昇の處に樓を建て黄鶴樓と名く、湖北省武昌府黄鵠磯上に在り、昔人は鶴を畫きたる仙人、乘白雲を一本乘黄鶴に作る、此の方を可とす、此地は武昌の黄鵠磯を云ふ、空餘仙人は已に去て久し、空しく餘す所は黄鶴樓のみ、黄鶴一去不復返樓は有り鶴は無

し、白雲は有り昔人は無し、一去返らざるを惜み、千載悠悠たるを慨す、此の二句十四字全く古詩の體、不復返と空悠悠と仄聲と平聲とを以て意を對し、語を對せず、晴川は漢江の流を云ふ、歷歷は水行の形容詞、又文明なるものの形容詞、漢陽樹漢陽府は武昌府に接近して一江を隔つるのみ、故に此の府城の樹木が歷歷明明見るなり、芳草は春艸なり、萋萋は凄凄に作る本あり、一色普遍なるを云ふ、鸚鵡洲は武昌に屬す、江夏の西、大江中に在り、後漢末に黄祖が禰衡を殺しし處、衡嘗て『鸚鵡賦』を作る、殺されたる一因たり、故に此の名あり、日暮鄉關何處是漢陽も鸚鵡洲も明らかに認むるを得、而して鄉關は認め得ず、何れの方面ぞや、煙波江上使人愁人は崔顥自身を云ふ、愁は鄉關に對するのみならず總じて全體を云ふ、

【評論】此の篇、千古の絶調として、前に古人無く、後に來者無し、詩聖を以て千古の大宗たる李翰林ですら筆を投じて及ぶべからざるを嘆ず、況んや李以下の詩人に於てをや、李之に擬して金陵鳳凰臺の詩を作る、宋の方虛谷は未レ易二甲乙一と評したるが、篇法の正しきは李を以て甲となす、氣力の雄偉なるは崔を以て甲と爲すべし、起句に乘白雲とあるを紀曉嵐の評に「白雲と爲す則は三句の黄鶴根無し」又曰く偶爾に之を得て自から絶調を成す、然れども一無かる可らず、二有る可らず、再一臨摹すれば便ち窠臼と成る、紀評頗る當るを覺ゆ、李白が「鸚鵡

洲」の詩其の窠臼と成ること見るべし、曰く鸚鵡東過す吳江の水、江上洲は傳ふ鸚鵡の名、鸚鵡西のかた隴山に飛で去る、芳洲の樹何ぞ青青たる、煙開いて蘭葉香風暖かに、岸桃花を夾んで錦浪生ず、遷客此の時徒らに目を極むれば、長洲の孤月誰に向つて明かなる、李の大才を以てしても到底、崔が上に出る能はず、崔が此の詩は天與にて人力にはあらずと謂ふべし、

自蘇臺至望亭驛人家盡空　李嘉祐

南浦菰蒲覆白蘋　東吳黎庶逐黃巾　野棠自發空流水
江燕初歸不見人　遠樹依依如送客　平田渺渺獨傷春
那堪回首長洲苑　烽火年年報虜塵

南浦の菰蒲白蘋を覆ふ、東吳の黎庶黃巾を逐ふ、野棠自ら發いて空しく水に流れ、江燕初めて歸つて人を見ず、遠樹依依として客を送るが如く、平田渺渺として獨春を傷む、那ぞ首を長洲苑に回らすに堪へん、烽火年年虜塵を報ず、

【句釋】蘇臺は蘇州の姑蘇臺、肅宗の時、劉展、張景の二人亂を爲し、大に浙西を攪す、此の

詩、其の時作る、人家盡空一驛燒盡して、人全く住せず、南浦は吳江の南浦、菰蒲は水草、覆白蘋白蘋の佳なるもの菰蒲の惡草に隱覆せらる、東吳は蘇州なり、黎庶は民衆なり、逐黃巾東吳の人が協力して賊徒を逐ひ掃ふ、後漢末の黃巾賊の名を借る、野棠自發空流水人の賞する無し、花空しく水に流れ去る、江燕初歸不見人人の住する無し、燕空しく歸る、遠樹遠く見ゆる樹林、依依は多義あり、茂盛の形容、又丁寧の形容、又愁思の形容、今愁思の形容とす、如送客『毛詩』に昔し我往き矣、楊柳依依と、樹も愁思を以て客を送る、狀態ある如し、平田渺渺田には水のみ渺渺たり、獨傷春田水も春を傷むが如し、長洲苑は姑蘇の南、太湖の北に在り、絕佳の地とす、而かも亂後は首を回らし看るに忍びず、荒涼たればなり、烽火は兵火、年年報虜塵長洲苑に於て烽火を揚げ以て虜の侵入を報ず、

【評論】此の篇、對を以て起し、勁拔比無し、「京口旅泊」と共に傷心の作とす、

與僧話舊　劉滄

巾舄同時下翠微　舊游因話事多違　南朝古寺幾僧在
西嶺空林唯鳥歸　莎徑晚煙凝竹塢　石池春水染苔衣

此時相見又相別　卽是關河朔雁飛

巾舄時を同うして翠微を下る、舊游話に因て事多くは違ふ、南朝の古寺幾僧か在る、西嶺の空林唯鳥のみ歸る、莎徑の晩煙竹塢に凝り、石池の春水苔衣を染む、此の時相見て又相別る、卽ち是れ關河朔雁飛ぶ、

【略傳】劉滄字は蘊靈、魯の人、太中間の進士、詩家の所謂晩唐の作家、

【句釋】與僧話舊方外の友と再會して事を話す、巾は儒巾、劉滄が頭に戴く物、舄は僧履、僧が足に穿つ物、同時下翠微二人一所に山を下りて來る、舊游因話事多違詩人も沙門も東西に離散せるもあり、死歿せるもあり、昔と相違する事多し、南朝は金陵、古寺幾僧在金陵に都せし天子は大抵佛敎に歸依し、寺を建るもの多し、然るに會昌年に武宗は寺院を燒き、僧をして還俗せしむ、今日は幾僧か此に住するや、西嶺空林唯鳥歸南朝に對して西嶺と云ふ、日暮ならざれば鳥は歸らず、故に通泛に西嶺と用ひしなり、石川鴻齋は印度を指すと滑稽の極なり、莎徑莎艸の徑路、晩煙凝竹塢竹塢に晩煙が凝結して散せざるなり、石池春水染苔衣苔の形は衣紋を作す、其の苔色を濃に染むるものは春水なり、此時相見又相別偶ま會うて又直ちに別る、佛敎の

會者定離の義を含む、卽是關河朔雁飛相見て相別るる時、其の時節を言へば關河千里、北雁の歸る時なり、

【評論】此の篇、方外に贈る詩として上乘なるものに屬す、中唐の詩境、到底晩唐の詩とは思へず、南朝の十四字は違ふの意を叙し、莎徑の十四字は今の所見、而して愴然の氣、字字句句の間に在り、余は最も此等の詩を愛吟す、

長洲懷古

野燒空原盡荻灰　吳王此地有樓臺　千年事往人何在
半夜月明潮自來　白鳥影從江樹沒　清猿聲入楚雲哀
停車日晩薦蘋藻　風靜寒塘花正開

野燒空原盡く荻灰、吳王此地に樓臺あり、千年事往て人何くにか在る、半夜月明らかにして潮自ら來る、白鳥の影は江樹に從つて沒し、清猿の聲は楚雲に入つて哀しむ、車を停めて日晩蘋藻を薦むれば、風靜にして寒塘花正に開く、

【句釋】長洲は吳王闔閭の游苑、今其の荒狀を叙す、野燒野火が燒き盡す、空原池も無く樹も無し、盡荻灰蘆荻の燒けたる灰のみ存す、有樓臺昔し吳王の樓臺有りしを言ふ、今は亡し、千年大數なり、事往人何在人は主として吳王、客として宮女なぞも含む、粉黛も金冠も灰滅して有ること沒し、半夜月明潮自來楊子江海門の潮が來るを月下に見るのみ、白鳥は白鷗、江樹の影に沒す、是れは晝間なり、淸猿は聲の淸るを云ふ、猿聲は楚地の雲中に入て哀しむ、是れ夜間なり、停車日晚薦蘋藻祖廟や王廟へは禮式として蘋藻を供薦するが漢土古代よりの事、吳王の靈に薦む、風靜寒塘花正開花一枝以て其の靈を弔す、

【評論】此の篇、第三句と第六句と夜を叙し、其の餘は大抵日暮を叙す、素隱和尙は作者は魯人、吳は姬姓にて、魯と同姓、劉滄の意に吾が故國の同姓じやと思うて吳王の廟に蘋藻を薦めたるぞと、淸の紀曉嵐曰く夫差等の如き、皆祀るべき處無し、此れ直湊の句のみと、薦蘋藻の三字を難ず、沈歸愚も、亦罵しる、余案ずるに劉が意は定めし素隱の解する如くならん、然らずんば、何ぞ此の語を爲さんや、寧齋は冷熱相襯して空原荻灰も亦因りて著落有りと、此の如くにして古人を救はんと欲す、其の心地は可し、詩道よりは不可なり、

煬帝行宮

此地曾經翠輦過　浮雲流水竟如何　香銷南國美人盡
怨入東風芳艸多　殘柳宮前空露葉　夕陽江上浩煙波

行人遙起廣陵思　古渡月明聞棹歌

此地に曾て翠輦の過ぐることを經、浮雲流水竟に如何、香は南國に銷して美人盡き、怨は東風に入つて芳艸多し、殘柳宮前露葉空しく、夕陽江上煙波浩たり、行人遙かに起す廣陵の思、古渡月明にして棹歌を聞く、

【句釋】煬帝行宮季昌が注に煬帝汴河を開き艦を泛べ江都の游を爲す、頂昇、新宮の圖を進む、帝之を愛して圖に卽て營建すと、長安を去て、江都に游ぶなり、此地は江都、又東都、武后は神都、晉は西京、五代梁は西都、金は中京、今日の河南省河南府なり、曾經翠輦過天子の乘車を翠輦と云ふ、煬帝の盛時を叙す、浮雲流水百年の榮華、唯是れ一夜の夢、竟如何浮雲は神女の故事、流水は娥皇女英を指すと、素隱の說、亦如何ともする無し、香銷は美人の衣帶なぞに付ける麝香の類、南國は江都、江都は古の越國、越は南方なればなり、美人盡越國は美人多く產する有名の地、煬帝が愛したる美人も今日は悉皆亡し、怨は寵を得ざる美人の怨恨、入

東風芳艸多今日青青として生ずる草は皆な是れ美人怨魂の化するものならん、殘柳宮前空露葉煬帝が長安より江都に至る數百里の間に種し楊柳も、空しく露が葉を沾す、葉が已に空しと見るも亦可、夕陽江上浩煙波煙波のみ浩として江上の夕陽に反映するを見る、行人は旅行の人、劉自身なり、遙起廣陵思晉の嵇中散は東市に斬られし時、廣陵秘曲を奏したり、今我隋皇の末路を想へば、豈此の廣陵の思ひを起さざらんや、素隱の廣陵を故鄕と解するは非常に誤る、古渡月明聞棹歌煬帝自ら水調歌を作り多くの美人に歌はしむ、今月明の下、兒女等が棹歌を聞く、當年亡國の因由を思うて感慨を發したるなり、

【評論】　此の篇、紀曉嵐の評に、亦是れ許渾懷古の流、此の種の詩、風韵に似て、實は則ち俗、醫すべからず、沈歸愚は曰く典雅誦す可しと、紀評の俗は抑に過ぐ、沈評の典雅は揚に過ぐ、懷古詩として尋常一樣の看を作して足る、劉は此の詩に於て此地の字あり、咸陽に於て經過此地あり、長洲に於て吳王此地あり、以て其の變化の才に乏しきを知るべし、許渾は其の才力を論ずれば遙かに劉が上に在り、

經故丁補闕郊居

許渾

死酬知己道終全　波暖孤冰且自堅　鵬上承塵纔一日

鶴歸華表已千年　風吹藥蔓迷樵徑　水暗蘆花失釣船

四尺孤墳何處是　闔閭城外草連天

死して知己に酬ゆ道終に全し、波暖にして孤冰且自ら堅し、鵬は承塵に上る纔かに一日、鶴は華表に歸る已に千年、風は藥蔓を吹て樵徑に迷ひ、水は蘆花に暗うして釣船を失す、四尺の孤墳何れの處か是なる、闔閭城外草天に連る、

【句釋】　故は故人、死せし人、丁は姓、補闕は官名、右補闕、左補闕の二人あり、供奉諷諫を掌る、郊居は郊外の居、死酬知己道終全、士は知己の爲めに死すと『史記豫讓傳』にあり、丁は死を以て其の知己の恩に酬いしならん、友道終に全きを得、波暖は多數人間の輕薄を云ふ、孤氷は丁を譬ふ、且自堅氷は結んで解けず、甚だ堅固なり、鵬は「ミミヅク」なり、上承塵『搜神記』に長安の張氏室に居る、鵬有り床に上る、張氏祝して曰く、禍たらば卽ち飛で承塵に上れ福たらば卽ち飛で我が懷に入れと、承塵は壁衣なり、網の如き物、俗に「チリヨケ」なり、纔一日丁は知己の爲め自殺でも爲したるものならん、蓋し其は一日の事なり、鶴歸華表已千年曾て

丁令威が鶴に化して華表即ち日本の鳥居に類するものに歸り止まる、丁の姓同じきを以て之を言ふ、死は一日にして名は千年との意なり、風吹藥蔓迷樵徑生前種置し藥草の蔓が長じ風の爲めに吹かれ其の樵徑すら分ち難し、水暗蘆花失釣船水中は蘆花が得意に茂りて釣船の何處に在るや知り難し、四尺孤墳何處是墳に就て三尺四尺、定法無きが如きも、孔子は其の母墳を封して四尺と爲すと、今丁が四尺の墳は何處ぞや、闔閭城は吳なり、草連天草青青として知るに由無きなり、

【評論】此の篇、前半は正しく丁の事を叙し、後半は今見る所の景を叙す、傷惋の言、自から人を動かすに足る、紀曉嵐と雖も一字も議するもの無し、

贈蕭兵曹

李嘉祐

廣陵堤上昔離居　帆轉瀟湘萬里餘　楚澤病時無鵬鳥
越鄉歸去有鱸魚　潮生水國蒹葭響　雨過山城橘柚疎
聞說攜琴兼載酒　邑人爭識馬相如
廣陵堤上昔し離居す、帆は瀟湘に轉ず萬里の餘、楚澤病時鵬鳥無し、越鄉

歸る處鱸魚あり、潮は水郭に生じて蒹葭響き、雨は山城を過ぎ橘柚疎なり、聞くならく琴を攜へ兼て酒を載すと、邑人爭でか識ん馬相如、

【句釋】●蕭は姓、●兵曹は官名、●州郡に屬隷する役、●廣陵は江蘇の揚州府江都なり、●堤上昔離居蕭は越の生地を離れて江蘇の江都に來り住したるなり、●帆轉瀟湘萬里餘帆を轉じて廣陵より、更に楚國の邊へ居を移されたるなり、●楚澤病時無鵬鳥縱令ひ楚澤にて屈原の如き病に罹ることはあるも、賈誼の如く鵬鳥の禍には逢はざるなり、漢の賈誼が長沙に謫せられし時、鵬あり來つて賈が舍中に入て其の承塵に上る、之を占ふに野鳥室に入て主人將に去んとするの卦を得たり、賈誼は年壯にして忽ち死したり、蕭は之れ無し、●越鄉歸處有鱸魚越は本揚州なり、晉の張翰が秋風に鱸魚を懷ふの故事を以て蕭に喩ふ、●潮生水郭兼蒹響兵曹が歸隱する處の景色は水郭にて潮聲來るときは兼蒹の響が起る、●雨過山城橘柚疎山城の邊は雨の過る毎に橘柚が疎となる、●聞說攜琴兼載酒兵曹は琴も彈じ酒も飲む風流を解する人なり、●邑人爭識馬相如邑人は兵曹が漢の司馬相如の如き人なるを識らず、尋常人を以て遇するを慨するなり、要は知己に遇はざるを惜むなり、司馬相如臨邛の令の處に至る、其の邑の富人卓氏なるもの相如を招て宴を開き饗せ

しことあり、時に相如琴を鼓して、卓氏の女文君を挑む、遂に相如、文君を攜へて爐に當て酒を沽らしむ、今又蕭氏琴を鼓し、又學力も相如に劣らざる者なれど、邑人は竟に相如の如き兵曹を識らずと嘆ず、

【評論】此の篇、一本許渾の作とす、黃鶴樓より此に至る九首、前八解して曰く前虛の二句は體面實を帶びて情思老古なり、後實の二句は景意實を著くると雖も體面流麗なるものなり、

酬張芬赦後見寄　司空曙

紫鳳朝銜五色書　陽春忽布網羅除　已將心變寒灰後
豈料光生腐草餘　建水風煙收客淚　杜陵華竹夢郊居
勞君故有詩人贈　欲報瓊瑤愧不如

紫鳳朝より銜む五色の書、陽春忽ち布いて網羅除かる、已に心の寒灰に變ずる後を將て、豈料らんや光腐草の餘に生ぜんとは、建水の風煙客淚を收め、杜陵の花竹郊居を夢む、君を勞して故らに詩人の贈りものあり、瓊瑤に報ぜんと欲して如かざることを愧づ、

【句釋】酬●●●●赦後見●●●●寄張芬は傳不詳、司空曙が、時に謫せられ長沙に在り、偶ま大赦に逢うて長安の郊居に歸らんとして途江陵府に來りて泊す、張芬が詩を作り之に寄す、司空曙、和して作りしなり、流寓中志を玄門に寄せ、多く法師と交游す、紫鳳は木にて造れる鳳、朝●●●●銜五色●●●●書後趙の石虎が罪人赦免に就ての詔書は五色の紙を用ひ木鳳の口に銜ましめて頒布す、今司空曙が赦に遇うて乃ち此の事を用ふ、陽●●●●春●●●●忽●●●●布●●●●網●●●●羅●●●●除●●●●人の囚となり、流と爲るは、猶ほ鳥の網羅中に捕へらるるが如し、今赦免に逢ふは鳥の網羅を除かれて山林へ歸るが如し、陽春の字は活き反る意味、已●●●●將●●●●心●●●●變●●●●寒●●●●灰●●●●後●●●●流●●●●謫せられし當時は已に心が寒灰と爲て再ひ春に逢ふ如き事無しと思ひたり、然るに豈●●●●料●●●●は●●●●期●●●●せ●●●●ざ●●●●り●●●●し●●●●を●●●●云●●●●ふ●●●●、●●●●光●●●●生●●●●腐●●●●草●●●●餘●●●●恩●●●●光●●●●が●●●●我●●●●が●●●●身●●●●に●●●●及●●●●ぶ●●●●た●●●●る●●●●を●●●●云●●●●ふ●●●●、●●●●腐●●●●草●●●●化●●●●して●●●●螢●●●●と●●●●爲●●●●る●●●●の●●●●意●●●●を●●●●以●●●●て●●●●恩●●●●光●●●●の●●●●極●●●●めて●●●●微●●●●なる●●●●を●●●●云●●●●ふ●●●●、●●●●建●●●●水●●●●は●●●●江●●●●陵●●●●府●●●●荊●●●●門●●●●縣●●●●、●●●●風●●●●煙●●●●收●●●●客●●●●淚●●●●囚●●●●を●●●●脫●●●●して●●●●風●●●●景●●●●を●●●●見●●●●る●●●●、●●●●實●●●●に●●●●我●●●●を●●●●慰●●●●むる●●●●もの●●●●の●●●●如●●●●し●●●●、●●●●客●●●●中●●●●の●●●●淚●●●●も●●●●收●●●●まらざる●●●●を●●●●得●●●●ず●●●●、●●●●杜●●●●陵●●●●は●●●●長●●●●安●●●●に●●●●在●●●●り●●●●、●●●●曙●●●●が●●●●郊●●●●居●●●●は●●●●此●●●●に●●●●在●●●●り●●●●、●●●●華●●●●竹●●●●夢●●●●郊●●●●居●●●●內●●●●面●●●●の●●●●意●●●●は●●●●杜●●●●陵●●●●郊●●●●居●●●●の●●●●華●●●●竹●●●●を●●●●夢●●●●に●●●●見●●●●るなり、身は未●●●●だ●●●●長●●●●安●●●●に●●●●至●●●●らず、心●●●●は●●●●已●●●●に●●●●至●●●●る●●●●、●●●●勞●●●●君●●●●俗●●●●語●●●●の●●●●君●●●●に●●●●心●●●●配●●●●をかけたと云ふこと、故●●●●は「コトサラニ」と訓む、有●●●●詩●●●●人●●●●贈●●●●詩●●●●を●●●●寄●●●●せ●●●●られたるが故●●●●に●●●●詩●●●●人●●●●の●●●●贈●●●●りなり、欲●●●●報●●●●瓊●●●●瑤●●●●愧●●●●不●●●●如●●●●『毛●●●●詩●●●●』●●●●に●●●●『我●●●●に●●●●投●●●●ずるに●●●●木●●●●桃●●●●を●●●●以●●●●てし、之●●●●に●●●●報●●●●ずるに●●●●瓊●●●●瑤●●●●を●●●●以●●●●てす』と君が贈らるる所の詩は瓊瑤の如きも

のなれども、我は君に報ふるに瓦礫の如きものを以てす、如かざるを愧づと云ふ所以、

【評論】　此の篇、前六句は盡く我が情思を叙し、後二句は張に酬ゆることを叙す、寧齋は此の詩の一二七八を圈破せざるが、前後の關係上、圈せざるを得ざるなり、陽春の文字ありてより腐草の光生じ、紫鳳の字ありてより、瓊瑤の字活き、其の線脈の斷んと欲して斷す、作者工夫の深且大、察せざるべからず、

答賓拾遺臥病見寄　　包佶

今春扶病移滄海　幾度承恩對白花　送客屢聞簷外鵲
消愁已辨酒中蛇　瓶收枸杞懸泉水　鼎鍊芙蓉伏火砂
誤入塵埃牽吏役　羞將簿領到君家

今春病を扶けて滄海に移る、幾度か恩を承けて白花に對す、客を送つて屢ば聞く簷外の鵲、愁を消して已に辨ず酒中の蛇、瓶には枸杞懸泉の水を收め、鼎には芙蓉伏火の砂を鍊る、誤つて塵埃に入つて吏役に牽かる、羞らくは簿領を將て君が家に到りしことを、

【略傳】　包佶字は幼正、潤州延陵の人、包融が子、諫議大夫、刑部侍郎、秘書監を經て、丹陽公に封ぜらる、歿年未詳、

【句釋】　賓は姓、拾遺は官名、賓羣なり、德宗の朝、左拾遺と爲る、扶病移滄海包は風痺の病に罹りて江東に轉地療養したるを云ふ、幾度は一再ならずの義、承恩賓羣の爲めに恩を承けたるなり、對白花宮中の殿名を白花と云ふ、此の白花殿にて賓は拾遺の官、包は秘書監として日日相見え、種種と賓の情誼を蒙むりしを云ふ、送客屢聞簷外鵲此の句は滄海に移住せし時の事を云ふ、陸賈が『新語』に烏鵲噪いで行人至ると、病中に見舞人の歸るを送り、其の後復烏鵲の噪ぐを聞けば、又誰人か來りしかと疑ひ喜ぶ、而かも來らざるなり、消愁已辨酒中蛇賓が寄せられし詩を讀みて愁を消したり、之を譬ふるに、樂廣なる人あり、此の樂廣に親しき友あり、而かも久しく來らず、其の來らざる所以を友に問ふ、答て曰く前に酒を賜はることを蒙むる、盃中に蛇影あり、而して疾を得たり、是の時、廣が廳壁に弓あり、廣は謂ふ、友の蛇影と思ひしは、是れ弓影を見誤りしならん、乃ち酒を前處に置て問て曰く、見ること有りや否や、友曰く前の如し、乃ち弓影なることを言ふ、友豁然として頓に愈ゆ、今病の頓に愈ゆるは賓が詩を寄せられたればなり、瓶收枸杞懸泉水枸杞の根の深張して水に入りたるを飲めば壽命が長しと

の傳說あり、『續神仙傳』に朱孺子、溪に汲む、二華犬の枸杞叢中に入るを見る、之を掘れば根の形、二犬の如し、食うて身輕し千峯の上に飛ぶ」と、余も亦此の貴き水を瓶中に蓄ふと云ふ、枸杞は一名を仙人杖、又西王母杖、又地仙、又天精と云ふ、醫の之を用ふるは風疾を除き、精氣を補ふ爲めなりと、包は風疾の爲め此の水を飲む、鼎鍊芙蓉伏火砂光明砂の火の如くなる者を之を芙蓉砂と謂ふ、道家の經曲、大洞煉眞寶經に曰く丹砂を將て伏火を修煉す、後、鼓して白銀と成る一返、白銀を將て化して砂を出す、伏火之を鼓して黃金と爲す二返なり、今仙家の藥方を鍊るは、風疾を醫せんが爲めなり、誤入塵埃牽吏役包の初志は、塵埃外の道士と爲らんと欲したり、然るに事志しと違うて官吏と爲るは、卽ち是れ誤まりなり、羞將簿領到君家諸道鹽鐵の租稅を記錄したるものを簿領と言ふ、領は錄なり、包は鹽鐵使の官たりし時、此の張面を以て竇が家に到りし事あるなり、今日之を回顧すれば實に面目次第も無きとの意、鹽鐵は仙藥に用ふるものなれば、其の羞や一層深きなり、

【評論】此の篇、病中、安心立命の境を叙して全く遺憾無し、前後二聯共に仙家の故事を運用して、字鍊り、句研して、眞に妙處に達す、而かも包は此の風痺の爲め歿したり、憐むべし、風痺は醫書に手足痿痺を以て仁ならずと爲すと、俗に中風と云ふ、手足が自由にならざるを不

仁と云ふ、

寄樂天

元稹

榮辱升沈影與身　世情誰是舊雷陳　唯應鮑叔偏憐我
自保曾參不殺人　山入白樓沙苑暮　潮生滄海野塘春
老逢佳景唯惆悵　兩地各傷無限神

榮辱升沈影と身と、世情誰か是れ舊雷陳、唯應に鮑叔のみ偏に我を憐むべし、自から保つ曾參が人を殺さざることを、山は白樓に入る沙苑の暮、潮は滄海に生ず野塘の春、老て佳景に逢うて唯惆悵す、兩地各の傷む限り無きの神、

【句釋】●●樂天は杭州に在り、元稹は同州に在り、乃ち賦して贈る。●榮辱升沈影與身榮と辱と升と沈との四のもの到底、影の身に從がふ如く、相離るべからず、●●●●●●●●世情誰是舊雷陳世人の多くは榮と升との際は交際するも、辱と沈との際は昨日の友も今日は路人の如きものと爲る、雷義と陳仲との如き節の固き友は外にはあらず、君と僕とのみなり、●●●●●●●●唯應鮑叔偏憐我齊の桓公の臣、

管仲と鮑叔とは交游の深きものなり、管仲曰く我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔と、管仲貧なりし時、屢しば鮑叔を欺むき金を取る、而かも鮑叔は微塵も其の人を疑はずして却て其の人を信ぜしなり、今樂天を鮑叔に比し、管仲を自から比す、自保曾參不殺人甘茂秦王に謂て曰く昔し曾參と與に姓名を同うする者あり、人を殺す、人其の母曾參に告ぐ、母の曰く吾が子は人を殺さず、又頃らくありて人來る、頃らくありて又來る、其母杼を投て走る、夫れ曾參が賢を以て其の母之を信ず、然れども三人なれば母惧る、今臣を疑ふ者特に三人のみならず、臣恐らくは大王の杼を投げんことをと、元稹が長慶二年に相たり、時に王延湊、牛元翼を深州に圍む、元稹、天子の非次に己れを拔くを以て功を立て上に振はんと欲す、于方、元稹に謂て曰く、奇士王昭王友朋あり、嘗て燕趙に客たり、賊黨と通ず、反間を以て元翼を出さしめんと、元稹之を然りとす、李賞其の謀を知つて裴度に告て曰く、于方、元稹が爲め公を刺んとすと、裴度隱れて發せず、神策中尉が于方の事を奏するに及んで三司に詔し、訊鞫せしめ其の裴度を害する無根なることを知り得たり、然れども元稹は罷められて同州の刺史と爲る、他は殺すと云ふも自からは人を殺さずと信ず、山入白樓此の白樓も沙苑も共に同州に在る、暮は夕陽なり、此の句は元自身に屬す、潮生滄海野塘春滄海と野塘とは杭州、卽ち樂天の方に屬す、我は同州の

夕景を看、君は杭州の晩春を看、老逢佳景同州の佳景、杭州の佳景、唯惆悵「カナシミ」「モダエル」を惆悵と云ふ、都の長安に在らざればなり、兩地各傷無限神傷の中に老と貶との二義を含む、

【評論】此の篇、前後聯共に、尤も用力の作、又眞摯の情を見る、世は元稹が雷陳管鮑を說くが如く、後世元白の名は長く流傳して朽ざるものなり、

秋居病中　　雍陶

幽居悄悄何人到　落日清涼滿樹梢　新句有時愁裏得
古方無効病來拋　荒簷數蝶懸蛛網　空屋孤螢入燕巢
獨臥南窗秋色晩　一庭紅葉掩衡茅

幽居悄悄何人か到らん、落日清涼にして樹梢に滿つ、新句時あつて愁裏に得、古方効なくして病來拋つ、荒簷の數蝶蛛網に懸り、空屋の孤螢燕巢に入る、獨南窗に臥す秋色の晩、一庭の紅葉衡茅を掩ふ、

【略傳】雍陶字は國鈞、蜀の成都の人、太中六年、國子毛詩博士より出て簡州の刺史と爲る、

【句釋】　秋居病中病中の秋懷を叙す、幽居は閒居と同じ、悄悄は急也靜也慍也憂也と注して心の慘なきを云ふ、何人到人の訪ふ者無し、在官中ならば、病中と雖も訪ふ者多からん、官を辭して幽居するなれば、輕薄の人情之を訪はず、落日清涼滿樹梢正に傾むかんとする日影が何とも言へぬ氣を帶て樹樹の梢に滿つ、新句有時愁裏得平常習ふ所愁懷に因て偶然新句を得、古方無効病來拋醫書は平常習はざる所、偶ま之に依て藥を調合するも効驗なし故に之を拋擲す、荒簷數蝶懸蛛網、病客が久しき洒掃意の如くならず、蛛網の荒簷に懸るや數蝶憐れに捕へらるを見る、空屋弧螢入燕巢我が一物も無き屋に燕巢を存するも燕は時已に秋に逢うて去る、其の燕の舊巢へ孤螢が飛んで入る、共に是れ我が病身に比較して甚だ可憐の狀態を云ふ。獨臥南窗秋色晚獨は寂寥を意味す、素隱和尙の如く看病の者も無しと見るは誤まる、一庭紅葉掩衡茅屋內は蛛網、屋外は紅葉にて、萬事荒廢する狀此の如し、衡門茅舍は貧者の家なり、

【評論】　此の篇、交股格の作法として最も見易すきもの、交股格とは何ぞ、一二の句と七八の句とにして一の絕句を爲す、三句より六句に至る、前後二聯、亦切て以て一絕句と爲すを得、是を交股格の法とす、此の篇は、晚年廬山に在つての作、

送崔約下第歸揚州　　姚合

滿座詩人吟送酒　離城此會亦應稀　春風下第時稱屈
秋卷呈親自束歸　日晚山華當馬落　天陰水鳥傍船飛
江邊道路多苔蘚　塵土無由得上衣

滿座の詩人吟じて酒を送る、離城此の會亦應に稀なるべし、春風に下第して時に屈と稱す、秋卷親に呈せんとして自ら束ねて歸る、日は晚れて山花馬に當つて落、天は陰つて水鳥船に傍うて飛ばん、江邊の道路苔蘚多し、塵土衣に上ることを得るに由なからん、

【句釋】　崔約は『唐書』に傳を缺く、下第は役人に及第せざるなり、揚州は今日の廣陵、省江蘇揚州なり、一二の句は解し易し、春風進士試驗、春と秋となり、下第有司所謂試驗官に惡弊あり、故に才あるも下第するあり、才無きも及第するあり、崔は才ありて下第する者、故に酒を送り詩人會して離別の燕を盛んにす、同情の多きこと知るべし、時稱屈劉蕡が下第して物總て囂然として屈と稱す、其の故事を用ふ、張りし氣が屈したるなり、秋卷は古注に唐の進士下第して退て業を肄す之を過夏と云ふ、業を執て以て出て之を秋卷と云ふ、今及第せんと欲して作り

し詩文を呈親自束歸故鄕の親に呈示せんと欲して自ら一束にして歸る、友人の送詩も此の中に收めたるは勿論なり、日晚山花當馬落山路落日、馬頭の前に紛紛として落つるものは花なり、天陰水鳥傍船飛江上天陰、其の乘船の前に翻翻として飛ぶものは鳥なり、及第して歸る時なれば天晴なり、日曉なり、下第して歸るは全く反對の景なり、江邊道路多苔蘚都の紅塵萬丈なるは道路が畢竟惡土なればなり、君の歸らんとする揚州は水國ゆゑ苔蘚多くして、塵土無由得上衣君の客衣は都人の衣と異なり決して塵土は汚さずと云ふ、

【評論】此の篇、一二の句は正しく離別の燕を叙し三四以下の句は其の歸るに就ての情懷實景を叙す、句格正に完成なり、寧齋末二句を圈せざるは何ぞや、

旅館書懷　劉滄

忽看庭樹換風煙　兄弟飄零寄海邊　客計倦行分陝路
家貧休種汶陽田　雲低遠塞鳴寒雁　雨歇空山噪暮蟬
落葉蟲絲滿窗戶　秋堂獨坐思悠然

忽ち看る庭樹風煙を換ふることを、兄弟飄零して海邊に寄る、客計行くに

倦む分陝の路、家貧にして種うることを休む汶陽の田、雲低うして遠塞寒雁鳴き、雨歇んで空山暮蟬噪ぐ、落葉蟲絲窗戶に滿つ、秋堂に獨坐して思悠然、

【略傳】劉滄字は蘊靈、魯の人、太中の進士、

【句釋】旅館書懷或る說に大中中に弟劉季と共に下第して北海に之く時の作なりと、又『才子傳』には下第の事記載なく、江海の邊に旅寓したる時の作と、忽看庭樹換風煙族館に寓して見る所の卽目なり、時節の換移を見るは庭樹の色を見るに如く無し、兄弟飄零寄海邊飄零は草木の零る形容詞を人間の發達せざるに移し用ふる語、兄弟二人江海の邊に寄寓するは未だ榮達せざる故なり、客計倦行分陝路意氣を盛んにし、又意氣を衰にし、相往來する分陝の路は已に倦む、倦むは卽ち嫌ふなり、『春秋公羊傳』に陝より東は周公之を主る、陝より西は召公之を主る、家貧休種汶陽田官吏と爲る能はず、然りと雖も故山へ歸りて田を畊やさんと欲するも是も能はず、旅寓中の感慨や深し、齊と魯との境を汶陽とす、雲低遠塞鳴寒雁寓館を出て天際を望めば遠塞は雲が低れ、而かも寒雁が鳴飛する、雨歇空山噪暮蟬已にして空山は雨歇み、但

暮蟬の嘒嘒と鳴くあるのみ、雁も蟬も共に哀聲は一樣とす、落葉蟲絲滿窗戸此の句は雍陶の「秋居病中」詩と意義を同うす、掃除も滿足にせざる旅館とすれば極めて下等の旅館なり、秋堂獨坐思悠然悠然の字義は樂觀的にも、悲觀的にも用ふ、今は秋堂に坐して種種思ひに耽ることなれば悲觀的の方に屬す、序を以て一例を出せば、淵明の「悠然として南山を見る」は樂觀なり、

【評論】　此の篇、一句一句榮達者の言にあらざること知り易し、景あり情あり、失意の者之を讀まば、必ず共鳴する所あるべきなり、劉滄は懷古詩を以て許渾と雙稱せらる、

潁州客舍　　姚揆

素琴孤劍尙閒游　誰共芳樽話唱酧　鄕夢有時生枕上
客情終日在眉頭　雲拖雨脚連天去　樹夾河聲遶郡流
回首帝京歸未得　不堪吟倚夕陽樓

素琴孤劍尙閒游す、誰と共にか芳樽話して唱酧せん、鄕夢時あつて枕上に生じ、客情終日眉頭に在り、雲は雨脚を拖いて天に連つて去り、樹は河聲を夾んで郡を遶つて流る、首を帝京に回らせども歸ること未だ得ず、堪へ

ず吟じて夕陽の樓に倚るに、

【句釋】　姚揆は『唐書』に傳を缺く、潁州は河南省汝陰郡、旅寓中の作とす、素琴琴に飾りの無きもの、孤劍尙閒游閒游するにも劍と琴とを持す、士人の風を失なはず、誰共芳樽話唱酧他鄕に在つては酒を應酬し、又詩を唱和する者無し、鄕夢有時生枕上故鄕の事を思うて止まず竟に夢む、客情終日在眉頭人愁の有るときは眉頭に必ず皺を寄す、旅人種種氣を用ふ、此の狀ある所以、雲拖雨脚連天去外面の景色を見れば、一方より出る雲が雨脚を拖くかと見る中に忽ち天上一面暗黑と爲り來る、樹夾河聲遶郡流樹が夾むとあれば、河の兩岸に樹があるなり、流るるは樹にあらずして河水なり、霖雨を經て河流の激するを云ふ、回首帝京歸未得到底及ばざることを知り乍らせめてもと其の方を望む、是れ客情の可憐なる所なり、姚は長安の人ならん、不堪吟倚夕陽樓夕陽とあるからには久雨も霽たるものならん、然れども故鄕の帝京にはあらず、吟じて以て夕陽を賞するの勇氣はあらずとなり、

【評論】　此の篇、旅寓中の情景、歷歷目に在り、寧齋は「閒游」の二字に著眼して精細に五十有六字を看破し了らんことを要すと、評して居るが、總て七律の作法は第二句の話唱酧の三字の處に重きを置く、此の三字よりして下の諸句を生ずること初盛中晩の諸家皆然らざるは無し、

一二の句、對を以て起らざる以上は一句に重味なく、第二句の五六七の三字に重味を持たり、此の處、若し字が切ならずして泛なるは七律の至る者にあらず、留意すべき所其れ此に在り、

春日長安卽事　　崔魯

一百五日又欲來　梨花梅花參差開　行人自笑不歸去
瘦馬獨吟眞可哀　杏酪漸香鄰舍粥　榆煙將變舊爐灰
玉樓春暖笙歌夜　肯信愁腸日九回

一百五日又來らんと欲す、梨花梅花參差として開く、行人自ら笑ふ歸去せざることを、瘦馬獨吟して眞に哀むべし、杏酪漸く香し鄰舍の粥、榆煙將に變ぜんとす舊爐の灰、玉樓春暖なり笙歌の夜、肯て信ぜんや愁腸の日に九回することを、

【句釋】崔魯は『唐書』に傳を缺く、廣明間の進士なりと云ふことを傳ふるのみ、一百五日は寒食の日を云ふ、冬至を去て一百五日目なり、略して百五節と云ふ、又欲來古曆の二月、今曆の三月なり、梨花梅花參差開梨花の舊二月に開くは尋常なり、梨花の二月は遲し、是れ氣候が

寒なればなり、參差は互ひ違ひと云ふ意義、行人自笑不歸去旅行中の人故鄕へ歸りて掃墳でも爲すべきに余は然らず、自ら笑ふ所以、瘦馬獨吟眞可哀鴻齋は「瘦馬ハ斷イテ空シク馬部屋ニ繫イデオクモ哀ムベシ」と解す誤謬なり、「瘦馬ニ騎テ獨吟スル」なり、長安の客中に在て、故鄕へは歸らず、路上に行吟するも眞に哀むべきにあらずやの意味なり、馬が吟ずるにはあらず杏酪漸香鄰舍粥崔魯が寓居の鄰舍にて寒食の日に供する爲め杏仁をすりて作りし酪、卽ち乳漿の香氣が麥粥を烹る香と共に起る、榆煙は榆柳の火を取る煙、將變舊爐灰舊爐灰を驗して正に新火を燒かんとす、乃ち榆柳を求め火を鑽つて試みつつある煙を見るなり、宮廷にては榆柳の火を取て近臣に賜ふが例なり、玉樓春暖笙歌夜宮中の玉樓は笙歌管絃の樂ありて、人間は春寒なるも、玉樓は春暖ならん、肯信愁腸日九回玉樓春暖に笙歌する人は、肯て我等愁人の腸が一日に九回するなどの事は恐くは信ぜざらん、一日腸九回は太史公の語を用ふ、

【評論】此の篇、一二の十四字拗體を以て出し、而かも聲律諧調す、第一句仄聲六字、第二句平聲七字、仄平互に用ふ、寧齋曰く三四の二句更に第五字不と眞との字を拗するものは實に此上兩句の變格を收めて正格に入らしむるの關鎖なりと」臆斷の說、槐南と其の妄を同うするものなり、不の仄を救ふに眞の平を以てしたるにはあらず、獨の仄に對して眞の平を用ひたるのみ、若し

此に他の上去二聲の仄字を用ひんか、孤平と爲る、詩法に無き所、是の故に獨の字を孤と改む る場合は眞の字、他の字に換へたりしやも知るべからず、後世詩を學ぶ者、槐南寧齋の糟粕を嘗むべからず、

江　際　　鄭　谷

杳杳漁舟破冥煙　疎疎蘆葦舊江天　那堪流落逢搖落
可得潛然是偶然　萬頃白波迷宿鷺　一林黃葉送秋蟬
兵車未息年華促　早晚閒吟向滻川

杳杳たる漁舟冥煙を破る、疎疎たる蘆葦舊江の天、那ぞ流落して搖落に逢ふに堪へん、潛然は是れ偶然なることを得べけんや、萬頃の白波宿鷺を迷はし、一林の黃葉秋蟬を送る、兵車未だ息まず年華促る、早晚閒吟して滻川に向はん、

【句釋】　江際は江蘇の揚州、鄭谷は僖宗の時、黃巢の亂を避けて此に寓し、以て作るもの、杳杳は遙遙と同じ、遠方を云ふ、漁舟破冥煙冥は滄冥卽ち海上の煙を破つて漁舟が見ゆる、又「クラキ」

煙と見ても可疎疎は密密の反對、卽ち「マバラ」なり、蘆葦舊江天曾て熟知の舊江の天は蘆や葦は依然たる狀態なり、那堪は何堪と殆んど同義、流落逢搖落人間は亂に逢うて流落し、葉は秋に逢うて搖落す、可得潛然是偶然潛然は流淚の貌、偶然は期せずして逢ふこと、人は潛然たることを欲せず而かも潛然となるは是れ偶然の事亦得べからざるなり、萬頃白波迷宿鷺鷺も白く波も白し鷺の宿所に迷ふ所以、一林黃葉送秋蟬一林を以て上の萬頃に對す、巨と細との別知るべし、秋蟬は黃葉を抱きて鳴く、是れ以て鄭自身に比する者の如し、兵車未息年華促黃巢及び朱全忠等の兵亂尙ほ未だ息まず、是れ僖宗の乾符六年の暮なり、故に年華促と云ふ、早晚は「イツカ」なり、閒吟向滻川此の滻川は長安を流るる川、何れの日か長安に向ふを得るやと云ふ意、

【評論】　此の篇、流落と搖落との二意を錯綜して一篇を構成するもの、宋の歐陽修は鄭谷の詩を評して其の調高からず、人家多く小兒に讀ましむと、縱令ひ小兒に讀ましむる調の低きものとなすも、尙ほ宋人の詩に勝ることを知らざるべからず、

中　年

漠漠秦雲澹澹天　新年景象入中年　情多最恨花無語
愁破方知酒有權　苔色滿墻思故第　雨聲入夜憶春田

衰遲自喜添詩學　更把前題改數聯

漠漠たる秦雲澹澹たる天、新年の景象中年に入る、情多くして最も恨む花に語なきを、愁破れて方に知る酒に權あることを、苦色墻に滿ちて故第を思ひ、雨聲夜に入つて春田を憶ふ、衰遲自ら喜ぶ詩學を添ふることを、更に前題を把つて數聯を改む、

【句釋】　中年は中春の事なり、又五十歲の事なりと二說あり、第七句に依て見れば、鄭谷が五十歲の時の作と定むる方可なり、人生を百年と定む、五十は其の中間なれば如何にも此の題あるべきなり、漠漠は雲の寸隙なく連なる形容詞、秦雲は素隱和尙は奇麗なる雲を云ふと、奇麗なる雲は慶雲にて秦雲とは異なる、司空圖の詩に「秦雲楚雨暗相和」の句ありて、秦塞の雲を云ふなり、澹澹天天の色水の澹澹たる如きなり、新年氣象入中年五十歲の新年を迎へたりと解して可、別に深く鑿するの要なし、情多最恨花無語少情の人なれば花に語なきも恨みず、語の無きが花の天分なるに而かも其の無語を恨む、多情なる所以、愁破方知酒有權酒は已に掃愁帚又は忘憂草の異名あり、之を飲む、愁を破ると實際に權威あるなり、苦色滿墻思故第客館の

墻に雨中苦色の長ずるを見る、豈故山の第宅の苦色を思はざるを得んや、雨聲入夜憶春田客館に夜雨を聞く、豈故園の春田水漲るを憶はざるを得んや、衰遲自喜添詩學衰遲は自ら憐むべきも、添詩學は自ら喜ぶべきもの、其の憐むべきは姑らく置き、今喜ぶべきを喜ぶなり、更把前題改數聯老杜が「老去て漸やく詩律に於て細やか」又新詩改ため罷んて且長吟」の意なり、

【評論】　此の篇、前の「江際」と同じく同字を多く用ひて鄭谷が心手の存する所を發揮す、晚唐の名家たるに背かず、司空曙の酬張芬赦後見寄の詩より此に至る十首は前半四句多くは情想、後半四句多くは感興なるものなり、

秋日東郊作　皇甫冉

閒看秋水心無事　臥對寒松手自栽　廬岳高僧留偈別
茅山道士寄書來　燕知社日辭巢去　菊爲重陽冒雨開
淺薄將何稱獻納　臨岐終日自徘徊

閒に秋水を看て心無事、臥して寒松に對す手自ら栽るしに、廬岳の高僧偈を留めて別れ、茅山の道士書を寄せて來る、燕は社日を知つて巢を辭して

去り、菊は重陽の爲めに雨を冒して開く、淺薄何を將てか獻納と稱せられん、岐に臨んで終日自ら徘徊す、

【句釋】　秋日東郊作　皇甫冉は仕へて拾遺左補闕の官に至るも、世道の艱虞なるを以て心を江外に遂んとす、故に飄薄の歎多しと『才子傳』に記する所、事實に近からんか、此の詩長安の東郊に在て作る、　閒看秋水心無事　秋水は清澄之を看れば心亦清澄と爲る、無事は心が外事に馳せざるを言ふ、　臥對寒松手自栽　時ありては秋水を看、時ありては寒松に對して其の手栽せしものが長せしを思ふ、　廬岳は一名を天子鄣と云ふ、晉代惠遠が住せし東林寺あり、高僧留偈別佛家の詩を偈と云ふ、　茅山は句容縣南五十里に在り、道士寄書來佛敎と儒敎との中間に道を修する者を道士と云ふ、　尋常世間と離るる境界は僧と同じ、儒と同じからず、此の二流と交はるなり、　燕知社日春社と秋社とあり、秋社は立秋の後、第五日を以て社日と爲す、是の日五土の神を祀るなり、　辭巢去燕は有情の者、能く時節を知て歸り去る、菊爲重陽菊は燕と異なり非情なれども重陽に開くは卽ち重陽を知るが故ならん、冒雨開人に看せんが爲め特に雨を冒して開くかと疑ふ、　淺薄は自身の才の淺薄を云ふ。將何將の字「モテ」と訓して意味は進なり奉なり、何を進めてなり、　稱獻納使和甌事の役を獻納使と稱す、甌の音鬼と同じきを以て玄宗之を獻納使

と改めしなりと古注に見ゆ、我等如き不才の者は獻納使の名を汚すに過ぎずと謙遜するなり、臨岐は『釋名』に物兩を岐と爲すとありて「フタマタ」と訓す、西せんか東せんか、定める時に臨むなり、　終日自徘徊役を辭して隱居せんか如何せんと徘徊、卽ち「サマヨフ」なり、

【評論】　此の篇、皇甫冉が人品の淸きこと一讀して知り易し、余をして議論せしむれば「高僧」と「道士」の對極めて疎對なり、何ぞや高僧は敬稱にして、道士は普通名詞なり、故に沙門又は緇人又は僧伽と爲さざるべからず、別と來とは可なりとするも、去と開とに至りては頗る苦心の痕跡を存す、寧齋は知と爲字と神彩自ら生ずと讚するが紀曉嵐に笑はるるを知らざるなり、

過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若　王維

無著天親弟與兄　嵩丘蘭若一峯晴　食隨鳴磬巢鳥下
行踏空林落葉聲　迸水定侵香案濕　雨華應共石床平
深洞長松何所有　儼然天竺古先生

此の詩は國譯唐詩選に就て見るべし、但し蘭若の意義を畧叙せざるべからず、「レンニャ」は梵語、譯して「無諍聲」「意樂處」「閒靜」又は塚間牛鳴の及ばざる處、之を假りに「寺」と云ふ、寺は

元來支那の役所、然るに僧伽が住する所となりてより、蘭若の意味を寺に用ひたるものなり、精舍も殆んど意義を同うす、鴻齋は「勅額の有るを寺と云ひ、無を蘭若と云ふ」と何の據る所なき說なり、寧齋は蘭若は梵語にして寺觀の謂なりと、何等の臆斷ぞや、寺は僧に就くも、觀は道士に就く、僧は觀には住せず、道士は寺に住せざるなり、詩人が佛典を解せずして住往無稽の事を言ふ、戒愼すべきことなり、

送友人游江南　耿湋

遠別悠悠白髮新　江潭何處是通津　潮聲偏懼初來客
海味唯甘久住人　漠漠煙光漁浦晚　青青草色定山春
汀洲更有南回雁　亂起聯翩北向秦

【略傳】耿湋は寶應の進士、左拾遺と爲る、大曆十才子の一人、

【句釋】送友人游江南楊子江南卽ち浙江江蘇一帶の地を總て江南と云ふ、遠別悠悠白髮新路の遠きと別を惜しむとの二に依て白髮が新たに生ず、江は浙江、潭は潭州、何處是通津此の何處の文字が前句の遠別の字を活かす、何處か定まらず、竟に白髮を添新する所以、潮聲偏懼初來客長安は元來山國なり、潮聲の大なるを聞くあらず、然るに此の道中浙江に到りて始めて潮聲を聞き大に懼るるものあらん、海味唯甘久住人初來の客は懼るるが、久住の人と爲らば慣れて竟に其の海邊の趣味を愛する意とならん、漠漠煙光漁浦晚是れ道中を云ふ、漁浦を過ぎる時は漁燈の光浦汀の煙の漠漠と連なるを見玉はん、青青草色定山春青青は茂盛の形容詞、定山は浙江の杭州に在り、汀洲更有南回雁南方より北方へ回るの雁、君が江南へ著する時分、雁は却て北へ回るの時ならん、亂起聯翩北向秦君が江南へ著したら其の道中無異なりと雁に信を托し玉へとの意を寓す、秦の都は咸陽、咸陽は卽ち長安なり、

【評論】此の篇、才子の才子たる面目は表はれざるも、句句、水に關する字を用ひたる所、工夫の存する所ならん、曰く江潭二句曰く潮聲三句曰く海味四句曰く漁浦五句曰く汀洲七句僅かに起句と結句、情懷を叙す、以て人を送るの眞を見る、亂起の二字、何の故に亂の字を特に用ひたるやは疑はし、

送別友人

姚合

獨向山中覓紫芝　山人勾引住多時　摘花浸酒春愁盡
燒竹煎茶夜臥遲　泉落林梢多碎滴　松生石底足旁枝
明朝却欲歸城市　問我來期總不知

獨山中に向つて紫芝を覓む、山人に勾引せられ住まること多時、花を摘み酒に浸して春愁盡き、竹を燒き茶を煎じて夜臥遲し、泉は林梢より落ちて碎滴多く、松は石底に生じて旁枝足る、明朝却て城市に歸らんと欲す、我に來期を問へども總て知らず、

【句釋】送別友人『全唐詩』の姚合集に留別山中友人に作る、此の方可なり、獨向山中覓紫芝藥艸の紫芝を覓めんが爲め山中に入る、他意あるにあらず、然るに山人は勾引卽ち「ヒキトドメテ」我も遂に住多時住は「トヾマル」暫時と多時と意義を同うす、摘花浸酒春愁盡花を酒に浸して我に飲ましむ、我豈春に對する愁の盡きざるあらんや、燒竹煎茶夜臥遲枯竹を薪と爲し茶を煎て以て玄談を試む夜臥の遲き所以、泉落林梢多碎滴泉は瀑布、崖より落下する瀑布が林の

梢にかかる、其の飛沫の多きを云ふ、松生石底足旁枝石底に生ずる松は自由に天に向つて聳ゆる能はず、是の故に枝が非常に多く生じたるなり、明朝却欲歸城市勾引せられて一宿したるが明朝は城市の人と爲らざるべからず、問我我とは姚合なり、問ふ者は山人なり、總不知姚合が山人に向うて再訪の期は豫かじめ知らずと答ふ、

【評論】此の篇、山中の狀態、山人の優待、我の意志、叙し得て分明、晩唐の律詩として佳なるもの、多二字あるは疵とす、山の二字は妨げず、

嶺南道中

李德裕

嶺水爭分路轉迷　桄榔葉暗蠻溪　愁衝毒霧逢蛇草
畏落沙蟲避燕泥　五月畬田收火米　三更津吏報潮雞
不堪腸斷思鄉處　紅槿華中越鳥啼

嶺水爭ひ分れて路轉た迷ふ、桄榔葉暗蠻溪に暗し、毒霧に衝かれんことを愁へて蛇草に逢ひ、沙蟲に落ちんことを畏れて燕泥を避く、五月畬田火米を收め、三更津吏潮雞を報ず、腸斷るに堪へず鄉を思ふ處、紅槿華中越鳥

啼く、

【句釋】嶺南は今日の廣東省地方一帶を云ふ、古の閩越、蠻夷の部と爲すを以て禹貢九州の域外に屬す、李德裕が宣宗の大中二年崖州の司戸參軍に貶せられて來る其の道中作る所の詩、嶺水爭分南北に分れて水の奔流するを云ふ、路轉迷轉を和訓「ウタタ」と爲すが、運の義なれば、山なぞをグルグルめぐるの義を的切とす、桄榔は日本に無き植物、椶櫚に似て、枝條無く、其の巔に葉を生ず、俗に「タガヤサン」と云ふ樹　椰葉は椰子、熱帶地方に多く產す、其の椰子の葉が茂盛す、此の二植物の實は共に食ふべきなり、暗蠻溪暗なるが故に路迷ふ、愁衝毒霧逢蛇草『後漢書』の馬援傳に馬援交趾を討て曰く下潦上霧毒氣蒸薰たり、永州の異蛇草を齧んで盡く死す、人來りて其の草に觸るれば指を墮し、腕を攣ますと、畏落沙蟲避燕泥毒蛇の鱗の中に沙蟲と云ふ蟲ありて常に蛇を苦しむ、蛇則ち身を急流水に樹つ、或は沙中に臥して碾る、蟲沙に入ると、人之に中るときは三日にして死すと、此の二句十四字の意味は要するに毒霧だけは折角逃れたるが、蛇草と云ふ嫌ふべき草には逢うた、沙蟲と云ふ毒蟲に逢はんことを畏れて一種の恐怖病に罹り燕泥なぞは畏るべきものにあらざるが、此の燕泥までも毒にあらずやと疑ひ畏るる氣に爲つたと云ふなり、五月畬田新開の田を畬田と云ふ、收火米五月に米を收むるは一年に兩度收穫あれ

ばなり、水耨にあらずして火畊、卽ち草を爇いて田を種うるなり、三更今日の時間で言はば、午前零時頃なり、津吏は湊を守る官吏、報潮雞已に船が出帆する事を諸人に告ぐ、不堪腸斷思鄉處此の如き蠻地へ貶せられたるの因果を思へば腸は方に斷んとす、我が鄉土の好きを思はざるを得ん、紅槿華中此の春夏盛んに開き、秋冬は差や少なしと『嶺南異物志』に出づ、兎に角朝開き暮に落つる短命の花なり、越鳥は鷓鴣なり、

【評論】此の篇、動物の名多きを以て三尺童子も記憶する所のもの、曰く蛇曰く蟲曰く燕曰く鷄曰く鳥、何に於て何の妨げ無きものの如くなれど、詩の病と言はざるを得ず、德裕の人品、古今の批評は寧齋の『三體詩評釋』に詳し、就て看るべし、

病氣　來鵬

春初一臥到秋深　不見紅芳與綠陰　窗下展書難久讀
池邊扶杖欲閒吟　藕穿平地生荷葉　笋過東家作竹林
在舍渾如遠鄉客　詩僧酒伴鎭相尋

春初に一たび臥して秋の深くるに到る、見ず紅芳と綠陰とを、窗下書を展

いて久しく讀み難し、池邊杖に扶けられて閒吟せんと欲す、藕は平地を穿つて荷葉を生じ、笋は東家に過ぎて竹林と作る、舍に在つて渾て遠鄉の客の如し、詩僧酒伴鎭に相尋ぬ、

【略傳】來鵬は昭宗の時の人、詩思淸麗なり、福建の韋尙書岫、其の才を愛して女を以て之に妻はせんと欲す、果さず、後蜀に游んで夏課の卷中に詩あり、一把綠荷風剪破す、嫌ふ他の秋雨珠を成さず、識者以て不祥と爲す、是の歲卒す、又『才子傳』に鵬詩に工、蓄鋭既に久し、自ら年長するまで家貧にして不達なるを傷み、頗る亦忿忿たり、故に多くは意を寓して譏訕すと、

【句釋】春初一臥發病の時節は一月なり、到秋深八月に至りて漸く起つ、不見紅芳與綠陰紅芳の春、綠陰の夏、空しく光陰を消したるなり、窗下展書難久讀是れ屋內に在つての事、池邊扶杖欲閒吟是れ屋外に在つての事、共に病後の身體、意の如くならざるを云ふ、藕穿平地生荷葉是れは池畔に住する者の直ちに首肯する實況なり、花は平地に生ぜざるが、葉は道を穿ちて生ずるもの、笋過東家作竹林竹の性、多く東南を愛すと、此の二句見る所の實況なり、在舍渾如

遠鄉客我は主人たるの思を爲さず、却て遠方より來れる客の思を爲す、其の故は詩會酒伴鎭相尋我より訪問をせず、彼より問ひ來る、鎭の字は按也重也壓也と注して常恒にとの意なり、

【評論】此の篇、五六の二句を除く外、句句病と關せざるは無く、言言切實、毫も浮泛ならず、第五句特に名句と爲すべし、秋日東郊より此に至る六首、前虛は老蒼にして後實は淸新なる者、素隱の說は前聯は專ら情思を盡くし、後聯は景物を略叙し、結句にて情思を述べたるものと、

送李錄事赴饒州　皇甫冉

北人南去雪紛紛　雁過汀洲不可聞　積水長天隨逐客
荒城極浦足寒雲　山從建業千峯出　江到潯陽九派分
借問督郵纔弱冠　府中年少不如君

北人南に去つて雪紛紛、雁は汀洲を過ぎて聞くべからず、積水長天逐客に隨ひ、荒城極浦寒雲足る、山は建業より千峯出で、江は潯陽に至つて九派分る、督郵を借問すれば纔に弱冠、府中の年少君に如かず、

【句釋】送李錄事此の人詳らかならず、饒州は吳地に屬す、北人は李を云ふ、長安は北方に屬

す、南去饒州は長安より南方に當る、今日の江西省南昌府鄱陽湖の傍、雁過汀洲不可聞長安の汀洲を今過ぎ去る、當分は其の消息を聞くに由なきなり、積水は大江を指す、元來海の異名を積水と云ふ、素隱は海を涉りて行く如くに注すと雖も、長安より饒州への道中、何れの處に海あらんや、以て楊子江を云ふと知るべし、長天江の長きを云ふ、隨逐客秦に逐客令を出したるあり、今の行榮轉にはあらず、左遷なれば逐客と同樣なり、荒城必ず定まりし城あるにあらず、極浦は極まり無き浦汀なり、足寒雲寒雲と云ふ寂莫たるもの有るは反對に行人に溫暖の氣無きなり、俗語で言はば萬事不自由なり、山從建業今の江蘇省蘇州を建業と云ふ、卽ち金陵、建康なり、千峯出金陵邊は山益す多くなるを云ふ、其の實地理としては南方山少なきなり、江至潯陽今の江西省九江府德化縣治を潯陽と爲す、九派分烏白江と蚌江と烏江と嘉靡江と畝江と源江と廬江と提江と菌江と各の分流する、借問の字義は試みに問ふなり、督郵は郡吏、卽ち郡長の部下に屬する官人、陶淵明が彭澤縣の令と爲りし時、此の督郵を衣冠束帶して見ゆるを嫌ひ官を辭せしこと「歸去來辭注」に見ゆ、日本と全く反對に郡は縣の上に在り、今其の饒州の督郵と爲る君は年二十歲なれば纔弱冠と云ふ、素隱和尙及び鴻齋老人は督郵は李錄事外の人なりと辨ずるが非常に誤まりなり、府中年少不如君素隱の如きは此の句を解して府中の年少は君の年

長には及ばずと、全く反對なり、府中に在つて第一の年少は君なりと云ふに在り、君に及ばずとの意にあらず、君の如き年少は無しとの意、

【評論】此の篇、寧齋は非常なる名篇の如く評すと雖も、拙にもあらず、又名篇にもあらざるなり、隨逐客の語の如き其の速かに行くを形容するにあるか、或は李の事を云ふなるや、分明を缺く所あり、此の篇を讀む者は宜しく紀曉嵐の眼孔無かるべからず、

清明日與友人游玉塘莊　來鵬

幾宿春山共陸郎　清明時節好風光　細穿綠苔船頭滑
碎踏殘華屐齒香　風急嶺雲飄迥野　雨餘田水落芳塘
不堪吟罷東回首　滿耳蛙聲正夕陽

幾たびか春山に宿して陸郎と共にす、清明の時節好風光、綠苔を細穿して船頭滑に、殘華を碎踏して屐齒香し、風急にして嶺雲迥野に飄り、雨餘つて田水芳塘より落つ、吟じ罷むに堪へず東に首を回らせば、滿耳の蛙聲正に夕陽、

【句釋】清明日は三月の節、冬至を去る一百五日を寒食と云ふ、其の寒食の三日後を清明節と云ふ、宮廷より楡柳の火を近臣に賜ふ正に是れ此の時、玉塘莊は蜀中に在り、幾宿春山共陸郎今友人を晉の陸機に比譬する、陸機に春游の詩あればなり、清明時節好風光暖にあらず寒にあらず、一年の好風光、實に此の時に在り、細穿綠荇荇は「ウキクサ」此の荇が綠色を呈して江に在る、此の江中を細かに穿ちて船頭滑船に荇が當るゆゑ船の頭が滑らかになる、是れ水游、碎踏殘華屐齒香庭中の落花を踏み碎くが故に屐齒が自然と香ばし、是れ陸游、風急嶺雲飄迥野嶺頭の雲が風の急吹に依て其の散亂して迥野に遍ねきなり、是れ高處の景、雨餘田水落芳塘田田に水の衰衰たるは雨後なるに由る、芳草池塘を略して芳塘と稱す、不堪吟罷東回首東より首を西に回らすなり、東の京を望むなぞと解するは鑿に過ぐ、滿耳蛙聲正夕陽種種の景色を見、且吟じ且行く、而かも首を回らす時は、蛙聲閣閣と耳に滿ち日影は西に沈まんとす、情是に於てか堪へざる所以、

【評論】此の篇、第二句の「好風光」の三字を以て以下の句を悉く出生する、高處、低處水游、陸游、皆好風光ならざるは無し、此の好風光も賞すること久しからず、終に感慨に結歸する所以、以前二首三四句情中に景有るもの、

宿淮浦寄司空曙　李端

愁心一倍長離憂　夜思千重戀舊游　秦地故人成遠夢
楚天多雨在孤舟　諸溪近海潮皆應　獨樹邊淮葉盡流
別恨轉深何處寫　前程唯有一登樓

【略傳】李端は趙州の人、大曆五年に秘書省校書郎を授けらる、後官を辭し、終南山の草堂寺に居す、後、杭州司馬と爲る、後、衡山に隱れ、自ら衡嶽幽人と號す、

【句釋】宿淮浦河南道の徐州、司空曙字は文明、廣平の人、是の時、長沙に謫せられて在り、司空曙は方外の人僧と交はり、其の詩亦清秀一家を爲す、愁心一倍長離憂今李端が浙江杭州の司馬と爲て赴むく途次此の淮浦に宿し、客路、種種の想を生じ、離憂が一倍增すことを云ふ、長は「ナガキ」の平聲にあらず、增長の仄聲とす、夜思千重戀舊游終南山に在て山林の游びを樂